

## 資料集(10)

### エンペドクレス

#### A 生涯と学説

##### 生涯

###### 1

ディオゲネス・ラエルティオス(『ギリシア哲学者列伝』VIII 51 ff.)

(51)エンペドクレスは、ヒッポボトスのいうところによると、エンペドクレスの子のメトンの息子で、アクラガスの人であった。ティマイオスも『歴史』第15巻においてこれと同じことを語っており、加えて詩人の祖父のエンペドクレスは著名な人物であったと述べている。ヘルミッポスもまたティマイオスと同じことをいっている。同様にヘラクレイデスも『病気について』の中で、彼は輝かしい家柄の出であって、その祖父は馬を飼育していたと語っており、エラステネスも『オリュンピア競技勝利者記録』において、メトンの父が第71オリュンピア競技[前496年]の優勝者であったと、アリストテレスを証人として語っている。(52)文法家のアポドロスは『年代記』において次のようにいう。

彼はメトンの息子であったが、トゥリオイへ、  
それがすっかり建設され終わったばかりのところへ  
やってきたとグラウコスはいう。

それからさらに次のように加えている。

彼は故国から亡命者としてシュラクウサイへやってきて、  
彼の地の人々と共にアテナイ軍と戦ったと伝えている人たちは  
完全に間違っているようにわたしには思われる。  
なぜなら[その時には]彼はもはや生存していなかったか、すっかり年を取っていた  
かであって、そのようなことは決してありえないと思われるからである。

実際アリストテレスは、それにまたヘラクレイデスも、60歳で彼は生を終えたといっている。第71オリュンピア競技で競馬に優勝したのは彼の同名の祖父であった。したがって彼の年代も同時にアポドロスによって示されていることになる。

(53)サテュロスも『伝記』の中で、エンペドクレスはエクサイネトスの息子で、彼自身もエクサイネトスという名の息子を残したといっている。そして同じオリュンピア競技において彼は競馬で、彼の息子はレスリングで、あるいはヘラクレイデスが『摘要』においていうところによれば、競走で優勝したとのことである。パボリノスの『覚書』の中にわたしはエンペドクレスが奉獻のための使節に蜂蜜と麦粉から出来た雄牛を捧げたという記事を見出した。そしてまた彼にはカリクラティデスという名の兄弟がいたということも。ピュタゴラスの子のテラウゲスは、ピロラオスに宛てた手紙の中で、エンペドクレスはアルキノモスの息子であるといっている。(54)彼がシケリアのアクラガスの市民であったことは、彼自身が『カタルモイ』の冒頭で語っている。「おお、友よ、褐色のアクラガス河畔の大いなる町、都の高みに住む人々よ。」彼の生まれについてはこれだけにしておこう。

彼はピュタゴラスから学んだとティマイオスは『歴史』第9巻において伝えているが、またその

当時起こった学説の剽窃に係わって嫌疑をかけられ、(プラトンもまたそうされたように) 講筵に列することを拒まれたとのことである。また彼自身も次のようにいってピュタゴラスに言及している。

「かの者たちの中に並はずれた知識を有するひとりの男がいた。まことにその者は心の最も豊かな富をわがものとしていた。」だがある人々は、これはパルメニデスに向けていわれたものであるという。

(55)ピュタゴラス学徒はピロラオスやエンペドクレスの時代まで教義を共有していたが、エンペドクレスが詩によってそれらを公表してしまったので、いかなる詩人も教義に関与させてはならないという法を制定したと、ネアンテスはいう。(またネアンテスは、プラトンもこれと同じ扱いを受け、講筵に列することを拒まれたといっている。) とはいえ、ピュタゴラス学徒の誰の講義をエンペドクレスが聴いたのかは、ネアンテスは語っていない。というのも、ヒッパソスやプロティノスの講義に彼が列席したというテラウゲスのものとして流布している書簡は信ずるに値しないと、ネアンテスはいうからである。

テオプラストスは、彼はパルメニデスの崇拝者で、詩においてその模倣者であったといっている。というのは、かの人〔パルメニデス〕もまた自然についての論を叙事詩の形で公にしたからと。(56)しかしヘルミッポスは、パルメニデスではなく、クセノパネスの崇拝者となり、この人と親交を結び、その叙事詩を模倣したのだという。そして後になってピュタゴラス学徒たちと交わりを持ったのだと。アルキダマスは『自然学』において、ゼノンとエンペドクレスは同時期にパルメニデスの講義を聴いたが、後にはそこを去り、一方ゼノンは独自に哲学したが、エンペドクレスはアナクサゴラスやピュタゴラスの弟子となり、前者とは生き方や姿の荘重さを張り合い、後者とは自然学説を張り合ったといっている。

(57)アリストテレスは『ソピステス』において、エンペドクレスが初めて弁論術を発見し、ゼノンが弁証法を発見したという。またアリストテレスが『詩人について』においていうところによれば、エンペドクレスはホメロス風の詩人であって、巧みに比喻を用いたり、詩作に関するその他の技法を的確に使用するなど、語法に関する練達の人であった。それゆえ彼は、他にも詩を書いているが、『クセルクセスの遠征』と『アポロン讃歌』を書いた。しかしそれらは後に彼の姉妹のひとり(あるいはヒエロニューモスのいうところによれば、娘)が焼いてしまった。一方の讃歌は故意にはなかったが、他方のペルシア戦争に関する方は未完成であったために故意にであったとのことである。(58)また総括的にもアリストテレスは、エンペドクレスは悲劇も政治論も書いたといっている。だがサラピオンの子ヘラクレイデスは、それらの悲劇は別の人の手になるものであるという。しかしヒエロニューモスは43篇〔のエンペドクレスの悲劇〕に出会ったといっているし、ネアンテスはそれらの悲劇をエンペドクレスは若い頃に書いたのであり、その内の7篇に出会ったといっている。

サテュロスは『伝記』において、彼は医者でもあれば、またすぐれた弁論家でもあったと語っている。いずれにせよレオンティノイのゴルギアスは彼の弟子であった。この人は弁論において卓越した人物であって、その技術を後世に残した。彼〔ゴルギアス〕は100と9年間生きたとアポドロスは『年代記』において語っている。(59)自分はエンペドクレスが魔法を行なうところに居合わせたことがあるとゴルギアスが語ったと、サテュロスはいう。エンペドクレス自身も諸々の詩によってこのことを、そしてまた他の多くのことを告げ知らせており、彼は次のように語っている。

病や老齢を防ぐものとなるすべての薬を汝は聞き知ることになろう。

まことにわたしはただ汝ひとりのためにこれらのことすべてをなし遂げるのであるから。

大地の上に押し寄せ、その息吹によって田畑を荒廃させる

疲れを知らぬ風の力を汝は鎮めるであろう。

また逆に、もしそれを汝が望むなら、汝はそれに対向する風の息吹をもたらずであろう。

汝は人間どものために暗い長雨を変じて時期に適った日照りとなし、  
また夏の日照りを変じて天空より流れ出て樹々を育む水の流れとなすであろう。  
また汝はハデスから亡き人の力を連れ戻すであろう。

(60)またティマイオスも『歴史』第18巻において、この人〔エンペドクレス〕は多くのことで人々を驚かしたと語っている。すなわちある時、季節風が激しく吹いて作物が傷めつけられたことがあったが、彼は驢馬の皮を剥いで革袋を作るように指示し、風を捉えるためにそれらを山頂や尾根に張らせた。かくして風が鎮まったとき、彼は「風を封じる人」と呼ばれたとのことである。ヘラクレイデスは『病気について』の中で、彼はまた呼吸を停止した女性に関する諸々のことをパウサニ阿斯に教示したと語っている。このパウサニ阿斯は、アリストティポスとサテュロスのいうところによれば、彼の愛人であったとのことであるが、実際また『自然について』は次のごとく彼に向けて語りかけたものであった。

パウサニ阿斯よ、聞くがよい。賢明なるアンキトスの息子よ。  
さらにまたエンペドクレスは彼に寄せて次のようなエピグラム〔碑銘詩〕を作った。(61)

アンキトスの息子、アスクレピオスの子孫たる男子、医術者と  
〔正当に〕呼ばれし医者パウサニ阿斯を、祖国ゲラは育てり。  
彼はひどい苦しみにて衰弱せし多くの人々を  
ペルセポネの奥宮より連れ戻せり。

この呼吸を停止した女性というのは、次のようなものであったとヘラクレイデスはいふ。すなわち30日間彼女は呼吸もせず、脈も打たずにいたにもかかわらず、身体を元の状態のままに保ったのである。ここからヘラクレイデスは彼のことを医者でもあれば予言者でもあるというのであり、この結論をまた同時にヘラクレイデスは以下の詩句からも引き出しているのである。

おお、友よ、褐色のアクラガス河畔の大なる町に、  
都の高みに住む人々よ。善き業に心がける人々よ。  
幸いあれ。わたしは御身らにはもはや死すべき者としてではなく、不死なる神として、  
ふさわしい尊敬を身に受けながら、すべての者の間を歩み行く。  
リボンと華やかな冠を頭に戴いて。  
華やかに咲き誇る町にわたしがいたり着く時はいつも、これらの人々に、  
男にも女にも、わたしは崇め奉られる。これらの者たちは万をなして付きしたが、  
そのある者は利得にいたる道はどこにあるかと尋ね、  
またある者は予言を求め、またある者はあらゆる種類の病について、  
その治療の託宣を聞こうと問い求める。

(63)アクラガスを「大なる町」と彼がいったのは、80万もの住民がそこには住んでいたからであると彼〔ティマイオス〕はいふ。そして彼らは贅沢に暮らしていたとエンペドクレスは語っている。曰く、「アクラガスの人々は明日にも死ぬかのように贅沢し、永遠に生きるかのような家を建てている。」まさにこの詩『カタルモイ』を吟遊詩人のクレオメネスがオリュンピア祭で吟誦したといわれており、パボリノスも『覚書』の中でそのことを語っている。またアリストテレスは、クサントスが彼〔エンペドクレス〕に関する記述の中でいっているように、もし彼が本当に彼に提供された王位を辞退したのであれば、彼が単純な生活を王位以上に愛したことは明らかであるから、彼は自由精神の持ち主であり、一切の権力に妥協しない人であったといえると語っている。(64)ティマイオスも同じことを語っているが、同時になぜこの人が民衆派になったかの理由も述べている。彼のいうところはこうである。〔ある時〕エンペドクレスは執政官のひとりから〔食事に〕招待されたことがあった。

食事はこともなく進んでいたが、飲物が一向に運ばれてこなかった。他の者たちは黙っていたが、エンペドクレスは腹立たしくなって、出してくれるよう注文した。ところが招待主は評議会の監督官を待っているのだとのことであった。やがて監督官がやってくると、彼が宴席の座長とされた。もちろんそれは招待主の指名であったが、その男は〔座長に指名されるや〕専制支配の手本のごとき振舞いを始めたのである。すなわち彼は酒を飲み干すか、それを頭に注ぎかけるかするように命じるといった振舞いに及んだ。エンペドクレスはその時は黙っていたが、翌日彼らを法廷に告発し、その両名とも、すなわち招待主も宴席の座長も共に有罪とし、死刑に処したのである。そしてこれが彼にとって政治活動の発端になったとのことである。

(65) また医者のアクロンがその父祖の医学界における功績のゆえをもって記念碑建立のための設置場所を評議会に求めたとき、エンペドクレスが進み出て、それを止めさせた。とりわけ彼は平等ということについて論じたが、また次のごとき疑問を呈した。「どのような言葉をわれわれは刻み込めばよいのであろうか。あるいはこのような言葉であらうか。

アクロンの息子、アクラガスの最高〔アクロン〕の医者アクロン、  
その墓所はいと高名〔アクロタテー〕なる祖国の高き〔アクロス〕岩山なり。」

ある人たちは二行目は次のようであったとしている。

その名高き〔アクロス〕墳墓はいと高き〔アクロタテー〕山頂を占めり。  
若干の人はこれをシモニデスのものとしている。

(66)その後またエンペドクレスは出来て3年であった千人会を解散させた。したがって彼は富裕階層に属す人ではあったが、同時に民衆のことを考える人々のひとりでもあった。少なくともティマイオスは『歴史』第11巻と第12巻において（というのは、彼はしばしばエンペドクレスに言及しているから）、彼は政治活動と詩作において相反する傾向を有していたと述べている。すなわち一方の政治の場面では節度があり温和であるように見えるが、他方の詩作においては高慢で利己的であった。少なくともエンペドクレスは次のように語っている。

幸いあれ、わたしは御身らにはもはや死すべき者としてではなく、  
不死なる神として歩み行く…。

オリュンピアに滞在していたとき、エンペドクレスは、他のいかなる人も集まりにおいて彼ほど噂されたことがないほどの注目を浴びた。(67)しかしながら後にアクラガスが憐れに思ったときも、彼の政敵の子孫たちは彼の帰還に反対した。それゆえ彼はペロポネソスに退き、そこで生涯を終えた。ティモンも彼のことを等閑に付してはおらず、彼を非難して次のように述べている。

エンペドクレスもまた、巷の話を  
がなり立てるだけの男、彼はできる限り詰め込み、  
原理を並べ立てるが、それらの原理はまた別の原理を必要とするのだ。

彼の死についてはいろいろな話が伝えられている。ヘラクレイデスは呼吸を停止した婦人に関する話の中で、どのようにしてエンペドクレスが死者を生き返らせたことで名声を得たかを物語った後、彼がペイシアナクスの畑で犠牲の祭礼を催したことを語っている。彼の友人の幾人かが招かれたが、その中にパウサニ阿斯もいた。(68)さて祭礼の後、他の人々は離れて休んだが、すなわち傍らの畑の樹木の下で休む者もあれば、それぞれその好むところで休む者もいたが、エンペドクレス自身は祭礼の際に座していたその場にそのままとどまっていた。やがて夜が明け、人々は起き上がったが、ただひとりエンペドクレスだけは見出されなかった。そこで人々は彼を探し、召使たちにも問いただしたが、彼らは知らないと答えるばかりであった。だがその内のひとりの者が、夜中にエンペドクレスを呼ぶ途方もない大きな声が聞こえ、それでとび起きてみると、天からの光と松明の明かりが見え、それ以

外には何も見えなかったと証言した。その出来事に人々は狼狽したので、パウサニアスは降りて行って人々を彼の搜索に遣った。しかしやがて彼は「祈りに値する思いがけないことが起こったのであり、神になったものとして彼にも犠牲を捧げるべきである」といって、それ以上探索することを止めさせたとのことである。

(69)パンテティアという名の医者に見放されていたアクラガスの一女性を彼は癒したのであり、そのために犠牲の祭礼を執り行なったのだと、ヘルミッポスは伝えている。それに招かれた人は80名近くであったという。またヒッポボトスは、彼は宴席から立ち上がってアイトナ〔エトナ〕火山に赴き、火口に到着するや、それに飛び込んで姿を消したという。そしてそれは神になったという彼にまつわる風評を立証せんがためであったが、彼のサンダルのひとつが吹き出されて、事の次第が明らかになったという。というのは、彼は青銅製のサンダルを履くのを常としていたからである。だがこの説にパウサニアスは反論している。

(70)エペソスのディオドロスはアナクシマン드로スについて記している中で、彼〔エンペドクレス〕は、悲劇のごとき尊大な態度をとったり厳かな衣装を身に着けたりして、アナクシマン드로スと張り合ったといっている。また傍を流れる川からの悪臭によって疫病がセリヌゥスの人々を襲い、その結果住民に死者が出たり、また女たちも難産に苦しんだとき、エンペドクレスは近くを流れる川の二つを私財を投じてその川に引き入れ、それらを混ぜ合わせて流れを中和することを思いついた。そのようにして疫病が鎮まったので、セリヌゥスの人々が川の畔で祝宴を催していたとき、エンペドクレスが現れた。人々は立ち上がり、神に対するかのように彼の前に平伏して祈ったという。そこで彼は〔セリヌゥスの人々の〕その判断を確固たるものにしたいと思い、火口に飛び込んだとのことである。(71)だがティマイオスは、彼はペロポネソスに退き、そこから一度も帰ってくることはなかったと明言して、そのことに反論している。彼の終焉がはっきりしないのはこのためであるという。ティマイオスはこの反論をヘラクレイデスに対してなしているものであり、しかも『歴史』第14巻ではその名を挙げて行なっている。すなわち、ペイシアナクスはシュラクゥサイの人で、アクラガスに畑を持ってはいなかった。もしそういった話しが流布していたとすらなら、パウサニアスが友人のために記念碑か像か、あるいは神に捧げるような墓所を造っていたことであろう。というのも、この人は裕福だったからとティマイオスはいうのである。ティマイオスはいう、「ところで、どうして彼は〔エトナ火山の〕火口に飛び込んだのか。その近くに居たということは一度も語られていないのに。したがって彼はペロポネソスで死んだのであって、(72)彼の墓が見出されないからといって、不思議とするには当たらない。なぜなら他の多くの人の場合にもそのようなことはあるからである。」このようにいった後、ティマイオスは次のように付言している。「ヘラクレイデスは絶えずこの種の不思議な話をする人物であって、彼はまた人間は月から落ちてきたなどと語っているのである。」

以前にはアクラガスにヴェールを被せたエンペドクレスの銅像が置かれていたとヒッポボトスは伝えている。後にそれはローマの元老院の前にヴェールを取った形で置かれていたが、それはもちろんローマ人がその地に移したものである。実際また幾枚もの〔エンペドクレス〕画像が今日も流布しているという。キュジコスのネアンテスは、彼はまたピュタゴラス学徒たちについても語っているが、次のようにいっている。メトンが死んだあと、僭主政治が台頭し始めた。そこでエンペドクレスは内紛を止めるようアクラガスの人々を説得し、政治的平等を諭し教えた。

(73)さらに彼は、市民の娘たちの多くが嫁資を持たないでいたので、そのあり余る富の中から彼女たちに持参金を持たせてやったとのことである。それゆえに彼は、パボリノスが『覚書』においていふところによれば、紫衣を身に着け、金色のベルトを巻いていたのである。また青銅の履物を履き、デルポイの花冠を頭に戴いていた。彼の髪の毛は濃く、子供たちを付きしたがえていた。また彼は常

にひとつの举措を持し、気難しい表情をしていた。このような姿で事実彼は〔街中を〕歩いたのであり、出会う市民たちはそれをまた一種の王権の印とも考えたとのことである。しかし後に彼はある祭典のためにメッセネへ赴く途中、馬車から落ちて大腿骨を折った。それがもとで病気になり、77歳で没したとのことである。なお彼の墓はメガラにある。

年齢については、アリストテレスは見解を異にしている。というのも、アリストテレスは、彼は60歳で死んだと述べているからである。別の人は109歳であったとしている。第84オリュンピア祭年〔前444-441年〕に彼は盛年であった。トロイゼンのデメトリオスはその書『ソピストたちに対して』において、ホメロスをもじって次のように書いている。

高き山椒の木に高く結ばれし縄の輪に  
首を吊し、その魂はハデスへと下って行けり。

先に述べたテラウゲスの手紙では、彼は老齢のゆえに海に滑り落ちて死亡したと語られている。彼の死についてはこれだけのことが、このようにいわれている。

『パンメトロン』の中の彼に寄せたわれわれの揶揄的な一片もまたここに持ち出されるのであって、それは次のようなものである。

汝、エンペドクレスはかつて燃え立つ火焰でその身体を清め、  
不死なる火口からの火を飲み干せり。  
だがわれは汝が好んでアイトナの〔火焰の〕流れにその身を投ぜしとはいわず。  
さにあらず、人目を逃れることを欲せしとき、汝は否応なく落ち行けり。

また別のはこうである。

然り、確かにエンペドクレスはある時馬車から落ち、  
右大腿骨を骨折して死んだという話があるのだ。  
もし彼が火口に飛び込んで生を飲み干したとするなら、  
どうして今なお彼の墓がメガラでそれと指し示されるのか。

彼の見解は次のようなものであった。元素は四つあり、火、水、土、空気がそれである。そしてそれらを結合する「愛」と分離する「争い」がある。次のように彼は語っている。

白く輝けるゼウス、生命育むヘラ、またアイトネウス、  
そして死すべきものの泉をその涙で濡らすネスティス。

火を彼はゼウスといい、土をヘラ、空気をアイトネウス、水をネスティスというのである。「そしてこれらは永遠に交替しつづけて、決して止むことがない」という。宇宙のこの秩序を永遠であるとしているわけであるが、いずれにせよ彼は次のように付言している。

ある時は愛によってすべてが集まってひとつとなり、  
ある時は争いの憎しみによってそれぞれはまた再び別々にされる。

(77)また太陽は火の巨大な集合体であって、月より大きいという。月は円盤状で、天界そのものは氷である。そして魂はあらゆる種類の動物や植物の姿を身に着けるのである。彼は次のように述べている。

なぜならわたしはすでに一度は少年であり、少女であり、  
藪であり、鳥であり、海に浮かび出る燔祭の魚であったがゆえに。

ところで彼の手になる『自然について』と『カタルモイ』は5000行にも及んでいる。『医術論』は600行に及ぶ。悲劇については先に述べた。

### 『スーダ』(「エンペドクレス」の項)

エンペドクレスはメトンの子。ある人によればアルキノモスの子であり、別の人によればエクサイネトスの子である。彼にはまたカリクラティデスという名の兄弟があった。

彼は最初パルメニデスの講義を聴いた。ポルピュリオスが『哲学史』においていうところによれば、この人の稚児にもなったとのことである。だが別の人たちは、エンペドクレスはピュタゴラスの息子のテラウゲスの弟子であったとっている。

彼はアクラガス出身の自然哲学者であり、叙事詩人であった。

第79オリュンピア祭年期〔前464-461年〕に彼は生存していた。

彼は頭に金の冠を戴き、足には青銅製の履物を履き、手にデルポイの花冠〔の付いた杖〕を持って諸都市を巡り歩いたが、それは神であるとの彼にまつわる風評を定着させようとしてであった。老齢にいたって、彼は夜中火口に身を投じた。それは遺骸が発見されないようにとの配慮からであった。そのようにして彼は死んだが、そのサンダルの方が火口の火によって投げ出された。また彼はアクラガスを襲った暴風を驢馬の皮を町の周りに張りめぐらすことによって撃退し、そのことによって「風を封じる人」と呼ばれた。

レオンティノイの弁論家ゴルギアスは彼の弟子であった。

また彼は『事物の自然〔本性〕について』2巻を叙事詩の形で著した(それは2000行ほどの詩である)。そしてまた医学書を散文で書き、その他多くのものを書いた。

## 3

### プリニウス(『博物誌』XXIX 1,5)

アクラガスのアクロンが自然学者エンペドクレスの権威に推されることによって、もうひとつ別の一派がシケリアに興ったが、それを彼らは経験を重視するところから「経験派」と呼んでいる。

### 『スーダ』(「アクロン」の項)

アクロンはアクラガスの人、医者にしてクセノンの息子。彼はエンペドクレスと同時期にアテナイで活躍した。したがって彼はヒッポクラテスより年長である。『医術について』を彼はドリス方言で書いた。また『健康によい食物について』1巻を書いた。彼はまた一定の氣息をある兆候と考えた人々のひとりである。エンペドクレスは彼に寄せて揶揄的なエピグラム〔碑銘詩〕を作っている。

### プルタルコス(『イシスとオシリスについて』79 p.383 D)

いずれにせよ医者アクロンは、アテナイで疫病が大流行したとき、病人の傍らで火を燈すように指示して高く評価されたとのことである。

### ガレノス(『治療の仕方について』I 1 [X 5 K.])

そして以前にコスとクニドスの人々の間で互いに発見の数で相手に勝つことを競って、相当な争いがあった。というのは、アジアのアスクレピオスの流れを汲むこの学統は、ロドスのそれは〔すでに〕消滅していたが、いまだ二派に分かれていたからである。そしてその人々にまたイタリア出身の医者たちが、すなわちピリスティオン、エンペドクレス、パウサニ阿斯、それに彼らの仲間たちが、ヘシオドスのいうかの「よき争い」を挑んだのであった。

## 4

## 7

アリストテレス (『デ・アニマ』A 2. 405 b 1)

もっと平凡な人々のある人たちは〔魂を〕水であると唱えた。例えばヒッポンがそうである。彼らは種子から、すなわちそのすべてが湿っているということから、このように信じたものと思われる。というのも、彼〔ヒッポン〕は「魂を血液であると主張する者たち」を、種子は血液でないという理由で論駁しているからである。

5

『スーダ』(「ゼノン」の項)

彼〔ゼノン〕は『争論』『エンペドクレス注解』『哲学者たちを駁す』『自然について』<sup>1</sup>などを書いた。エンペドクレスが弁論術の発明者であるように、彼は弁証法の発明者であるとされている。

- 1) ここでは校訂者は後者の二著を一冊の書物と解し、『自然について論じる哲学者たちを駁す』というように読んでいるが、ゼノンの章のA 2と整合性を持たせるために上記のように読んでおく。

6

アリストテレス (『形而上学』A 3. 984 a 11)

クラゾメナイのアナクサゴラスは年齢の点では彼〔エンペドクレス〕より前の人であるが、仕事の点では後であって、原理は無限定〔無数〕であると主張する。

7

シンプリキオス (『アリストテレス「自然学」注解』25,19)

アクラガスのエンペドクレスはアナクサゴラスの後ほどなくして生まれ、パルメニデスの信奉者にして追隨者であるが、さらに一層ピュタゴラスの徒の追隨者であった。

8

エウセビオス (『福音の準備』X 14,15)

暗い人ヘラクレイトスが知られていた時代にエンペドクレスはテラウゲスの弟子となった。

9

エウセビオス (『年代記』)

第81オリュンピア祭年の第1年〔前456年〕: エンペドクレスとパルメニデスが自然学者として知られていた。

ゲリウス (『アッティカの夜』XVII 21,14)

ほぼこの時代〔前477年と前450年の間〕にアクラガスのエンペドクレスは自然哲学の研究において著名であった。

10

エウセビオス (『年代記』)

第86オリュンピア祭年の第1年〔前436年〕: 当時アブデラのデモクリトスも自然哲学者として

8

知られていたし、アクラガスのエンペドクレスやゼノンやパルメニデスも哲学者として知られていたし、コスのヒッポクラテスも知られていた。

11

**アテナイオス** (『食卓の賢人たち』 I 15 E)

オリュンピア競技に競馬で優勝したアクラガスのエンペドクレスは、ピュタゴラス学徒で肉食を控えていたので、没薬と乳香と極めて高価な香料で牛を作って、祭典の出席者たちにふるまった。

12

**アテナイオス** (『食卓の賢人たち』 XIV 620 D)

ディカイアルコスが『オリュンピア競技』においていうところによれば、吟遊詩人のクレオメネスはオリュンピアでエンペドクレスの『カタルモイ』を吟誦した。

13

**ニコマコス** (ポルピュリオス『ピュタゴラス伝』 29、およびイアンブリコス『ピュタゴラス伝』 135 からの復元)

アクラガスのエンペドクレスやクレタのエピメニデスや極北の人アバリスはそれら〔ピュタゴラスの奇跡〕を共にする人たちであって、さまざまところで彼ら自身もまたそういった奇跡を行なっている。彼らの詩がそれを明らかにしているが、またとりわけ彼らの異名、エンペドクレスの「風を封じる人」、エピメニデスの「浄める人」、アバリスの「空中を歩く人」といった異名が明らかにしている。

14

**プルタルコス** (『知りたがりについて』 1 p.515 C)

自然学者エンペドクレスは、重苦しく不健康な南風を平野に吹き込ませる通路となっていた山のあの峡谷を塞いで、その地方から疫病を閉め出したといわれている。

**プルタルコス** (『コロテス論駁』 32, 4 p.1126 B)

エンペドクレスは、市民の中の首領株の連中を、傲慢な振舞いをし、公共の財産を収奪したとして断罪し、〈追放した〉。そしてまた南西の風が平野へと吹き込んでくる通路となっていた山の溪谷を遮断することによって、凶作と疫病からポリスを救った。

**クレメンス** (『雑録集』 VI 30)

アクラガスのエンペドクレスは「風を封じる人」と呼ばれた。いずれにせよ彼は、かつてアクラガスの山から風が吹き込んできて、それが住民たちに耐えがたい害をもたらし、また彼らの妻たちに不妊の原因となったとき、その風を鎮めたといわれている。〔それゆえ彼はその詩において次のようにいっているのである。〕

大地の上に押し寄せ、その息吹によって田畑を荒廃させる

疲れを知らぬ風の力を汝は鎮めるであろう。

また逆に、もしそれを汝が望むなら、汝はそれに対向する風の息吹をもたらすであろう。

また、

ある者は予言を求め、またある者は鉄のごとき病について

〔その治療の託宣を聞こうと〕 彼に付きしたがってくる。

実際ひどい〈苦しみに〉苛まれてきたものだから、

と語っている。

#### ピロストラトス (『アポロニオス伝』 VIII 7, 8 p.158)

デモクリトスがかつてアブデラの人々を疫病から解放したことを思うとき、また度を超して吹き荒れた季節風を鎮めたといわれているアテナイ人のソポクレスのことを思い浮かべるとき、そしてさらにアクラガスの人々の上に襲いかかってきた乱雲の動きを阻止したエンペドクレスのことを聞くと、一体いかなる知者が国家のために努力することをなおざりにしたと君は考えるだろうか。

〔参照〕 ピロストラトス (『アポロニオス伝』 I 2)

なぜならエンペドクレスもピュタゴラスその人もデモクリトスもマゴス僧と交わり、神懸りのなことを数々口にしていたが、決してその術〔魔術〕に誘い込まれることはなかったからである。

#### プリニウス (『博物誌』 XXX 1, 9)

疑いもなくピュタゴラス、エンペドクレス、デモクリトス、プラトンはそれ〔魔術〕を学ぶために渡航した。それは旅行というよりは真実には亡命としてなされたものであったが。そして帰国後彼らはそれを公に披瀝もしたが、また後には秘密にした。

### 15

#### イアンブリコス (『ピュタゴラス伝』 113)

エンペドクレスは、ある若者がすでに剣を抜き払って彼のホストのアンキトスに詰め寄ってきたとき（というのは、裁判官を勤めた際にアンキトスはその若者の父親を国家の名において死刑に処していたからである。それでその若者は怒で我を忘れて、父に死刑判決を下したアンキトスをいわば仇として討とうと、突進してきたのである）、泰然としてリュラを取り、ただちに染み入るような優しい調べをかき鳴らして、詩人〔ホメロス〕の「これぞ悲しみを忘れさせ、怒りを鎮める薬、あらゆる不幸を忘れさせるもの」〔『オデュッセイア』 IV 221〕という詩歌を奏で始めた。そしてそのことによって彼は彼のホストのアンキトスを死から、そして若者を殺人から救ったのである。その後この若者はエンペドクレスの弟子の中でも最も名だたる人になったとのことである。

### 16

#### ストラボン (『地理書』 VI p.274)

〔エトナ火山の〕 そういった光景から多くの伝説が語られるようになったと考えられるのであって、人々がエンペドクレスについて語っているようなのがとりわけそうである。すなわち彼は火口に跳び込んで、履いていた履物（それは青銅製であった）の片方を、そうしたことがなされた痕跡としてあとに残したとのことである。すなわち噴火の力によって吹き上げられたかのように、火口の縁の少し外側でそれは発見されたという。

#### ホラティウス『詩論』 458 ff.)

ツグミを待つ場合のように、鳥刺しが意図して井戸や穴に身を投じているなら、たとえ彼が「おお、市民諸君、助けてくれ」と長い叫び声をあげたとしても、引き上げようと骨折る者はいないであろう。もし誰か、助けようと綱を投げ降ろす者がいるなら、「彼は故意にこの中に身を投じたのではなく、救われることを欲していると君はどうして知ったのか」とわたしは問うであろう。そしてシケリアの詩人の死について物語るであろう。エンペドクレスは不死なる神と見なされることを熱望して、冷厳にも燃えるエトナ火山に飛び込んだのであるが、詩人にとり死ぬことは権利であり、許されることであろう。欲さぬ者を救うも者は殺す者と同じことをすることになるのだ。

17

**擬アリストテレス**（『問題集』30,1. 953 a 26）

後の人々の中では、エンペドクレス、プラトン、ソクラテス、その他、多くの著名な人たちがそう〔憂鬱症〕であった。

18

**アイリアノス**（『ギリシア奇談集』XII 32）

アクラガスのエンペドクレスは紫の衣を纏い、青銅製のサンダルを用いた。

**ピロストラトス**（『アポロニオス伝』VIII 7 p.156）

なぜならエンペドクレスもまた深紅のリボンを頭髮に結んで、自分は人間から神になろうといった意味の頌歌を吟唱しながら、ギリシアの町々を勿体ぶって巡り歩いたからである。

19

**セクストス・エンペイリコス**（『諸学者論駁』VII 6）

というのは、エンペドクレスが弁論術というものを創始した最初の人であるとアリストテレスは知っているからである。

**クインティリアヌス**（『弁論術教育』III 1,8）

というのは、詩人たちが伝えている人々以降では、エンペドクレスが弁論術に関する研究を始めた最初の人であるといわれているからである。しかしその技術の最も初期の著述家はシケリアのコラクスとテイシアスであって、その同じ島の人であるレオンティノイのゴルギアスが彼らにつづいた。またこの人は、伝えられているところによると、エンペドクレスの弟子であった。

**アリストテレス**（『詭弁論駁論』33. 183 b 31）

現在の名高き弁論家たちは、いわば次々と少しずつ前進させてきた多くの人々を継承して、このような段階にまでいたったのであって、テイシアスは最初の人々の後に、トラシュマコス、テオドロスはトラシュマコスの後につづいたという次第である …。

**逸名著作家の古注**（イアンブリコス『ピュタゴラス伝』への古注 p.198 Nauck）

エレア出身のパルメニデスもまたピュタゴラス学徒であったということ、このことから両刀論者にして弁証法の諸原則を伝えた人であるゼノンもまたそうであることが明らかとなる。したがって弁証法はピュタゴラスから始まったのである。弁論術も同様である。なぜならテイシアスもゴルギアスも

ポロスもピュタゴラス学徒のエンペドクレスの弟子だったからである。

## 警 句

20

〔金言集〕 (Gnomologium Parisinum, n.153)

「悪口を耳にしたくらいで、なぜそんなにもひどく立腹するのかね」と尋ねられて、エンペドクレスはこういった。「悪口を聞いても苦痛を感じないなら、褒められても喜ばないだろう。」

〔金言集〕 (Gnomologium Parisinum, n.158)

「ひとりの知者も見出せない」と語った人に対してエンペドクレスはいった。「もっともだ。知者を求めるには、まずその者自身が知者でなければならないからね。」

20 a

アリストテレス (『エウデモス倫理学』 H 1. 1235 a 9)

自然学者たちは、同じものは同じものに向かって行くということを原理として、自然の全体を秩序づけている。それゆえにエンペドクレスは「犬が瓦の上で寝るのも、極めて多くの同じものを有しているからである」といったのである。

〔参照〕 アリストテレス (『大道德学』 B 11. 1208 b 11)

またかつて一匹の犬がいつも同じ瓦の上で寝るので、「一体なぜあの犬は〔いつも〕同じ瓦の上で寝るのかね」と尋ねられてエンペドクレスは、「瓦と同じものをその犬は有しているからだ」といったとのことである。

## 詩

21

ルクレティウス (『事物の本性について』 I 714 ff.)

また万有は四種のもの、火と土と空気と水から生じることができると考える人々もいる。これらの人々の第一位にアクラガスのエンペドクレスはいるのであって、あるひとつの島〔シケリア島〕が三角形をした陸の岸の中でこの人を産したのであった。この島を巡ってイオニアの海は大きく湾曲をなして波打ち、鉛色の波から塩水を振り撒きつつ、流れの急な海が狭い海峡でもって波立ちながらイタリアの海岸を島の境界から分けている。こなたには巨大なカリュブディスの渦潮があり、またこなたにはエトナ火山の火焰の鳴動が再び怒りを高まらせて激しい炎の噴煙を咽より吹き上げ、また再び焰の閃光を天高く吹き上げると威嚇する。この偉大なる島は多くの点で驚嘆すべき地域と諸民族に思われており、よき産物に富み、人々の力によって嚴重に守られていて、一見に値するところといわれているが、それにもかかわらずこの土地も、この人ほどに名高い人、またこの人以上に神聖にして驚嘆かつ尊ぶべき人物は他には有していないように思われる。そればかりか、彼の胸中から出る神的なる歌は輝かしい発見を声高に語り、開陳するのであって、ために彼は人間の種から生まれたとはほとん

と思えないほどである。

22

アリストテレス (『詩学』 1. 1447 b 17)

ホメロスとエンペドクレスの間には、韻律を除けば、共通点は何もない。それゆえ前者を詩人と呼ぶのは正当であるが、後者のエンペドクレスは、詩人というよりは、むしろ自然学者と呼ばれるべきである。

23

メナンドロス [正しくはゲネトリウス] (『弁論術』 I 2,2)

パルメニデスやエンペドクレス一派の人々が詩作したようなのは自然学的〔頌歌〕であって、アポロンの本性は何であるかとか、ゼウスの本性は何であるかを述べるものである。オルペウスのも、その多くはこういったスタイルのものであった。

メナンドロス [正しくはゲネトリウス] (『弁論術』 I 5,2)

それらの頌歌は、ちょうどわれわれがアポロンの頌歌を語りながら、彼は太陽であると主張し、そして太陽の本性について論じるようなものであり、またヘラについて、彼女は空気であると主張したり、ゼウスは熱であると主張するようなものである。なぜならそういった頌歌は自然を論じるものだからである。パルメニデスとエンペドクレスはこの種のことを事細かに使っている。… というのも、パルメニデスとエンペドクレスは〔大部分をそういった頌歌を使って〕述べているが、他方プラトンはほんのわずかな箇所でしか〔そういったものを〕を思い出させないからである。

24

ラクタンティウス (『信教提要』 II 12,4)

エンペドクレス — 彼を詩人の中に数え入れるべきか、それとも哲学者の中に入れるべきか、あなたにも分からぬであろう。というのも、彼は、ローマ人にあってはルクレティウスとヴァロがそうしたように、事物の本性について韻文で書いているから — は四つの元素を立てた。

クインティリアヌス (『弁論術教育』 I 4,4)

ギリシア人の中ではエンペドクレス、ラテン人においてはヴァロやルクレティウスによって。彼らは知恵の教えを韻文で伝えた。

25

逸名著作家の古注 (ディオニュシオス・トラクスへの古注 p.168,8 Hilgard)

詩人たる者はこれら四つのもの、すなわち韻律、神話〔架空性〕、物語〔ストーリー〕、一定の措辞を備えておらねばならず、これらを欠いている詩は、たとえ韻律を使用している、詩ではない。われわれはもちろんエンペドクレスやテュルタイオスや、また天文詩を語っている人々を、たとえ彼らが韻律を使用しているとしても、詩人とは呼ばない。彼らは詩人たる者の特徴をなすあれら〔のすべて〕を用いていないからである。

逸名著作家の古注 (ディオニュシオス・トラクスへの古注 p.166,13 Hilgard)

韻律を用いるだけの者はまだ詩人ではない。なぜなら自然学を書いたエンペドクレスも、天文詩を

語った人々も、韻文調でピュティオス〔アポロン〕の神託を下す者も、詩人ではないからである。

#### プルタルコス（『どのようにして若者は詩を学ぶべきかについて』2 p.16 C）

エンペドクレスやパルメニデスの叙事詩とか、ニカンドロスの『動物詩集』やテオグニスの『箴言集』は、徒歩〔散文調〕を避けるためにちょうど乗り物を使うように、詩作法から荘重さや韻律を借用している作品である。

#### アリストテレス（『弁論術』Γ 5. 1407 a 31）

第二は固有の語でもって語ることであり、… 第三は曖昧な語で語らぬことである。だがこのことは反対のことが意図されていない場合のことである。その反対のことというのは、語ることが何もないのに、何ごとかを語っているかのように見せようとするときに、人々がやることである。例えばエンペドクレスのごとき人々は詩作においてそのような類のことを語っている。すなわちそれは長く回りくどいものであることによって人を欺く。そして聞き手は、ちょうど大衆が予言者のもとでなるような、そのような状態に陥るのである。というのも予言者が曖昧なことをいうとき、彼らはなるほどとうなずくからである。例えば「クロイソスはハリュス河を渡るなら、大いなる王国を滅ぼすであろう」といったのがそれである。

#### アリストテレス（『気象論』B 3. 357 a 24）

またエンペドクレスのように、海は「大地の汗である」といって、何かいっばしのことをいったかのように思っている人がいるとするなら、同様に笑うべきことである。なぜならこのようにいうのは、詩作にとってなら恐らく満足も行くであろうが（というのは比喩は詩作に属することだから）、自然の認識にとっては不十分だからである。

#### キケロ（『弁論家について』I 50,217）

そういった論拠によれば、球技も12本線の将棋も市民法に属すとわれわれは正当にいうことができよう。というのは、プブリウス・ムキウスはこの両方とも極めて上手に行なったからである。またその同じ理由によって、ギリシア人が「自然学者」と呼んだ者たちもまた詩人であるということができよう。なぜなら自然学者エンペドクレスは立派な詩を作ったからである。

26

#### ハリカルナッソスのディオニュシオス（『構成論』22）

詩においても歴史においても政治的著作においても、このスタイル〔厳しく簡潔なスタイル〕の信奉者が多く生まれた。その中でも叙事詩においてはコロポンのアンティマコスと自然学者エンペドクレスが、抒情詩においてはピンダロスが、悲劇においてはアイスキュロスが衆に抜きん出ている。

27

#### キケロ（『クイントゥス宛書簡』II 9,3）

ルクレティウスの詩は、君が書いている通りのものだ。天才の輝きに満ちており、また偉大なる技量を示している。しかしまた君がやってきたときに――。もし君がサルスティウスのエンペドクレス論を読むなら、ぼくは君を男だと思うであろう。〔ただの〕人とは思わないだろう。

**アリストテレス** (『形而上学』A 3. 984 a 8)

他方エンペドクレスは上述のもの〔水、空気、火〕に第四のもの、土を加えて、これらの四つを原理とする。すなわちこれらは常に存続しつづけ、生成することはないのであって、ただ多さや少なさの点でひとつに結合したり、ひとつから分離したりするだけなのである。

**シンプリキオス** (『アリストテレス「自然学」注解』25,21)

彼〔エンペドクレス〕は物体的元素を四つとする。すなわち火と空気と水と土である。これらは永遠であって、ただ結合と分離によって多さや少なさの点で転化するだけなのである。他方、これらのものを運動させる本来の意味における原理は「愛」と「争い」である。すなわち元素は、ある時には「愛」によって結合され、ある時には「争い」によって分離されるというように、交互に運動しつづけねばならないのである。したがって彼によれば原理は〔実際には〕六つである。そしてある場合には彼は、「ある時には愛によってすべてはひとつとなり、ある時には争いの憎しみによってそれぞれは再び離ればなれとなる」と語っている時のように、「争い」と「愛」に能動的な能力を付与しているが、ある場合には「ある時には逆に一つのものから多くのものへと分裂した。火と水と土と空気の限りなき高さとか。またこれらから別に離れてあらゆるところで重さの等しい呪われの争いが、またこれらのものただ中に長さも幅も相等しい愛が」と語っている時のように、それら〔「愛」と「争い」〕も四つのももの〔四元素〕と同列に並べている。

**プラトン** (『ソピステス』242 C - 243 A)

そのそれぞれの人が、一種の神話を子供に話すかのようにわれわれに語っているようにわたしには思われるのだ。そのひとは存在するものは三つあって、そのあるものは時には互いに争い合うが、また時には愛が生まれて、結婚、出産、子供の養育といったことを惹き起こすという。また別の人は、湿と乾、あるいは温と冷の二つだといい、それらを一緒に住まわせ、結婚させている。そしてわれわれのところのエレア族は、これはクセノパネスから始まったか、あるいはそれ以前からあったものであるが、万物と呼ばれているものはひとつであるというような神話を詳細に展開しているのだ。他方イオニアのムーサたちや、少し後になるが、シケリアのムーサたちは、両者を結び合わせて、有るものは多であると共に一であって、憎しみと愛によって統合されているというのが最も安全であると考えた。なぜなら「それは常に争うことによって和合する」とムーサたちのより張り詰めた方のムーサ〔ヘラクレイトスなど〕はいうからである。他方より穏やかなムーサ〔エンペドクレスなど〕は、それらが常にそういったあり方をするという点を弛めて、万有は交互に、ある時はアプロディーテによってひとつとなり親しくなるが、またある時は一種の争いによって多となり、互いに敵対し合うという。

**擬プラタルコス** (『雑録集』10 [Dox.582])

アクラガスのエンペドクレスは、元素は四つあるとする。すなわち火、水、アイテール、土がそれである。そしてそれら〔を結合させ、あるいは分離させる〕原因が「愛」と「争い」である。〔まず

最初に] 空気が元素の最初の混合から分離されて周辺に広がったと彼はいう。空気の次に火が噴き出したが、他に行き場所を見出せず、空気の周りの密集帯から上に噴出した。他方大地の周りを回転する二つの半球があり、その一方は全体として火から出来ているが、他方は空気と少量の火からなる混合物である。この後者を彼は夜と考えた。運動の発端は密集帯が〈そのある部分〉で降り下ってくる火と出遭ったことから引き起こされた。太陽は本性的には火ではなく、水面に映える反射に似た火の反射像に他ならない。しかし月は火によって切り離された空気からそれ単独でなり立っていると彼はいう。すなわち空気が霜のように固まったものなのである。そして月は太陽から光を得ている。支配的部分は頭でも胸でもなく、血液中にある。したがって身体中のどの部分にそれ（支配的部分のことを彼は考えている）がより多く撒かれているかで、人間は〔それぞれ〕その部分で優るといふ。

31

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』I 3 [Dox.558]）

(1)彼ら〔ピュタゴラスの徒〕の後にエンペドクレスが出て、ダイモーンの本性について多くのことを語った。すなわち、それらは極めて多く存在するが、どのようにして地上の諸物を管理しつつ住みついているかといったことである。万有の原理は「争い」と「愛」であり、単一の知的な火が神であり、万物は火から出来ており、また火へと解体されるであろうと彼はいつた。世界大火を予想するストア学徒も大体の点で彼の教説に同意している。(2)また彼は何よりも再受肉〔魂の転生〕に同意しており、次のようにいつている。「わたしはこれまでかつて一度は少年であり、少女であった。また藪であり、鳥であり、海に浮かび出る物いわぬ魚であった。」(3)彼はすべての魂があらゆる動物に移り行くといふ。なぜなら彼らの師であるピュタゴラス自身もまた〔かつては〕エウポルボスであり、イリオンの野に出征したことがあると語ったからである。彼は〔エウポルボスの〕盾をそれと見分けられると主張した。

32

アエティオス（『学説誌』I 7,28 [Dox.303]）

〈エンペドクレスは、一者は球形にして永遠なるもの、不動なるものであり、〉また一者は必然性であるが、その必然性の質料が四元素であり、形相が「争い」と「愛」であるとする。また元素は神々であり、それらの混合が宇宙であり、〈加えていうなら、スパイロス〔球体〕であるが、万物はこのスパイロスへと〉還元されるであろうと彼はいつ。そしてこのスパイロス〔球体〕は単一形相のものなのである。また魂は神的なものであり、魂を純粹に分け持つ清浄な人も神的であると彼は考えた。

33

アエティオス（『学説誌』I 3,20 [Dox.286 - 287]）

メトンの子、アクラガスのエンペドクレスは、一方に四元素、火、空気、水、土を立て、他方に二つの支配する力、「愛」と「争い」を立てる。この後者の一方はひとつに統合する力であり、他方は分離する力である。彼は次のようにいつている。

まずは聞け、万物の四つの根を。

輝けるゼウス、生命育むヘラ、またアイドネウス、

そして死すべき人の子らのもとなる泉を

その涙によって潤すネスティス。

すなわち彼が「ゼウス」というのは沸騰〔ゼシス〕とアイテールであり、「生命育むヘラ」は空気であり、土は「アイトネウス」、「ネスティス」と「死すべき人の子らのもとなる泉」はいわば種子と水のことなのである。

#### ストバイオス（『自然学抜粋集』I 10,11 b）

エンペドクレスは沸騰〔ゼシス〕とアイテールを「ゼウス」、土を「生命育むヘラ」、空気を「アイトネウス」（というのは、それは自らの光を有さず、太陽や月や星によって照らされるのだからである）、種子と水を「ネスティス」、「死すべき人の子らのもとなる泉」という。かくして万有は四つの元素から出来ており、それらの本性は対立するもの、乾と湿、温と冷によって構成されているのである。そして万有は互に対する比例関係と混合によって造り出されるのであり、部分的な転化を受けることはあっても、全体の解体は許さないのである。というのも、彼は次のようにいっているからである。

ある時には愛の力により、すべては結合してひとつとなり、  
ある時には争いの持つ憎しみのために逆にそれぞれ離ればなれとなる。

#### ヒッポリュトス（『全異端派論駁』VII 29）

「ゼウス」は火であり、「生命育むヘラ」は生命にとって必要な果実をもたらす土である。そして「アイトネウス」は空気であるが、それは、それを通してわれわれはすべてを見るが、ただそれのみは見ないからである。また「ネスティス」は水である。というのは、それのみが養い育てられるすべてのものにとって栄養の担い手となるが、それだけでは養い育てられるものを養うことはできないからである。すなわち、もしそれが養ったとするなら、水は世界の内に常にあり余るほどあるのであるから、生き物が飢餓に捉えられるということは決してなかったであろうと彼はいう。それゆえに彼は水を「ネスティス」と呼ぶのであって、それというのも、それは栄養の原因とはなるが、養い育てられるものを養うことはできないからである。

#### ピロデモス（『敬虔について』2 p.63 Gomperz）

エンペドクレスはその頌歌〈において〉、〈へ〉ラと〈ゼウスを〉空気〈と火〉であると〈いつて〉いる。

34

#### ガレノス（『ヒッポクラテス「人間の本性について」注解』XV 32 Kühn. CMG V 9,1 p.19,7）

エンペドクレスは、複合的物体の本性〔実体〕は転化しない四元素からなると考えた。鏄や明礬やカドミウムや銅を細かく砕き、粉末状にして混ぜ合わすなら、それらのいずれも他から分離して取り扱うことができないが、そのようにそれら第一の諸元素〔四元素〕が互いに混ざり合うことによってである。

#### ガレノス（『ヒッポクラテス「人間の本性について」注解』XV 49 Kühn. CMG V 9,1 p.27,22）

ヒッポクラテスは、われわれの知る限り、元素は混和すると唱えた最初の人である。…そしてこの点で彼はエンペドクレスと異なるのである。この人もヒッポクラテスのいうのと同じ元素からわれわれも、そしてまた地上に存する他のすべての物体も出来ているというが、しかしそれらは〔彼の場合には〕互いに混和し合うのではなく、微細部分ごとに並置され、触れ合っているに過ぎないのである。

る。

35

アエティオス (『学説誌』 II 7,6 [Dox.336])

エンペドクレスは、元素の場所はすべてに渡って固定しても、一定してもおらず、すべての元素が互いの場所を取り替え合うと語っていた。

アキレウス・タティオス (『アラトスの「天象譜 (パイノメナ)」 入門』 4 p.34,20 Maaß)

エンペドクレスは元素に特定の場所を与えない。むしろそれらは互いに場所を譲り合うのであって、したがって土が空中に運ばれることもあれば、火が低いところに行くこともあるのである。

36

アリストテレス (『生成消滅論』 B 3. 330 b 19)

だがある人たちは元素を直截に四つとする。たとえばエンペドクレスがそうである。しかしこの人もまたそれらを二つに纏めている。なぜなら彼は火以外のすべてを火に対立させているからである。

37

アリストテレス (『形而上学』 A 4. 985 a 21)

またエンペドクレスにしても、この人の方が彼 [アナクサゴラス] より一層広範にそれらの原因を使用しているが、しかし十分にでもなければ、それらにおいて一貫性を見出してもいない。少なくとも彼においては多くの場合に、「愛」が分離し、「争い」が結合する仕儀となっている。なぜなら「争い」によって全体が諸元素に分解される時には、火は [火どうしで] ひとつに結合され、他の諸元素のそれぞれも [それぞれ] ひとつに結合されるからであり、また再び「愛」によってひとつになる時には、諸部分が再びそれぞれ [の結合] から分離されざるをえないからである。さてエンペドクレスはそれ以前の人々とは異なり、その原因 [動力因] を区別することを初めて提案したわけであるが、運動の原理をひとつとはしないで、異なり対立する [二つの] 原理を立てた。さらに彼は質料の意味で語られたものとして四元素を語った最初の人でもある。しかしながら彼はそれらを四つとして使用してはおらず、あたかも二つのものであるかのように使用している。すなわち、一方の火はそれ単独で使用し、他方の土、空気、水はひとつの本性的なものとして [火に] 対立するものとして使用しているのである。このことは少し考察すれば誰にでもその詩句から分かるはずである。

38

アリストテレス (『自然学』 Θ 1. 252 a 7)

エンペドクレスのいっていることもこのようなことであるように思われる。すなわち彼は「愛」と「争い」が交互に支配し、運動をもたらすが、その中間の時には静止ということが事物に必然的に属するというのである。

39

アリストテレス (『形而上学』 A 4. 984 b 32)

善いものとは反対のものも自然の内には明らかに存在するから、すなわち秩序や美しいものだけで

なく、無秩序や醜いものもあり、しかも善いものよりも悪しきものの方が多くあり、また立派なものよりつまらないものの方が多くあるからして、そこで他のある人は、それら各々のそれぞれの原因として、「愛」と「争い」を持ち込んだのである。というのは、もし人がエンペドクレスの語る思想をその道筋にそって辿って行き、それを〔正しく〕捉えるならば、そして彼が片言で語っている言葉に囚われるのでないならば、「愛」とは善きものの原因であり、「争い」とは悪しきものの原因であることを見出すだろうからである。したがって、もし誰かが、エンペドクレスはある意味で悪と善を原理とした人であり、しかも最初にそう語った人であるというなら、彼は恐らく的を外したことはないであろう。いやしくもすべての善きものの原因は善そのものであり、〔悪しきものの原因は悪そのものである〕とするならば。

40

アリストテレス (『生成消滅論』 B 6. 333 b 19)

彼〔エンペドクレス〕は混合のみを褒め讃えている。ところがしかし少なくとも元素を分離するのは「争い」ではない。むしろ「愛」が本性上その神〔すなわち「愛」〕より先なる元素を分離するのである。これらの元素もまた神々なのである。

41

ピロポノス (『アリストテレス「生成消滅論」注解』 19,3)

なぜなら彼〔エンペドクレス〕は質的变化を(それは明らかに存在するのに)廃棄することによって、現象の事実に反することを語っており、また次のようにいうことによって自分自身に矛盾することをいっているからである。すなわち彼は、一方では元素は転化せず、それらが互いに生成し合うということはなく、ただ他の諸物がそれらから生成するだけであると語るが、他方では逆に「愛」が支配する時にはすべてはひとつになり、スパイロス〔球体〕を造り出すが、そのスパイロス〔球体〕は没質的であり、したがって〔そこでは〕元素のそれぞれは固有の形相を失っていて、もはや火の特性も保存されておらねば、他のいずれの特性も保存されていないというのである。

42

アリストテレス (『天体論』 Γ 2. 301 a 14)

他方、分離して運動しているものから〔宇宙〕生成を造り出すというのも合理的でない。それゆえにエンペドクレスもまた「愛」の時期のそれを取っておいたのである。というのも、一方にすっかり分離されてしまっているものを用意し、他方で「愛」によって混合を造り出して、そこから天界を成立させるということはできない相談であつたらうからである。というのも、この世界は〔現に〕分離した元素から出来ているからで、したがって世界はひとつの結合していたものから生成したのであればならないこと必然である。

アリストテレス (『生成消滅論』 B 6. 334 a 5)

だがまた同時に彼は、現在の争いの時期も以前の愛の時期も、世界は同じような状態にあるといっている。

43

アリストテレス (『生成消滅論』 B 7. 334 a 26)

すなわちエンペドクレスのように語るあの人たちにとって〔その生成の〕仕方はどのようなものであるだろうか。けだしそれは結合でなければならないこと必然であり、ちょうど煉瓦や石から壁が作られるごときのものであろう。そしてその混合体は元素からなるのであるが、それら元素はそのまま保存され、小部分ごとに相互並置的に置かれているという仕方によってであろう。実際肉や、その他のいずれも、このような仕方で出来ているのである。

アエティオス (『学説誌』 I 13,1 [Dox.312])

エンペドクレスは、いわば元素に先立つ同質的元素として、極めて微細な破片が四元素に先立ってあるといった。

アエティオス (『学説誌』 I 17,3 [Dox.315])

エンペドクレスとクセノクラテスは、元素をより小さな塊から構成する。それらは極めて微細で、いわば元素の元素のごときのものである。

ガレノス (『ヒッポクラテス「人間の本性について」注解』 XV 49 Kühn. CMG V 9,1 p.27,24)

この人〔エンペドクレス〕も、ヒッポクラテスのいうのと同じ元素からわれわれも、そしてまた地上に存する他のすべての物体も出来ているというが、しかしそれらは〔彼の場合には〕互いに混和し合うのではなく、微細部分ごとに並置され、触れ合っているに過ぎないのである。

43 a

アリストテレス (『天体論』 Γ 6. 305 a 1)

他方、分割が停止されるとすれば、物体は停止したところでアトモン〔不可分なもの〕となるか、あるいは、これがエンペドクレスのいおうとしたことであると思うが、分割可能ではあるが、決して分割されることのないものとなるかである。

44

アエティオス (『学説誌』 I 24,2 [Dox.320])

エンペドクレス、アナクサゴラス、エピクロス、それに微細な物体の集合によって宇宙を構成するすべての人が、結合と分離を導入し、本来の意味での生成や消滅はないとする。すなわち、それらは質的变化によって質的に生じるのではなく、集合によって量的に生じるのである。

45

アエティオス (『学説誌』 I 26,1 [Dox.321])

エンペドクレスは、必然性の実体は原理と元素の使い方を弁えた原因であるとする。

プルタルコス (『「ティマイオス」における魂の生成について』 27,2 p.1026 B)

必然性、これを多くの人々は宿命と呼び、エンペドクレスは「愛」ならびに「争い」と呼ぶ。

46

アリストテレス (『自然学』 A 4. 187 a 20)

だが他の人たちは、一なるものの内に反対のものがあって、そのものからそれらは分離してくると

する。たとえばアナクシマン드로スがそのようなことをいっており、またエンペドクレスやアナクサゴラスのように、一と多があるという人々がそのような主張をしている。なぜならこれらの人もまた混合体から多を分離し出すからである。もっとも彼らは次の点で互いに異なる。すなわち前者〔エンペドクレス〕はそれらは循環をなすとし、後者〔アナクサゴラス〕は一度きりであるとする点で異なるし、また後者は同質素と反対のものを無限〔無数〕であるとするが、前者はいわゆる〔四〕元素のみとする点で異なる。

47

アエティオス（『学説誌』 I 5,2 [Dox.291]）

エンペドクレスは、宇宙をひとつとするが、しかし宇宙は万有ではなく、万有のちっぽけな一部分に過ぎないとする。残余の部分は不活性の質料である。

48

プラトン（『法律』 X 889 B - C）

火、水、土、空気、これらはすべて自然と偶然によって存在し、それらのいずれも技術によって存在するのでないといふ。そしてまたそれらにつづく諸物、すなわち大地や太陽や月や諸星についても、全く魂を有さない〔生命のない〕それら〔火、水、土、空気〕によって造られているのだと。それぞれがそれぞれ有する能力の偶運によって運ばれ、ぶつかり合ったりすると、それぞれがそれ固有の仕方で結びつくのであり、熱いものが冷たいものと、あるいは乾いたものが湿ったものと、軟らかいものが硬いものと、また反対のものの偶然的な混合によって必然的に混和される限りのすべてのものが結びつくのであって、そのような仕方で、またそれらのものに基づいて、このように天界全体と天界の内にあるすべてのものが生み出されたのであり、またそれらから全季節が生まれると、動物や植物の一切が生み出されたのであるが、これらは知性によるのでもなければ、何かある神的存在によるのでもなく、また技術によるのでもなくして、むしろ今われわれが語ったもの、すなわち自然と偶然によるのだといふのである。

49

ピロン（『神の摂理について』 II 60 p.86）

エンペドクレスのいうように、世界の諸部分もまた同様の仕方で形成されるように思われる。すなわち、アイテールが分離された後、空気と火が上方へ舞い上がり、極めて広大な軌道を廻る天が形成された。しかし火は天の少し下にとどまっていたが、それもまた太陽の光線の中へ集積されて行った。他方、土は一箇所に集まり、ある必然によって固められて姿を現わし、中央に落ち着いた。さらにその周囲の一面でアイテールが渦巻き、決して止むことがないが、それはそれがはるかに軽かったからである。したがって〔大地の〕静止の原因は神によることであろうか。むしろ自らの上に幾層にも積み重なり、その形に旋回運動が磨きをかけ〔て出来上がっ〕た球体によることではないのか。なぜならその〔すなわち大地の〕周りにはあるタイプの不思議なリング（それは巨大かつ多様な形の力を有する）が取り巻いたからであり、それゆえそれはどちらの方向にも傾くことができないのである。

アエティオス（『学説誌』 II 6,3 [Dox.334]）

エンペドクレスは最初にアイテールが分離され、二番目に火が、それにつづいて土が分離されたといふ。そしてその土から、回転の勢いによって激しく締めつけられて、水がほとぼしり出た。そしてその水から空気が燻し出された。そして天はアイテールから生じ、太陽は火から、大地を取り巻く諸物は他のもの〔水と土〕から練り固められ〔て生じ〕た。

アエティオス (『学説誌』 II 31,4 [Dox.363])

エンペドクレスは大地から天までの高さ (それはわれわれより上方に広がるものであるが) よりも幅の間隔の方が大きいとする。宇宙は卵に似たような仕方で横たわっており、この幅の面において天界はより一層広がっているのである。

アエティオス (『学説誌』 II 1,4 [Dox.328])

エンペドクレスは、太陽の周回軌道が宇宙の限界のアウトラインであるとする。

アエティオス (『学説誌』 II 10,2 [Dox.339])

エンペドクレスは、それ〔宇宙〕の右側が夏至の面、左側が冬至の面であるとする。

アエティオス (『学説誌』 II 11,2 [Dox.339])

エンペドクレスは、天は固体であって、火によって氷のように固められた空気から出来ており、半球のそれぞれに火の部分と空気の部分を包含するとする。

アキレウス・タティオス (『アラトスの「天象譜 (パイノメナ)」 入門』 5 p.34,29 Maaß)

エンペドクレスは、天は氷のようなものであって、氷のように冷たいものが集まって出来ているという。

逸名著作家の古注 (バシレイオス『創造の六日間についての講話』への古注』 22)

エンペドクレスは〔天は〕水が凝結し、氷のように固まったものであるとする。

ラクタンティウス (『神の御業について』 17,6 [Dox.198 n.1])

あるいは誰かがわたしに、天は銅製であるかガラス製であるとするなら、あるいはエンペドクレスのいうように、氷となった空気であるとするなら、ただちに同意すべきであろうか。

アエティオス (『学説誌』 II 4,8 [Dox.331])

エンペドクレスは、宇宙は「争い」と「愛」の交互的な支配によって〔生成し、また〕消滅するとする。

シンプリキオス (『アリストテレス「天体論」 注解』 293,18)

他の人たちは、同じ宇宙が交互に生成し消滅するのであって、再び生成してくるとまた再び消滅するが、この交代は永遠であるという。たとえばエンペドクレスは「愛」と「争い」が代わるがわる優勢となって、一方〔「愛」〕は万物をひとつに結び合わせて「争い」の宇宙を消滅させ、そこからスパイロス〔球体〕を造り出すが、他方「争い」は再び元素を分離し、このような宇宙を造り出すと語っている。

シンプリキオス (『アリストテレス「天体論」注解』305,21)

プラトン、エンペドクレス、アナクサゴラス、それにその他の自然学者たちも、単純物体からなる複合物の生成をこういった仮説からする仕方であつたように思われる。すなわち … あるものが時間上先在していて、生成物はそこから生成してきたというような仕方であつた。

アリストテレス (『形而上学』B 4. 1000 b 18)

なぜなら彼〔エンペドクレス〕は、存在するもののあるものは消滅的であるが、他のものは不滅であるとはしないで、元素を除くすべてを消滅的であるとするからである。

53

アエティオス (『学説誌』II 13,2 [Dox.341])

エンペドクレスは〔諸星は〕火であつて、火の要素から出来ているとする。それは空気が自らの内に含んでいたが、最初の分離の際に搾り出されたものである。

54

アエティオス (『学説誌』II 13,11 [Dox.342])

エンペドクレスは、恒星は氷に縛り付けられているが、惑星はその縛りを解かれているという。

55

アキレウス・タティオス (『アラトスの「天象譜 (パイノメナ)」入門』16 p.43,2 Maaß)

他方、太陽が〔大地から見て〕一番目、月が二番目、クロノス〔土星〕が三番目だという人々がいる。だが大多数の人の見解は月を一番目としている。なぜなら月は太陽の切れ端であると彼らはいふからである。「まるい借りものの光が大地の周りを巡り行く」とエンペドクレスもいふように。

56

アエティオス (『学説誌』II 20,13 [Dox.350])

エンペドクレスは、太陽は二つあるとする。一方は原型で、宇宙の一方の半球にあつてその半球を満たしている火であり、常にそれ自身の反射像の反対側に位置している。もうひとつは眼に見えるそれであり、熱と混じり合った空気に満たされたもう一方の半球に投影された反射像であつて、まるき大地からの反射によって太陽になった氷状のものであり、火の半球の運動と一緒に引き廻される。手短かにいえば、大地を巡る火の反射像が太陽なのである。

アエティオス (『学説誌』II 21,2 [Dox.351])

それ〔太陽〕は反射によるものであつて、〔その大きさは〕大地に等しい。

57

アリストテレス (『デ・アニマ』B 7. 418 b 20)

エンペドクレスや、他に誰か次のようにいふ者があつたとするなら、それは正しくないのである。す

なわち、光は運動しているのであって、大地とそれを取り囲むものの中にある時到達するが、それにわれわれは気づかないだけなのだというのがそれである。… 小さな間隔であれば気づかないということもあるであろうが、東から西までの全行程において気づかないというのは要求としては余りに過大過ぎる。

**アリストテレス**（『感覚と感覚されるものについて』 6. 446 a 26）

エンペドクレスもまた、太陽からの光は視覚か地上に到達する前に、まずその中間点に達しているが、ちょうどそのように。

〔参照〕 **ピロポノス**（『アリストテレス「デ・アニマ」注解』 344,34）

彼〔エンペドクレス〕は、光は流れ出てくる物体であって、輝く物体からまず最初に大地と天の中間点に達し、それからわれわれのもとに到達するのであるが、光のそういった運動にわれわれが気づかないのはその速さのゆえであると語っていた。

**逸名著作家の注解**（アテナイ古写本 1249）

第二の見解は光を輝く物体〔太陽〕から発した極めて微細な粒子からなる焰であり、巨大な力によって放射されたものであるとする人たちのそれである。この見解はエンペドクレスのそれであるように思われる。次のような論拠によって彼はこのことを証明したと彼らは断言している。その内に物体の諸特性が属しているものは物体である。しかるに光には反射したり散乱したりするということがあるが、これらは物体に固有の特性である。したがって光は物体であると。

## 58

**アエティオス**（『学説誌』 II 8,2 [Dox.338]）

エンペドクレスは、空気が太陽の力に譲るがゆえに極は傾いており、北側は高く、南側は低くなっているとする。したがって宇宙全体もまた傾いているのである。

**アエティオス**（『学説誌』 II 23,3 [Dox.353]）

エンペドクレスは、〔太陽は〕それを取り囲む天球によって妨げられるまでどこまでも真っすぐに進んで行き、そして至点の周期によって〔反転させられる〕とする。

## 59

**アエティオス**（『学説誌』 II 24,7 [Dox.354]）

月がその下に入り込むことによって〔太陽は蝕を起こす〕。

## 60

**アエティオス**（『学説誌』 II 25,15 [Dox.357]）

エンペドクレスは、〔月は〕空気が密集して雲のようになり、火によって固められたものであって、したがって混合体であるとする。

**プルタルコス**（『月面に見える顔について』 5,6 p.922 C）

なぜなら月は雹のように空気の固まったもので、火の天球によって取り囲まれているとするエンペ

ドクレスにもまた彼らは不満だからである。

アエティオス (『学説誌』 II 27,3 [Dox.358])

〔月は〕円盤のような形をしている。

プルタルコス (『ローマ探訪』 101 p.288 B)

なぜなら月の満月の時に見える形は球ではなく、レンズないしは円盤の形だからである。そしてエンペドクレスの考えるところによると、それがまたその実際の形なのである。

アエティオス (『学説誌』 II 28,5 [Dox.358])

〔月は〕太陽によって照らされているといった最初の人にはタレスである。ピュタゴラス、パルメニデス、エンペドクレス、アナクサゴラス、メトロドロスが同様の考えをしている。

## 61

アエティオス (『学説誌』 II 31,1 [Dox.362])

エンペドクレスは、月は大地からの二倍太陽から離れているとする [擬プルタルコスによる]。

月の大地からの距離は太陽からの距離の二倍である [ストバイオス版]。

〔正しくは「太陽は月の二倍、大地から離れている」であったとディールスは解する。〕

## 62

ヒッポリュトス (『全異端派論駁』 I 4,3 [Dox.559])

ちょうどエンペドクレスが、われわれのいる場所はすべて悪に充ちており、悪は大地の周辺領域から延びて月にまで達しているが、それより先には及んでいない。なぜなら月より上の領域はすべてより清浄だからであるといっているようにである。ヘラクレイトスもまたそのような考えであった。

## 63

アリストテレス (『気象論』 B 9. 369 b 12)

〔電光について〕ある人たちは雲の中に火が生じるのだという。だがエンペドクレスは太陽光線が〔雲の中に〕巻き込まれたものであるという。

アエティオス (『学説誌』 III 3,7 [Dox.368])

エンペドクレスは〔電光は〕雲への光の衝突であり、それが抵抗する空気をはじき飛ばしたものであって、その鎮火と破裂が轟音を作り出すのであり、またその輝きが電光を作り出し、電光の張りが電撃を作り出すとする。

## 64

オリュンピオドロス (『アリストテレス「気象論」注解』 102,1 Stüve)

それら〔風〕に斜めの運動を起こさせるものは何か。それはエンペドクレスの考えたように反対方向への運動を引き起こす土や火ではなく、循環する空気である。

アエティオス (『学説誌』 III 8,1 [Dox.375])

エンペドクレスとストア学徒は、空気が濃縮化によって優勢となって上へ押し上げられることによって冬が生じ、火が〔優勢となって〕下へ押し下げられることによって夏が生じるとする。

ピロン (『神の摂理について』 II 61 p.86)

次いで彼〔エンペドクレス〕は海について推理して、次のようにいっている。「末端の縁にあったものが最大限電のように固まった後、泥水が〈作り出された〉。なぜなら地上にあつて水分に属するものは何であれ、競って吹きつける風のこの上なく強力な紐帯によって、いたるところから大地の低く窪んだ場所に搾り出されるが常だったからである。」

ツェツェス (『「イリアス」 解釈』 p.42,17 Hermann)

なぜなら、自然学者エンペドクレスによれば、大地と海が出現した後もなお元素は無秩序に運動していたのであって、ある時には火が優勢となって〔大地を〕焼き尽くすかと思えば、またある時には水の流れが溢れ出て氾濫するといった具合であった。

アエティオス (『学説誌』 III 16,3 [Dox.381])

エンペドクレスは、〔海は〕太陽に焼かれ、圧縮が加わることによって生じた「大地の汗」であるとする。

アイリアノス (『動物誌』 IX 64)

アリストテレスが語っており、またそれ以前ではデモクリトスがいており、テオプラストス自身もまた第三番目の人としていっていることであるが、魚は塩水によって養われているのではなく、海中に含まれている甘い水〔真水〕によって養われているのだと彼らはいう。このことは幾分信じ難いことに思われるので、事実そのものによってこの主張を確証しようとしてニコマコスの子〔アリストテレス〕は、海全体の中には飲める水もあるのであって、そのことは次のことによって証明されるという。すなわち人が空洞の軽い容器を蜜蠟で作って（それに紐を結びつけておいて引き揚げることができるようにしておく）、それを空のまま海に下ろして一昼夜経過した後一杯になったのを汲み上げるなら、それは甘く飲める水で一杯になっているというのである。アクラガスのエンペドクレスもまた、海には甘い水〔真水〕があつて、すべての人に明らかになっているわけではないが、魚の栄養になっていると語っている。そしてこの海水中で甘くなる原因は自然的なものであると彼はいうが、それを諸君は先の実験から知るであろう。

アリストテレス (『天体論』 B 13. 295 a 13)

そこで天界の生成を説く人たちは皆この理由で土もまた中央に集まったのだという。また大地が静止する原因を求めて、その平板さと大きさが原因であるという風に語る人々もいるが、他方エンペドクレスのごとき人々は、天界の円運動がその周りを旋回し、しかも〔大地より〕迅速に運動するので、ちょうどコップの中の水のように大地の運動を妨げるのだという。というのも、コップが旋回する時、水はしばしば青銅の下になることはあつても、依然として同じ原因によって、本性的には運動するも

のでありながら、下へ行くことはないからである。

68

セネカ（『自然学研究』 III 24,1）

大地が多く場所で蔽い隠している火によって水は熱くなるのであって、水が通過できる地面の下にそれらがある場合には特にそうであるとエンペドクレスは考える。われわれが蛇型湯沸器とか浴室湯沸器とか、その他多くの同様のものを作る場合に、それらの内に細い銅の導管を螺旋状に巻いて配管するのを常としているが、それは水が何度も同じ火の周りを巡回して熱湯となるに十分なだけの距離を流れるためである。かくして冷水が入り、熱湯が出て行くという次第である。これと同じことが大地の下でもなされているとエンペドクレスは考えるのである。

69

擬アリストテレス（『問題集』 24,11. 937 a 11）

なぜ冷水よりもむしろ温水によって石は固まるのか。それは水分の消滅によって石は生じるのであるが、冷よりも温によってより一層水分は消滅するからであろうか。それで岩も石も水の熱によって生じるとエンペドクレスもいうごとく、温によって石化は行なわれるのでであろうか。

プルタルコス（『原理としての冷たいものについて』 19,4 p.953 E）

これらの目に見えるもの、すなわち断崖や岩山や岩石は地中深くで燃える火によって生み出され、かつ支え保たれているとエンペドクレスは考える。

69 a

テオプラストス（『感覚論』 59 [Dox.516,9]）

また色についてエンペドクレスは、白は火から、黒は水から出来ているという。

70

アエティオス（『学説誌』 V 26,4 [Dox.438]）

生き物の最初のもは樹木であって、それらは太陽が一面に広がる以前に、そして昼と夜が分離される以前に、大地から生い立たとエンペドクレスはいう。混合の均衡によってそれらは男と女のロゴスを〔一身に〕包含する。またそれらは地中の熱によって伸び上がり、生長する。したがってそれらは大地の部分であって、それはちょうど胎内の胎児が母胎の部分であるのと同様である。果実は植物内に存する水と火の余剰物である。そして水分の不足するものは夏に水分を取られて葉を落とす。潤沢なものは、月桂樹やオリーブやなつめ椰子の場合のように、そのままである。味の相違は多くの部分からなる〈大地〉の多様性に起因しており、また植物が養い手〔の大地〕から同質素を異なった仕方ですり上げることによって生まれるのであって、葡萄の場合に見られるとおりでである。というのも、葡萄の樹の相違がよい葡萄酒を造るのではなく、それを養う土地の相違が造るのだからである。

テオプラストス（『植物の諸原理について』 I 12,5）

なぜなら生み出すものはあるひとつのものであって、エンペドクレスのいうごとくではないからである。すなわち彼はそれを分かち、根には土を、新芽にはアイテールを配当するのであって、その各々はそれぞれ切り離されているとする。そうではなく、ひとつの質料から、そしてひとつの原因によっ

て、生み出されるのである。

#### アリストテレス (『デ・アニマ』 B 4. 415 b 28)

またエンペドクレスがいったことも正しくない。すなわち彼は、植物に成長ということが起こるのは根を下へ張ることによってであるが、それは土が本性上そのように運動するがゆえであり、また同じように火によって上へ伸びるのだと付言している。

#### プルタルコス (『食卓歓談集』 VI 2,2 p.688 A)

エンペドクレスのいうところによれば、植物の場合〔その本性は〕無意識の内に周囲からふさわしい栄養を汲み取ることによって維持される。

#### 擬アリストテレス (『植物について』 A 1. 815 a 15 [ダマスコスのニコラウス p.5,4 Meyer])

ところでアナクサゴラスとアブルカリス〔すなわちエンペドクレス〕は、それら〔植物〕は欲求によって動かされると語っており、それらもまた感覚し、悲しんだり喜んだりすると主張する。…アブルカリスはまたそれらの内には性も混入されていると考えている。

#### 擬アリストテレス (『植物について』 A 1. 815 b 16 [p.6, 17 Meyer])

ところでアナクサゴラス、デモクリトス、アブルカリスは、それら〔植物〕は知性と認識を有するとした。

#### 擬アリストテレス (『植物について』 A 2. 817 a 1 [p.10, 7 Meyer])

アブルカリスがいったこと、すなわち植物の中にも女の性と男の性が見出されるかどうか、あるいはそれらの両性からなる混合種が見出されるのかどうか、研究しなければならない。

#### 擬アリストテレス (『植物について』 A 2. 817 b 35 [p.13, 2 Meyer])

またアブルカリスは、植物も発生したのであるが、しかしその仕上げにおいて完成されていない劣った世界においてであり、世界が仕上げられてから動物が発生したといった。

### 71

#### ヒポクラテス (『古い医術について』 20)

「人間とは何かを知らない者が医術を知るということは不可能である。人間を正しく治療しようとする者は〔まず〕このことを知らねばならない」と語る医者やソピストたちがいる。だが彼らの論は哲学に属するものであって、例えばエンペドクレスや、あるいは自然について書いている他の人たちが、人間は元来何であるかとか、最初どのようにして生じたかとか、何から出来ているかといったことについて述べているがごときものである。ソピストや医者のある人たちによって自然について述べられ、あるいは書かれてきたものは、絵画術に当てはまらない以上に医術に当てはまらぬとわたしは考えるものである。また自然について何か確実なことを知ることは、医術以外の他のどこからもできないことであるとわたしは考える。

### 72

#### アエティオス (『学説誌』 V 19,5 [Dox.430])

動植物の最初の発生は決して五体完全なものとして生じたのではなく、部分ごとに分かれて別々に

生じたとエンペドクレスはいう。しかし第二の段階でそれら諸部分は互にくっつき合い、化物のようなものが生まれた。第三の段階では五体完全なものとして生まれるようになった。第四の段階ではもはや土や水といった同質のものからではなく、互いによって生まれるようになったが、ある場合には栄養が濃縮化されることによってであり、またある場合には雌の容姿の美しさが生殖運動の刺戟となることによってである。動物の種類は混合の質によって区別される。あるものはより一層水へ向かう傾向性を有し、火的要素が優勢であるものは空中へ飛翔し、より重いものは地上に生きる。だが混合において部分を等しく分け持つものは胸全体で共鳴した [?] <sup>1</sup>。

1) ディールスは「あらゆるところに適応した」という意味に解している。

**ケンソリヌス** (『生誕の日について』 4,7)

しかしエンペドクレスは卓越したその詩において …… 何か次のようなことを断言している。最初四肢はそれぞれ単独に孕むがごとき大地からそのいたるところで産み出された。そしてそれらが寄り集まり、固体たる人間の火と同時に水分で混合された素材を作り出した。

**ヴァロ** (『メニッポス諷刺文集』断片 47『エウメニデス』 Bücheler)

エンペドクレスは、人間はブリトゥム [ほうれん草の一種] のように大地から生まれたという。

73

**アリストテレス** (『呼吸について』 14. 477 a 32)

ところでエンペドクレスは、動物の中で最も熱いものや火を最も多く有するものは、その本性内に存する熱の過剰を回避するために水中に棲むと主張しているが、これは正しくないのである。

**テオプラストス** (『植物の諸原理について』 I 21,5)

エンペドクレスもまた動物についていっているように。すなわち過度に火的なものを自然は湿気へと導くのである。

74

**アエティオス** (『学説誌』 IV 22,1 [Dox.411])

新生児の最初の呼吸は、胎児の中の羊水が退去して空になったところに外部の空気が向かって行って貯水場所の空いたところに侵入することによって起こるとエンペドクレスはいう。その後すぐ [新生児に] 生れつきそなわる熱が外に向かう衝動によって空気を絞り出したが、これが呼気であり、また反対に内部に退くことによって空気を反転して侵入させたが、これが吸入である。現在なされている呼吸は血液が移動することによるのであり、それが表面に向かって移動し、その外部に向かう運動の間にそれ自身の流出によって鼻孔を通して空気を絞り出すとき、呼気が生じ、また再び血液が逆流することによって稀薄となったところへ空気が反転して入ってくることによって吸入が生じるのである。彼はクレプシュドラ [水取り器] の場合を思い出させている。

75

**アエティオス** (『学説誌』 V 18,1 [Dox.427])

[なぜ7ヵ月児は生きうるか] 人間の種族が大地から生まれたとき、太陽の歩みがゆっくりであった

ために一日は時間の長さの点で今日の10ヵ月と同じであったとエンペドクレスはいう。時が経過して一日が今日の7ヵ月と同じとなった。それゆえに10ヵ月児も7ヵ月児もいるのである。世界の本性は胎児が一日で成長し、その夜に生まれるように配慮していたのである。

76

プラトン (『パイドン』96 A - B)

ソクラテスはいった。「というのは、わたしは、ケベスよ、若いとき、『自然についての研究』と人々が呼ぶあの知恵を求めて、それはもう熱中していたのであった。なぜなら、それぞれのものがなにゆえ生成するのか、またなにゆえ消滅するのか、そしてなにゆえ存在するのかという、それぞれのものの原因を知るということは素晴らしいことであるようにわたしには思われたからである。そしてわたしはまず最初次のようなことを考えて自らを何度も上へ下へとひっくり返したものであった。果たしてある人々のいうように、熱と冷がある種の腐敗に与るときに生物は形づくられるのであろうか。またわれわれが思考するのは血液によってであろうか、あるいは空気によってであろうか、あるいは火によってであろうか、それともそれらのいずれによってでもなく、脳によってであろうか、等々と。」

77

アエティオス (『学説誌』V 27,1 [Dox.440])

動物は固有の物質の沈殿によって養われており、熱があれば成長するが、その双方がなくなれば衰え死滅するとエンペドクレスはいう。また現在の人間は、最初の人間に比べれば、幼児のレベルでしかないという。

擬ガレノス (『医学定義集』99 [XIX 372 K.])

ヒポクラテス、エラシストラトス、エンペドクレス、それにアスクレピアデスは、養分の消化はどのようにしてなされるとするのか。… エンペドクレスは腐敗によってであるとす。

ガレノス (『ヒポクラテス「体液について」注解』VI 1 [XVIII A 8 K.])

これらの人々には、われわれが未消化というものを「未腐敗」と呼ぶ古い習慣が残っていた。

78

アエティオス (『学説誌』V 22,1 [Dox.434])

肉は等しい割合で混合された四元素から生み出され、筋は火と土が二倍の水と混合されることによって生じ、動物の爪は筋が空気と出合った際に冷やされることによって生み出され、骨は水と土が二、火が四からなるとエンペドクレスはいう。土の中にこれら諸部分が混合されることによってである。また汗と涙は血液が溶解し、より微細になるために染み出すことによって生じるという。

アリストテレス (『動物部分論』A 1. 642 a 17)

なぜなら自然は質料がそうである以上に原理だからである。エンペドクレスでさえある箇所ではところどころで真理そのものに導かれてこのことに思い当り、例えば骨とは何であるかを説明する際など、比〔ロゴス〕が実体であり自然であるといわざるをえなくなっているのである。なぜなら骨とは元素のひとつであるとも、その内の二つないしは三つであるとも、そのすべてであるとも彼は問わず、それらの混合の比〔ロゴス〕であるというからである。

アリストテレス (『デ・アニマ』A 4. 408 a 13)

だが同様に魂は混合の比〔ロゴス〕であるというのも不条理である。なぜなら肉と骨とでは元素の混合は同じ比ではないからである。したがっていやしくももし〔身体の〕すべてが混合された諸元素からなるとすれば、そして混合の比〔ロゴス〕が調和であり魂であるとすれば、人は多くの魂を持つことに、しかも身体の全体にわたって持つということになるであろう。だが人は少なくともエンペドクレスに対して次の問いに答えるよう要求することができよう。というのも彼は身体各部はそれぞれ比〔ロゴス〕によってあるというのだからである。すなわち魂は比であるのか、それともむしろそれとは異なるものとして四肢の内に生じてくるものなのか。さらに「愛」はどのような混合の原因でもあるのか、それとも比に則った混合の原因であるのか。「愛」もまた比であるのか、それとも比とは異なる何かであるのか。

擬アリストテレス (『氣息について』9. 485 b 26)

エンペドクレスは、骨の本性はただひとつであるとした。いやしくもすべての骨が混合において同じ比を有するとするならば、馬の骨もライオンの骨も人間の骨も異なるところないと彼は考えたのである。

プルタルコス (『自然学的諸問題』20,2 p.917 A)

エンペドクレスのごとき若干の人々は、涙は、ちょうど牛乳の乳漿のように、血液が掻き混ぜられて、そこから押し出されたものであるという。

79

ソラノス (『婦人科学』I 57 [CMG IV 42,12])

それ〔臍の緒〕は数において〈四つの〉管から、すなわち二つの静脈の管と二つの動脈の管からなっており、それらを通して血液の素材や氣息の素材が胎児に運ばれるのである。それらの管は肝臓に植え込まれているとエンペドクレスは考えるが、パイドロスは心臓に植え込まれていると考えている。

80

ソラノス (『婦人科学』I 21 [CMG IV 14,9])

なぜならそれ〔月経〕は時には二三日早まることもあれば、遅れることもあるからである。それはそれぞれの女性に固有の期日で起こるが、ディオクレスも〈いう〉ように、またエンペドクレスも語っているように、月の光の満ち欠けのように、いつも同じ〈周期〉で〈起こる〉わけではないのである。なぜなら月の20日目を前にして月経を起こす女性もあれば、20日目に起こす女性もあり、また月の光が満ちるときに起こす女性もあれば、欠けるときに起こす女性もあるからである。

81

アリストテレス (『動物発生論』Δ 1. 764 a 1)

またある人々は、エンペドクレスもそのひとりであるが、それ〔雌雄の相違〕は母胎の中で生まれるという。なぜなら熱い子宮に入ったものは雄になり、冷たい子宮に入ったものは雌になると彼はいうからである。そしてその熱さと冷たさの原因は月経の流れであり、それがより冷たいかより熱いか、

またより古いかより新しいかによるのである。…なぜなら実際エンペドクレスの方が〔デモクリトスに比べて〕呑気に考えているのであって、彼はそれら〔男女の身体〕の部分が全体として、それぞれ陰部と子宮で大きく相違しているのを見て、冷たさと熱さだけで相互に相違すると思ったのである。

#### アリストテレス（『動物発生論』Δ 1. 765 a 8）

雌と雄を子宮の熱さと冷たさによって区別するエンペドクレスの説に対してもまた、反対せざるをえない。

#### アエティオス（『学説誌』V 7,1 [Dox.419]）

エンペドクレスは、雄と雌〔の相違〕は熱さと冷たさによって生まれるとする。ここから最初の雄は大地の東ないしは南の方で生まれ、雌は北の方で生まれたといているのである。

#### アエティオス（『学説誌』V 8,1 [Dox.420]）

奇形は精子の過剰ないしは不足、あるいはその運動の混乱、あるいは偏った分割ないしは偏向から生まれるとエンペドクレスはいう。このように彼は〔その〕原因の説明のほとんどすべてを先取りしていたように思われる。

#### アエティオス（『学説誌』V 10,1 [Dox.421]）

エンペドクレスは、双子や三つ子は精子の過剰や分裂から生まれるとする。

#### アエティオス（『学説誌』V 11,1 [Dox.422]）

どこから両親や祖先に似るということが生まれるのか。エンペドクレスは、似るということは精液に含まれた種子の支配的性格によって生まれ、似ないということは精子中の熱が消散することによって生まれるという。

#### アエティオス（『学説誌』V 12,2 [Dox.423]）

生まれた子供が両親以外の者に似ていて、両親に似ないということがどうして起こるのか。エンペドクレスは妊娠中に妊婦が表象するものによって胎児は形づくられるとする。なぜならばしばしば妊婦が彫像や肖像画に恋をして、それらに似た子供を生むということがあったからである。

#### ケンソリヌス（『生誕の日について』6,6）

種子が右側から出るときには男の子が生まれ、左側からのときには女の子が生まれるという点ではアナクサゴラスとエンペドクレスは一致する。この点については彼らの見解は一致するのであるが、子供たちが〔両親に〕似るという問題については相違するのであって、この問題に関するエンペドクレスの見解は整然と論じられていて、以下のごとくである。両親の種子の中で熱さが等しい場合には父親に似た男の子が生まれ、冷たさが等しい場合には母親に似た女の子が生まれる。父親のが熱く、母親のが冷たい場合には、母親の顔つきを再現するような少年となるであろう。それに対して母親のが熱く、父親のが冷たい場合には父親に似た少女が生まれるであろうという。

#### ケンソリヌス（『生誕の日について』6, 9 - 10）

つづいては双子についてであるが、時にそういったものが生まれるのは種子の状態によって起こる

ことであるとヒッポンは考えた。すなわち種子がひとりの子供に十分である以上にある時、それらは二つに分かれるのである。このこと自体にはエンペドクレスも幾分感じるどころがあったように思われる。というのは、彼はなぜ分割されるのかというその理由を申し立てるといことは〔もはや〕しないで、分割されるという事実を指摘した上で、双方とも熱さの等しい座に着座するなら双方とも男の子として生まれ、冷たさの等しい座に着座するなら双方とも女の子として生まれるが、それに反して一方は熱く、他方は冷たいなら、生まれてくる子供は異なる性のものとなろうといているからである。

82

**アリストテレス**（『動物発生論』B 8. 747 a 24）

騾馬の種族はその全体が不妊である。その原因についてはエンペドクレスとデモクリトスが語っており、一方エンペドクレスの語るところは明確でなく、デモクリトスの方が一層分かりやすく語っているが、彼らの述べるところは共に正しくない。というのも、同種性に反して〔すなわち異種間で〕交尾するすべての場合を彼らは同列に論じているからである。… エンペドクレスの説明は次のごとくである…。〔B 92がつづく。〕

**アエティオス**（『学説誌』V 14,2 [Dox.425]）

〔なぜ騾馬は不妊なのか〕エンペドクレスは子宮の小ささと低さと狭さの故であるとする。それはひっくり返ったような仕方で腹部にくっ付いているのである。あるいはまた精液がその中にまっすぐ射精されないからであり、あるいはたとえそれがなされても、子宮が受け取らないからであるとする。

83

**アエティオス**（『学説誌』V 21,1 [Dox.433]）

〔どのくらいの期間をかけて動物は胎内で形づくられるのか〕人間の場合には36日目から分化がはじまり、49日目から部分ごとに完成されるとエンペドクレスはいう。

**オリバシオス**（『医学論集』lib.incert.15 [CMG 6.2.2, 106.2 - 7]）〔アテナイオス III 78,13（ディオクレテス、fr. 175 Wellm.）より〕

36日目頃、あるいは遅くともそれに4日を加えた40日目頃、身体の全体が分化しているのが初めて見られる。胎児の全般的な分化の時期の点では自然学者エンペドクレスもまた同意見であり、また男の方が女より早く形づくられ、右側のそれの方が左側のより早く形づくられるという。

**ケンソリヌス**（『生誕の日について』7,5）

婦人は7ヵ月で出産することができると多くの人が主張している。たとえば… エンペドクレス、エピゲネス、その他多くの人が。

84

**ケンソリヌス**（『生誕の日について』6,1）

エンペドクレスは、この点ではアリストテレスも彼に追随しているが、すべてに先立って心臓が成長すると断定した。なぜならそれは人間の生命にとって最も重要だからである。

85

### アエティオス（『学説誌』 V 24,2 [Dox.435]）

エンペドクレスは、眠りは血液中の熱の適度の冷却によって起こるとする。完全に冷却すると死となる。

### アエティオス（『学説誌』 V 25,4 [Dox.437]）

エンペドクレスは、死は火〈と空気と水と土〉の分離によって起こるとする。それらから人間の結合はなっていたのである。したがってこの見解によれば、死は身体と魂に共通なのである。また眠りも火の分離によって起こるとする。

86

### テオプラストス（『感覚論』 1 - 2 [Dox.499]）

(1) パルメニデスとエンペドクレスとプラトンは同じものによって〔感覚を成立させ〕、アナクサゴラスやヘラクレイトス一派の人々は反対のものによって〔成立させる〕。… (2) 個々の感覚のそれぞれについては他の人たちはほとんど何も語っていないが、エンペドクレスはそれらも同一性に還元しようと試みている。

### テオプラストス（『感覚論』 7 - 24 [Dox.500 - 506]）

(7) エンペドクレスはすべての感覚について同じように語っており、それぞれの孔に適合することによって感覚はなされるという。そこからある感覚は別の感覚の対象を判別することができないといったこともまた起こるのである。というのは、孔が感覚されるものに対して、ある場合には何らかの意味で広過ぎ、ある場合には狭過ぎるからであり、したがってあるものは触れることなく通り抜け、あるものは全然入ることができないからである。彼はまた眼とはどのようなものであるかを説明しようと試み、次のようにいっている。すなわち〔眼とは〕その真中に火があり、その周囲に〈水と〉土と空気があるが、火は微細であるために、ちょうどランプの中の光のように、それらを通り抜けて行くのである。そして火の孔と水の孔が交互になっており、そのうち火の孔によって明るいものが、水の孔によって暗いものが認知されるという。すなわちそれぞれがそれぞれの〔孔〕に適合するのである。また色も流出物によって視覚にまで運ばれるという。

(8) 〔すべての眼が〕同じように構成されているわけではなく、〈ある眼は同じものからなり〉、ある眼は対立するものからなる。またある眼の場合には火が真中にあるが、ある眼では外にある。それゆえ動物のあるものは昼間の方が一層視力がきくが、あるものは夜の方がきくのである。火が少ないものは昼間しか見えない。なぜならそういったもの場合には内部の光が外部の光によって〔補われ、〕釣り合うようにされねばならないからである。その反対のもの〔すなわち水〕が少ないものは夜型である。なぜならそういったもの場合も〔夜に〕足りない分が補われねばならないからである。逆の場合はそれぞれこの逆のあり方をする。すなわち火が勝っているものは〔昼間〕視力が鈍い。〈というのは〉昼にはさらに火が増大して、水の孔を蔽い、占領するからである。水が勝っているもの場合にはこれと同じことが夜起こる。なぜなら水によって火が蔽われるからである。そして水が外からの光によって分離されるまで、あるいはまた空気によって火が分離されるまで、〈このことはつづく〉。すなわち反対のものがそれぞれの癒しとなっているのである。双方とも等しい割合に混合された眼が最もうまく混合された眼であり、最もよい眼である。視力についてはほぼこういったことが彼のいうところである。

(9) 聴覚は中に入ってきた音によって生じる。すなわち〈空気〉が音声によって動かされて、内部で響くのである。すなわち聴覚は等しい響きを発する鈴のようなものなのであって、これを彼は「肉

の枝」と呼んでいる。空気が動かされると、その堅い部分を打って、響きを作り出すのである。嗅覚は呼吸によって生じる。それゆえ呼吸の運動が最も激しい場合に、それは最も臭いを感じる。大多数の臭いは微細で軽いものから流れ出る。味覚と触角については、そのそれぞれについて、それがどのようにして生じるかも、また何によって生じるのかも、彼は規定していない。ただ孔に適合することによって感覚はあるという一般的なことを語っているだけである。諸部分や混合において、同じものによる場合は快が生じ、反対のものによる場合は苦が生じると彼はいう。

思慮や無知についても彼はまったく同じように語っている。(10) なぜなら思慮深くあるのは同じものによってであり、無知であるのは同じでないものによってであると彼はいうからである。したがって思慮は感覚と同一か、ほぼ同じようなものであるわけである。というのも彼は、どのようにしてわれわれはそれぞれのものをそれぞれのものによって認識するのかを列挙した上で、最後のところで次のように付け加えているからである。

〈なぜなら〉すべてはこれらのものから繋ぎ合わせて形づくられているのであり、

そしてこれらのものによって彼らは思慮し、また快を感じ、苦しみを感じるのだから。

それゆえわれわれは血液によって最もよく思慮すると彼はいう。なぜなら肢体のうち、この血液において元素は最もよく混じり合っているからである。

(11) そこで、等しいか、ほぼ等しい割合で混合されており、また隔たりも遠くなく、大きさの点で小さ過ぎもせず、また度を越してもいない者たちが、最も思慮深く、感覚に関しても最も精確であると、彼はいう。それに近い者たちもまたその割合に応じてそうであるが、その反対の状態にある者は愚昧である。また元素がまばらで稀薄な者は愚鈍で厄介者である。元素が密で細かく砕けている者はすぐに激昂し、血液の動きの敏捷さのために多くのことを企てるが、わずかしか成就しない。〔身体の〕どこかあるひとつの部位において混合が均衡のとれている者は、それによってその部分において賢明である。それゆえある者はすぐれた弁論家であり、ある者は腕のよい技術者である。後者の場合には手において、前者の場合は舌において、混合がそういったものなのである。他の能力に関しても事情は同じである。

(12) さて感覚と思慮はこのようにして生じるとエンペドクレスは考えたわけであるが、彼の語った事柄のうち、まず最初に人は、なぜ生物は感覚するという点で他のものと異なるのかといことを問題とするでもあろう。なぜなら無生物の孔にも物は適合するであろうからである。というのも、彼は混合をあらゆる場合に孔の適合性によって成立させているのである。まさにこのゆえに油と水は混じり合わないが、他の液体は混じり合うのであり、また彼がそれぞれ特有の混合をリストアップしているものについてもそうである。したがってすべてのものが感覚することになるであろうし、また混合と感覚と成長は同じであることになろう。なぜならそこに異なる何らかの観点を〔さらに〕付け加えるのでなければ、彼はすべてを孔の適合性によって成立させることになるからである。

(13) 次は生物そのものの内部についてであるが、どうして外部の火よりはむしろ動物内の火が知覚されないのであるか。いやしくもそれらも互いに適合し合うとするならばである。なぜなら適合性も「同じ」ということもそこにもあるからである。さらにもし内部の火それ自身は孔を充たすことができないうが、外から入ってきた火は充たすことができるのだとするなら、そこには何らかの相違点があるのでなければならぬ。したがってもし〔外部も内部も〕あらゆる点において、またあらゆるあり方において同じであったとするなら、感覚はないことになろう。さらに孔は空か充ちているかである。もし空だとするなら、彼は己れのいうところと一致しないことになる。なぜなら一般に空虚は存在しないと彼はいつているからである。もし充ちているとするなら、動物は常に感覚していることになろう。なぜなら彼もいうごとく、同じものが適合するのは明らかだからである。

(14)さらにまた、もし種類を異にするものの大きさも〔互いに〕適合することがありうるとするなら、とりわけ彼のいうように、その混合が対応関係にない〔火と水からなる〕視覚が、ある時には火によって、ある時には空気によって孔が蔽われて曇らされるといったことが起こる場合がそうであるが、そういったことが可能であるとするなら、人はまさに同じ困難を感じるであろう。そこで、もしそれらの間にも適合性があり、同類ならざるものの孔も充たされることがあるとするなら、感覚が生じるとされるとき、どのようにして、またどこでそれらのことが立ち去るのか。というのも、〔そうであるためには〕何らかの変化をそれらに当てがわねばならないからである。したがっていずれの場合にも難点がある。なぜなら、空としなければならないか、動物は常にすべてのものを感覚するとしなければならないか、あるいは同類ならざるものも適合することがあるが、感覚を生み出すことも、感覚を生み出すものに固有の変化を起こすこともないとしなければならないか、だからである。

(15)さらに、類似のものがたとえ適合しなくても、ただ触れさえすれば、とにかくも感覚は生じるとするのが道理であろう。なぜなら認識を彼は二つのもの、すなわち「同じもの」と「接触」に帰しているからである。それゆえに彼はまた「和合する」といったのである。したがって小さいものが大きいものと触れ合っても、感覚はあるであろう。一般にかの人〔エンペドクレス〕にあっても、「同じもの」という観点を省略しても、適合性だけで十分なのである。すなわち互いに感覚されることがないのは孔が適合していないゆえであると彼はいうが、流出物が同じか同じでないかは、それ以上何も規定していないのである。したがって、感覚は同じものによってあるのでもなければ、何らかの対応関係の欠如によって識別しないとといったことでもなく、すべての感覚とすべての感覚対象が同じ本性を有さねばならないこと必然である。

(16)のみならず快と苦の彼の説明も整合的でない。同じものによって快は生じ、反対のものによって苦は生じると彼はするのであるが。「憎しみ」は「生まれと混合と刻印された姿において互いに最も隔たっている」ことによってであると彼はいつている。すなわち快や苦を彼ら〔エンペドクレスとアナクサゴラス(?)〕は感覚の一種であり感覚に伴うものとしている。したがってあらゆる場合に同じものによって生じるわけではないのである。さらに彼のいうごとく、もし同種のもものが接触において快を最も多く生み出すとするなら、同性のもものが最も快く感じられるであろうし、また一般に最も強く感覚されるであろう。なぜなら同じものによって感覚も快も彼は成立させるのだからである。(17)さらにまた感覚するときわれわれはしばしば感覚そのものに苦痛を感じる。アナクサゴラスによれば、常にである。〔アナクサゴラスによれば〕すべての感覚は苦痛を伴うから。さらに個々の感覚においても〔困難がある〕。というのは、認識は同じものによって生じるとされているからである。すなわち、視覚は火とその反対のものからなるから、白や黒は同じものによって認識することができようが、灰色やその他の混合された色はどうして認識できるのか。火の孔によってとすることも、水の孔によってとすることも、両者からなる他の共通の孔によってとすることも、彼はなかろうからである。だがわれわれは単純な色に劣らずそれらの色を見るのである。

(18)あるものは昼間よく見え、あるものは夜よく見えるというのも不条理な仕方で論じられている。なぜなら小さい火はより大きい火によって消されるからであり、それゆえにわれわれは太陽を、あるいはまた一般に純粋な光を、真直ぐ見ることができないのである。したがって光が不十分であるものは昼間視力が劣るとされるべきであった。あるいは、彼のいうように、同じものは増大させ、反対のものは消滅させ妨げるとするなら、すべてのものが、すなわち光が少ないものも多いものも、昼間明るいものをよりよく見、夜には暗いものをよりよく見るとされるべきであった。ところが若干の動物を除けば、すべての動物がすべてのものを昼間一層よく見るのである。これら若干の動物の場合には、それ固有の火が強力であると考えるのが合理的であろう。二三の物がその色によって夜一層輝くよう

に。

(19)さらに混合が等しい割合の要素からなる〔動物の〕場合にも、それぞれ〔の要素〕が順番に増し加えられねばならないことになる。したがって、もし一方が過剰になると他方の視覚を妨げるとすれば、すべての〔動物の視覚の〕状態はほぼ同じようなものとなる。そして視覚の諸様態を区分するのは困難となる。また他の感覚についても、その対象をわれわれはいかにして同じものによって識別するのであるか。なぜなら同じものとは境界の定めがたいものだからである。というのは、音によって音を識別するのも、臭いによって臭いを識別するのも、その他のものの場合も同種のものによって識別するのではなく、むしろいわば反対のものによって〔われわれは識別するのだからである〕。〔同じものによって識別するのだとすれば、〕何の作用も被っていない感覚を持ってこななければならない。耳の中に〔すでに〕響きがあるとすれば、あるいは味覚の内に味があり、嗅覚の内に臭いがあるとすれば、それらはすべてはっきりしないものとなる。同じもので一杯になっておれば、それだけ一層そうであろう。それらについて〔別の〕何らかの規定が述べられるのではないらばである。

(20)さらに流出物についての理論であるが、たとえ十分に語られてはいないにしても、それでもそれは他の感覚についても何らかの仕方で想定されるべきであろう。だが触角と味覚については、それは容易でないのである。というのも、いかにしてわれわれは流出ということによって〔それら触角と味覚を〕識別するということであろうか。あるいはどうして孔への適合がざらざらや滑らかさであるのか。なぜなら諸元素のうち、ただ火に関してのみ流出ということはある、他の元素のいずれからもそういったことはないと思われるからである。さらに消耗は流出によって起こり（これを彼は最も一般的な証拠としている）、そして臭いは流出物によって発生するとするなら、最も多くの臭いを有するものが最も速やかに消失しなければならないであろう。ところが事態はほぼその反対となっているのであって、植物やその他のものの中で最も匂うものが最も長持ちするのである。また愛の時期には感覚はまったくないか、わずかしかないことになる。その時期には〔すべては〕一つに結合し、流出することはないからである。

(21)しかし聴覚について、内部の音によってそれは起こると彼は説明したわけであるが、ちょうど鐘の場合のように、内部に音を作り出したことで、どうして人は聞くのか明らかになったと考えているのなら、ばかばかしい。なぜなら、外の音をかか内部の音を通してわれわれは聞くのであるが、この内で響いている内部の音は何によって聞くのか。まさにこのことが探求されるべく残されているのである。嗅覚について彼のいうところもまた不条理である。第一に〔すべての事例に通用するような〕普遍的な理由を彼は示していない。なぜなら嗅覚を有する動物の二三のものは全く呼吸しないからである。次に最も激しく息をするものが最も臭いを感じるというのも単純である。なぜなら感覚が健全でなかったり、何らかの理由で開いていなかったりするときには、そのことは何の役にも立たないからである。多くのものが不具であったり、全然感覚しないといったことがあるのである。加えて、息せき切るもの、忙しく息をするもの、眠るものが、より一層臭いを感覚することになる。彼らの方がより多く空気を吸うからである。ところが事実はその反対である。(22)というのも、恐らく呼吸は嗅覚の自体的な原因ではなく、付帯的な原因だからである。このことは他の動物や上述の諸様態によって立証されているところである。だが彼は呼吸が原因であるとして、最後にまた再び判で押したように次のようにいっている。「さてこのようにして、すべてのものは息と嗅覚を分け持つこととなった。」また軽いものが最も臭うというのも真実ではなく、臭いもまた〔それに加えて〕そこに存していなければならない。なぜなら空気や火は最も軽いが、臭いの感覚を作り出すことはないからである。

(23)同様に思慮についても、思慮も感覚も同じものに属すと彼がするとき、人は疑問を持たずには

おれないであろう。なぜなら〔だとすれば、〕すべてのものが思慮を持つことになろうからである。また変化と同時に「同じもの」によって思慮が生じるということがどうして可能なのか。というのは、同じものが同じものによって変化することはないからである。その上、思慮は血液によるというのも、まったくばかげている。なぜなら動物の多くのものが無血だからである。また有血の動物であっても、感覚に係わる部分は部分の中でも最も無血的なのである。さらにまた骨も毛も感覚することになろう。とにかくもそれらはすべての元素から出来ているのであるから。また思慮と感覚と快は同じものであることになるし、また苦と無知も同じであることになる。したがって無知と同時に苦が生じねばならなかったであろうし、思慮と同時に快が生じねばならなかったであろう。

(24)各人にとって〔その特殊な〕能力は〔それぞれの〕部分における血液の混合によって生まれるのであって、舌がなめらかな弁舌の原因であり、手が職人芸の原因であるといったごとくであり、それらは〔単に〕器官の役割に甘んずるものではないとするのも、ばかげている。それゆえ人は思考とは何の係わりもない血液の混合よりは、むしろ〔器官の〕形態にその原因を割り当てるべきであったろう。というのも、〔人間以外の〕他の動物の場合にはそういったようになっているからである。

このようにエンペドクレスは多くの点で誤ったように思われる。

## 87

### アリストテレス (『生成消滅論』 A 8. 324 b 26)

ところである人々は、最終的な、すなわち最も厳密な意味での作用者が一種の孔に入り込むことによってそれぞれのものは作用を受けると考えており、われわれが見たり聞いたり、その他すべての感覚を働かせるのも、こういった仕方によると彼らはいふ。さらに物が見られるのは空気や水や透き通ったものを通してであって、それらが微細なるがゆえに眼には見えないが、周密に配列された孔を有するためであり、透き通っていればいるだけ多くの孔を有するのである。さてかの人々は幾つかのものについてこのように規定しており、エンペドクレスもそのひとりであるが、それも作用するものと作用されるものだけでなく、混合もその孔の大きさが互いに適合し合っているものだけが混ざり合うという。

### ピロポノス (『アリストテレス「生成消滅論」 注解』 160,3)

エンペドクレスの場合にもある固体の不可分な部分があるといわねばならないと、彼〔アリストテレス〕はいふ。物体のあらゆるところで孔が連続しているということはないからである。そういうことは不可能である。なぜなら〔さもなければ、〕物体の全体が孔であり、空であることになろう。したがって、このことが不条理であるなら、物体の触れられる部分は固体で不可分でなければならぬ。そしてそれらの間が空であって、これをエンペドクレスは「孔」と呼んだのである。

### ピロポノス (『アリストテレス「生成消滅論」 注解』 178,2)

孔を仮定する人々のある人たちはそれらを空であるとはせず、空気のような極めて微細なある物体によって満たされているとしたことをわれわれは知っている。この点、彼らはそれを空であるとする人たちと異なっているわけである。

### ピロポノス (『アリストテレス「生成消滅論」 注解』 154,5)

孔を導入する人たちが空虚は存在しないといっているのだから、孔は空虚とは異なる。

### 擬ピロポノス（『アリストテレス「動物発生論」注解』123,13）

『生成消滅論』においても彼〔アリストテレス〕がいていることであるが、エンペドクレスは、月下のすべての物体中には、例えば水や油などの中には、孔と詰まった部分が混在しているといった。そして孔を彼は「空ろなもの」、詰まった部分を「密なもの」と呼んだ。

88

### アエティオス（『学説誌』IV 14,1 [Dox.405]）

〔鏡の像について〕エンペドクレスによれば、鏡の表面で構成される流出物による。鏡から分離してきて前方の空気（流れはそれへと向かって行く）と一緒に移動させる火〔光〕によって流出物が圧縮されることによってである。

89

### アレクサンドロス（『問題集』II 23 p.72,9）

ヘラクレスの石〔磁石〕について。なぜそれは鉄を引きつけるのか。エンペドクレスは双方からの流出物によってであって、石の孔が鉄の流出物と対応し合っているために鉄は石に向けて運ばれるのだという。すなわち、石の流出物が鉄の孔の上の空気を追い払い、それらを蔽っているものを移動させるのである。そしてそれが取り除かれると流出物が一挙に流れ出、鉄もそれについて行くのである。鉄からの流出物が石の孔へと運ばれるとき、それはそれら〔の大きさ〕が孔と対応し合っており、孔に適合するからであるが、そのとき鉄もまた流出物と一緒にについて行き、一緒に運ばれるというわけである。だが人は、たとえ流出物に関することは承認するとしても、一体どうして石は自分の流出物について行かないのか、そしてどうして鉄に向かって動かないのかという点をさらに問題にしたいと思うであろう。というのも、上述のことからは、鉄が石に向かって動かされるというのに少しも劣らず、石が鉄に向かって動かされるといえるようからである。さらに、石〔磁石〕がない場合であっても、なぜ鉄は時には他の何らかのものに向かって動かされるということがないのか。それからの流出物が一挙に運ばれるということがあるならば。すなわち、なぜ石からの流出物だけが鉄の孔を蔽って流出を押し止めている空気を動かすことができるのか。さらにまた、なぜ他ものも他の何らかのものに向かってこのような仕方では運ばれないのか。多くのものが相互に流出物と対応し合った孔を有すると彼によっていわれているのだからである。少なくとも彼は次のようにいっている。〔B 91 がつづく。〕

### プセロス（『石について』26 [Ideler, *Physici* I 247,24 ; Mély, *Lapidaire* p.204,12]）

石〔磁石〕において見られるこれらの力の原因を多くの人が勇気をもって説明した。昔の知者の中ではアナクサゴラスとエンペドクレスとデモクリトスがそうであり、われわれの時代とそれほど離れていない人の中ではアプロディシアスのアレクサンドロスがそうである。

90

### アエティオス（『学説誌』IV 13,4 [Dox.403]）

エンペドクレスは〔視覚を〕光線によるものと剥離像によるものと解釈しているが、より多く後者の解釈に傾いている。というのも、彼は流出物といったものを認めているからである。

91

アリストテレス (『感覚と感覚されるものについて』 2. 437 b 9)

だがあのような場合〔眼の動きが速い場合〕には、ちょうど反射においてもまたそういうことが起こるように、眼は自分自身を見るのである。とはいえ、エンペドクレスもいい、また『ティマイオス』にも書かれているように、もしそれが火であるとするなら、そして見るということは、ちょうどランプから出てくるように〔眼から〕光が出てくることによって起こるとするなら、なぜ眼は闇の中でも見ないのか。

アリストテレス (『動物発生論』 E 1. 779 b 15)

ところでエンペドクレスのいうように、碧い眼は火質であり、黒い眼は火よりも水を多く含むのであって、それゆえ前者、すなわち碧い眼は水を欠くために昼間視力が鋭くないが、後者は火を欠くために夜よく見えないと想定するのは、いやしくも視力というものは、あらゆる場合に火ではなく水に属すとすべきである以上、正しくないのである。

92

プラトン (『メノン』 76 C - D)

ソクラテス それではゴルギアス流に答えてあげようか。それが君には最もついて行きやすからうからね。

メノン ええ、それを望みます。

ソクラテス では君たちはエンペドクレスにしたがって、諸々の存在物からの流出物といったものを語っていないかね。

メノン ええ、たしかに語っています。

ソクラテス そしてまたそれらの流出物がその中に入って行ったり、通過したりする孔といったものも。

メノン ええ、たしかに。

ソクラテス そして流出物のあるものは孔のあるものにその大きさが合致しているが、あるものは小さ過ぎたり大き過ぎたりするのではないかね。

メノン その通りです。

ソクラテス また君は視覚といったものを語らないかね。

メノン 少なくともわたしは語っています。

ソクラテス それでは以上のことから、ピンダロスの言ではないが、「わが汝に語りしことを理解せよ」だ。すなわち色とは〔その大きさが〕視覚に適合していて感覚される事物からの流出物に他ならない。

アエティオス (『学説誌』 I 15,3 [Dox.313])

エンペドクレスは、色とは視覚の孔に適合するところのものであると主張した。元素の数と等しく、それは四つある。すなわち白、黒、赤、黄である。

93

アエティオス (『学説誌』 IV 16,1 [Dox.406])

エンペドクレスは、聴覚は空気が軟骨質の部分に当たることによって生じるとする。そういったも

のが耳の中にぶら下っており、鐘のようにぶらぶらしていて〔空気によって〕打たれるのだと彼はいうのである。

94

**アエティオス**（『学説誌』IV 17,2 [Dox.407]）

エンペドクレスは、臭いは肺による呼吸と一緒に入ってきて識別されるとする。そこで呼吸が難儀となったときには粗さのために感じられないのであって、それは鼻風邪に悩む人に見られるごとくである。

**アリストテレス**（『感覚と感覚されるものについて』4. 441 a 3）

味覚は触角の一種である。ところで水の本性は無味の傾向を有する。しかしエンペドクレスもいうように、水は、小さいために感覚はされないが、諸種の味をそれ自身の内に含んでいなければならないか、あるいは …。

95

**アエティオス**（『学説誌』IV 9,14 [Dox.398]）

パルメニデス、エンペドクレスは、欲求は栄養の欠乏によって生じるとする。

**アエティオス**（『学説誌』IV 9,15 [Dox.398]）

エンペドクレスは、快は同じものによって同じもの〈から〉生じるが、それは欠乏に伴う補充のためであるとする。したがって欲求は同じものが欠乏することによって生じるのである。他方、苦は反対のものによって生じる。なぜなら元素の結合や混合に際して相違するものは互いに対して敵対関係にあるからである。

**アエティオス**（『学説誌』V 28 [Dox.440]）

エンペドクレスは、それぞれのものを〔ひとつの動物として〕完成している諸元素が欠乏することによって動物に欲求が生じるとする。そして快は同性質のものから同種で同じものの混合によって生じ、悩み〈や苦は異質のものから〉生じるとする。

96

**アエティオス**（『学説誌』IV 5,12 [Dox.392]）

パルメニデス、エンペドクレス、デモクリトスは、知性と魂を同じであるとする。彼らによれば、非理性的動物といったものは厳密な意味では存在しないことになる。

97

**アエティオス**（『学説誌』IV 5,8 [Dox.391]）

エンペドクレスは、血液の組成中に〔指導的部分は〕あるとする。

〔参照〕**テオドレトス**（『ギリシア人の病の癒し』V 22）

エンペドクレス、アリストテレス、ストア学徒は、心臓をそれ〔指導的部分〕に割り当てた。そしてさらに彼らのある者は心臓の心室にあるとし、他の者は血液中にあるとする。

98

カエリウス・アウレリアヌス（『急性疾患について』 I 5 p.25 Sich.）

エンペドクレスにしたがう人たちは、〔狂乱の〕ひとつは魂の浄めによって起こるものであり、もうひとつは精神の身体的な原因による錯乱ないしはアンバランスによって起こるという。この後者について今われわれは記述しようとするのであるが、これをギリシア人たちは、それは実に大きな苦悶を生み出すからして、「狂気」と呼ぶのである。

## B 著者断片

### エンペドクレスの『自然について』第1巻、第2巻

#### 1

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』 VIII 60）

このパウサニアスは、アリストイッポスやサテュロスのいうところによれば、彼の愛人だったとのことであるが、実際また『自然について』は次のごとく彼に向けて語りかけたものであった。

パウサニアスよ、聞くがよい。賢明なるアンキトスの息子よ。

#### 2

セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』 VII 122 - 124）

しかしまた別の人たちがいて、彼らは次のように語っている。エンペドクレスによれば真理の基準は感覚ではなく、正しき理性であるが、正しき理性のあるものは神的であり、あるものは人間的である。そのうち神的なものは名状し難いが、人間的なものは表現可能である。真理の基準は感覚の内には存しないということについて、彼は次のように語っている。

肢体に散らばる手のひら〔把握力〕は狭く、  
襲ってきて想いを鈍らせる悲惨は多いからである。

人生の中で生のほんの一部を見るだけで、  
はかなき命の人間どもは煙のように立ち昇り、飛び去って行く。  
あちらこちらと追い立てられる道すがら、それぞれ出会ったものを信ずるに過ぎぬのに、  
全体を発見したと彼らは高言する。

かくのごとくこれらのものは人間どもにとって、見難く、聞き難く、  
思惟によって捉え難いのだ。

だが真理はまったく把握されないものではなく、人間の理性の及ぶ限りにおいて把握されるという点を彼は、上述の詩に次の詩行を付け加えることによって、はっきりと伝えている。

さあれ、汝はここに逃れきたるからには、  
死すべき知恵の達したるものに過ぎぬとはいえ、学ばねばならぬ。

#### 3

セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』 VII 124）

そしてそれにつづく詩句によって彼は、大いなる認識を有すると公言する者たちを非難し、各感覚によって捉えられるものは、理性がそれらを監督する限りにおいてのみ、信じられるという〔原則〕を立てている。最も先の箇所では彼は感覚に基づく所信を一蹴していたのではあるが。彼は次のようにいう。

されど神々よ、この者どもの狂気をわが舌より追い払いたまえ。  
汚れなき口より清らかな泉を流れ出でさせたまえ。  
そして御身、人みな言い寄る白き腕の乙女なるムーサよ、  
わが願わくは、われら束の間の者どもにも聞くを許されしものを送りましたまえ、  
敬虔の国より手綱よろしき馬車を駆りきたって。  
また汝、死すべき者どもより贈られる栄えある榮譽の花々に惑わされて、  
大胆にも神の掟を越えたことを語ることでそれらを受け取り、  
かくて知恵の高座に鎮座するようなことのなきように。  
さればいざ、どうすればそれぞれのものは明らかになるか、手立てを尽くして  
思いみよ。  
見ることを聞くこと以上に信ずることなく、  
また鳴り騒ぐ耳を舌の明示するものの上に置くことなく、  
また思惟への通路のある限り、他の肢体のいずれにも  
信を拒まず、各々がそれによって明らかとなるものをもって考えよ。

#### 4

クレメンス（『雑録集』V 18）

劣れりし者どもは、すぐれた者を信じまいとひたすらに意を用いる。  
されど汝はわれらがムーサの信ずべき教えの命じるままに知るがよい、  
言葉が汝の胸中で篩にかけられしならば。  
すなわちエンペドクレスは、信じないことによって真実に打ち勝とうとするのが劣った者どものやり口であるといっているのである。

#### 5

プルタルコス（『食卓歓談集』VIII 8,1 p.728 E）

それ〔魚を控えること〕は沈黙に対する敬意であって、彼ら〔ピュタゴラス学徒〕は魚を、あたかもそれらが声を押し殺しているかのように、〈物いわぬ〉と呼んだと彼〔スパルタのティンダレス〕はいつている。そしてわたしと同名の人〔すなわちエンペドクレス〕はピュタゴラス学徒の流儀でパウサニアスに次のように教え諭したという。

物いわぬ胸中に隠しておくように。

#### 6

アエティオス（『学説誌』I 3,20）／セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』X 315）

まずは聞け、万物の四つの根を。  
輝けるゼウス、生命育むヘラ、またアイドネウス、  
そして死すべき人の子らのもとなる泉をその涙によって潤すネステイス。

ヘシュキオス (『辞典』)

「不生なるもの」：エンペドクレスのもとでは元素のこと。

プルタルコス (『コロテス論駁』 10 p.1111 F) / アエティオス 『学説誌』 ( I 30,1 [Dox.326,10])

エンペドクレスは、何ものにも誕生といったものはなく、元素の混合と分離があるに過ぎないとする。彼は『自然学』の第1巻において次のように記している。

わたしは汝に他のことを語ろう。およそ死すべきものどもの何ものにも

誕生といったものはなく、

またおぞましき死の臨終といったものもない。

ただ混合と混合されたものの分離あるのみ。

「誕生」とは人間どもによってそれらに付けられし名称に過ぎぬ。

プルタルコス (『コロテス論駁』 11 p.1113 A - B)

これらが混合されて人間の形を取ってアイテールの中にやってくるとき、

あるいは獐猛な獣の種族とか藪〔草木〕の種族の形を取り、

あるいは鳥の種族の形に混合されるとき、その時人々はそれが生まれるといい、

またそれらが分離されるときには、それを不幸な死と呼んでいる。

正しい掟はそうは呼ばないが、習慣によってわたし自身もそう呼びならわす。

プルタルコス (『コロテス論駁』 11 p.1113 A - B)

諸存在を動揺させたり、現象の事実と戦ったりするなどということは彼〔エンペドクレス〕には思いもよらないことだったのであり、彼は〔生成という〕言葉すらもその慣用的な用法から退けていない。ただ彼は事柄の内に有害な誤解を惹き起こすものを退けようとするのであって、次の詩句においては再びそれらの名称に慣用的な意味をあてがっている。

これらが混合されて人間の形を取ってアイテールの中にやってくるとき、

あるいは獐猛な獣の種族とか藪〔草木〕の種族の形を取り、

あるいは鳥の種族の形に混合されるとき、その時人々はそれが生まれるといい、

またそれらが分離されるときには、それを不幸な死と呼んでいる。

正しい掟はそうは呼ばないが、習慣によってわたし自身もそう呼びならわす。

これらをコロテスは引用しているが、エンペドクレスが「人間」とか「獣」とか「藪」とか「鳥」といったものを退けず、むしろそれらは元素が混合することによって創り出されると語っている点を彼は理解していないのである。そして人間どもはそういった混合や分離に「誕生」とか「不幸な死」とか「復讐する死」といった表現を与えて叙述するが、その点で彼らは誤っていると説きはするが、彼は慣用的な言葉をそれらに関して使用することを決して退けはしなかったのである。

プルタルコス (『コロテス論駁』 12 p.1113 C)

とはいえ、エンペドクレスは表現上の問題としてこのことに触れているのではなく、事実の問題として、人々が誕生〔ピュシス〕と呼ぶところのあらぬものからの生成について異を唱えているのだとわたしには思われる。このことはとりわけ以下の詩句によって明らかとなる。

愚かな者ども、彼らには遥かに及ぶ想いといったものがない。

彼らはかつてなかったものが生成したり、

あるいは何か死んで完全に滅び去ると空しく考える。

なぜならこれらは生成をではなく、あらぬものからの生成を廃棄すべきことを、また消滅をではなく、完全なる消滅を、すなわちあらぬものへと滅び去る消滅を廃棄すべきことを聞く耳を有する人々に声高に呼びかける人の詩句だからである。

擬アリストテレス (『メリッソス、クセノパネス、ゴルギアスについて』 2 (6) 975 b 1)

エンペドクレスもまたこれらのことのすべてを認めて、

げにまったくあらぬものから生じきたるとは不可能なこと、

またあるものが完全に滅び去るというのも起りようもなく、耳にしたこともない。

なぜならどこに人がそれを絶えず押しやろうと、そのところにそれは常にあるであろうからといているように。

ピロン (『世界の永遠性について』 2 p.3,5 Cum.)

すなわち何もものあらぬものから生じることはないように、また何かあらぬものに滅び去るといふこともないのである。

げにまったくあらぬものから生じきたるとは不可能なこと、

またあるものが完全に滅び去るというのも起りようもなく、耳にしたこともない。

アエティオス (『学説誌』 I 18,2 [Dox.316,1]) / 擬アリストテレス (『メリッソス、クセノパネス、ゴルギアスについて』 2 (28). 976 b 26)

万有の中にはいささかの空虚も過剰もない。

擬アリストテレス (『メリッソス、クセノパネス、ゴルギアスについて』 2 (28). 976 b 23)

万物の中にはいささかの空虚もない。しからば、どこから何ものがやってくるというのか。

プルタルコス (『コロテス論駁』 12 p.1113 D)

これら [B 11] の後につづく詩句は、それとは反対の仕方では非難されることになる。エンペドクレスは次のように語っている。

知恵ある男であれば、心でそのようなことを思うだにできぬであろう。  
すなわち人々が人生と呼ぶところの生命ある間だけ、  
ただその間だけ彼らは存在し、また彼らには悪しきことも善きこともあるが、  
しかし死すべきものとして形づくられる以前と分解された後では、まったく何もの  
でもあらぬとは。

すなわちこれらは、生まれ出て現に生きているものが存在することを否定する人の言ではなく、むしろ未だ生まれていないものも、すでに死せるものも存在すると考える人の言だからである。

## 16

### ヒッポリュトス (『全異端派論駁』 VII 29)

そして破壊者たる「争い」が生成する諸物すべての生成のデミウルゴスであり製作者であり、また「愛」が生成する諸物の世界を誘導し転化させて一なるものへと回帰させるそれなのである。それらについてエンペドクレスは、その両者とも不死であり、不生であり、生成の始まりを決して受け容れることのないものであるとし、そういった意味において次のように語っている。

なぜなら、それらはかつてあったように、これからもありつづけるであろうし、思うに、無限の永劫がこの両者を失って空しくなるなどということは決してなからうからである。  
「それら」とは何か。「争い」と「愛」である。すなわちそれらは生成し始めたということではなく、以前からあったし、また永遠にありつづけるのである。

## 17

### シンプリキオス (『アリストテレス「自然学」注解』 157,25)

エンペドクレスはその『自然学』の第1巻において… 次のように論じている。

わが語るは二重のこと、すなわちある時には多なるものから成長してただひとつのものとなり、

ある時には逆に一なるものから分かれ出て、多なるものとなる。

死すべきものどもの生成は二重であり、また消滅も二重なのだ。

なぜなら一方では万物の集合がある種族を生み出し、かつ滅ぼすからであり、また他方では再び分かれることによって養い育てられ、そして飛散するからである。

そしてそれらは永遠に交替しつづけて、決して止むことがない。

ある時は愛によってすべてが集まってひとつとなり、

ある時は争いの憎しみによって逆にそれぞれが別々にされる。

〈このように多なるものから一なるものが生まれるのを習いとし、〉

あるいはまた再び一なるものが分かれて多なるものが出てくる限りでは、

それらは生成しつつあるのであって、それらに恒常的な生涯はないのだ。

だがそれらが永遠に交替しつづけて決して止むことがない限りでは、

その限りではそれらは円環をなし、不動のものとして永遠にあるのだ。

いざ、わが物語を聞け。学びは汝が心を成長させるがゆえに。

すなわちわが物語の果てを指し示しつつ先にもいったごとく、

わが物語るは二重のこと。すなわちある時には多なるものから成長してただひとつのものとなり、  
ある時には逆に一なるものから分かれ出て、多なるものとなる。  
すなわち火、水、土、それに空気の限りなき高みとなる。  
そしてそれらから離れて、いたるところで重さの等しい呪われた争いがあり、  
それらの中に長さも幅も等しい愛がある。  
この愛を知性をもって汝は見るべし。眼をもって呆然として座するにあらず。  
それはまた死すべきものどもの肢体にも植えつけられていると考えられ、  
それによって彼らは友愛の思いを抱き、友好的な業をなし遂げる。  
彼らはそれを「悦び」あるいは「アプロディーテ」という呼び名で呼ぶ。  
この愛がかのものどもの間を巡り行くを、死すべき人間は誰も知らぬ。  
だが汝はわが言葉の欺くことなき道行きを聞け。  
すなわちそれらはすべて等しく、生まれの点でも同年齢であるが、  
その司る権限は互いに異なり、またそれぞれにそなわる性格も異なり、  
時の巡るにつれて交互に優勢となる。  
そしてそれらの外には何ひとつ生じもせず、また無くなりもしない。  
なぜなら、もし絶え間なく滅んで行くとするなら、もはや存在しなかったであろうし、  
また何がこの万有を増大させるというのであるか。そしてそれはどこからやってきたと  
いうのか。  
またいかにして滅び去りえようか。それらを欠いては何ひとつないというのに。  
否、ただそれらのみがあるのであって、互いを駆け抜け合いながら、  
ある時にはこのものとなり、ある時にはかのものとなって、切れ目なく永遠に同じであり  
つづけるのだ。

#### シンプリキオス (『アリストテレス「自然学」注解』161,14)

冒頭のところで語られている詩句、「すなわちある時には多なるものから成長してただひとつのものとなり、ある時には逆に一なるものから分かれ出て、多なるものとなる」によって …。

#### プルタルコス (『愛をめぐる対話』13 p.756 D)

しかし友よ、エンペドクレスが「それらの中に長さも幅も等しい愛がある。この愛を知性をもって汝は見るべし。眼をもって呆然として座するにあらず」というのを聞くとき、これはエロスについていわれたものであると考えねばならぬ。なぜならエロスは見ることにはできないが、極めて古い神々のひとつであると考えられるからである。

#### クレメンス (『雑録集』V 15)

エンペドクレスは、「愛」もまた、それを結合的な一種のアガペーと考えて、原理の内に一緒に数え上げている。「この愛を知性をもって汝は見るべし。眼をもって呆然として座するにあらず」と。

#### プルタルコス (『イシスとオシリスについて』48 p.370 D)

エンペドクレスは善をなす原理を「愛」とか「友愛」と呼び、またしばしば「顔立ち穏やかなハルモニア」とも呼んでいる。

19

**プルタルコス** (『原理としての冷たいものについて』 16 p.952 B)

また一般に火は分離し分割する働きをし、水は接着させ保持する力を持っていて、湿り気によって結び合わせ固める。そこでエンペドクレスもまたしばしば火を「呪われの争い」、水分を「とらえて離さぬ愛」と呼ぶことによって、その隠れた意味を示唆しているのである。

20

**シンプリキオス** (『アリストテレス「自然学」注解』 1124,9)

というのも、ここでもまたエンペドクレスは次のように記すことによって、人間や魚や獣や鳥においても「争い」と「愛」が代わるがわる優勢となり合うとしているからである。

このことは死すべきものどもの四肢の塊において明瞭なり。

ある時には身体を分けもつ四肢のすべてが愛によってひとつとなり、

— 最盛期にあつて人生の花咲く頃には —

ある時にはまた忌まわしき争いによって切り裂かれて、

それぞれ離ればなれとなつて、生命の波の砕け散る岸辺をさまよい歩く。

このことは藪をなす草木にも、水を棲み家とする魚どもにも、

山に伏す獣どもにも、翼はばたく鳥どもにも同じこと。

21

**シンプリキオス** (『アリストテレス「自然学」注解』 159,13)

その他さまざまなことを語った上で彼は、火を「太陽」、空気を「光」ないし「天空」、水を「雨」ないし「海」と呼ぶことによって、上述の元素のそれぞれの特性を論じている。彼は次のように語っている。

いざ、先の話を実証するものとして、次のことをよく思い見よ、

もし先の話に形の点で欠けるところ、なお何かありしならば。

まずは見るべし、いたるところで明るく熱き太陽を、

そして熱と輝く光に浸されたものども〔天体〕を、

またあらゆるところで暗くて冷たい雨を。

そして大地からはしっかりと根づいた固きものどもが生まれ出る。

憎しみにおいてこれらすべての形は分かれて離ればなれとなり、

愛においてそれらは相集まって、互いに求め合う。

なぜならこれらから、かつてあったもの、今あるもの、そして将来あるであろうものの

すべてが芽生えたのだから。樹々も男らも女らも、

獣どもも鳥どもも、水に育まれる魚どもも、

さらには生命永く誉れいやまされる神々も。

なぜならあるのはただこれらのみであつて、これらが互いを駆け抜け合つて、

姿を異にする諸物となるのだから。混合はこれほどまでの変化をもたらすのだ。

22

シンプリキオス (『アリストテレス「自然学」注解』160,26)

また次の詩句から二重の秩序が示唆されていると考えることもできよう。

それらのすべては、すなわち輝く太陽と大地と天空と、それに海は、  
遠く離れて死すべきものどもの内に宿った  
自分の諸部分と和合するからである。  
また同じように混合に一層適合するものは  
アプロディーテによって互いに似たものとされて、愛し合う。  
だが生まれと混合と刻印された姿において、  
互いに最も隔たるものは最も憎しみ合い、  
結びつくことにまったく不慣れであって、争いの教唆によって  
極めて破壊的である。争いこそ、それらを誕生させたものなるに。

すなわち彼は死すべきものどもの内においてもそれらが結びついていることを示しているのである。しかも英知的なものにおいてはより一層ひとつに結びつき、「アプロディーテによって互いに似たものとされて、愛し合い」、いたるところでそうであるが、しかし、一方英知的なものは愛によって似たものとされるのに対して、感覚的なものは争いに圧倒されて混合による生成において一層離ればなれとなり、争いによって「刻印された」模倣的な「姿」において存在し、互いにひとつに結合することに不慣れであるというのである。

23

シンプリキオス (『アリストテレス「自然学」注解』159,27)

そして彼は同じ四元素から異なる諸物が生じてくる明快な実例を提示している。

あたかも画家が奉納物を多彩に彩る時のように、  
その画家が技術にかけて知恵によく学び知る男であれば、  
彼らは色とりどりの絵の具を手取るや、  
ある色は多く、ある色は少なく、調和よく混ぜ合わせ、  
ありとあらゆるものの似姿をそれらから作り出す。  
樹々を作り出したり、男らや女らを作り出したり、  
また獣や鳥や水に養われる魚を作り出し、  
はたまた生命永く誉れいやまされる神々を作り出す。  
されば欺きが汝の心を圧倒することがあってはならぬ。  
数限りなく現れ生じきたる死すべきものどもの源が他にあるなどとは。  
否、はっきりとこのことを知るがよい。汝はこの話を神から聞いたのだから。

24

プルタルコス (『なぜピュティアの神託は衰微したか』15 p.418 C)

しかしエンペドクレスがいったこと、すなわち、  
屋上屋を継ぎ足すだけで、  
話のひとつの道筋も完結することがない  
といったようなことをやっていると思われないうえにも、まず始めに語ったことに然るべく決着をつけることをお許しいただきたい。

25

プラトン (『ゴルギアス』 498 E)

〔ソクラテス〕 それでは同意されたことからどのようなことがわれわれに帰結してくるか、ぼくと一緒に推論してみてください。というのは、「よいことは二度でも三度でも語るのがよい」ということだからね。また考察することもだ。

逸名著作家の古注 (プラトン『ゴルギアス』 498 E への古注 [ルキロスによる])

〔上述の〕 諺に「よいことは二度でも三度でもよい」とあるのは、よいことは何度でも語られるべきであるとの意味であり、この諺はエンペドクレスの詩句に由来している。彼は次のようにいっている。

必要なことは二度でもこれを繰り返してというのがよい。

26

シンプリキオス (『アリストテレス「自然学」注解』 33,18)

また少し先のところで彼は次のようにいっている。

時の巡りくるにつれて、これらのものは交互に優勢となり、  
互いの内へと滅んで行つては、また定め順にしたがって成長してくる。  
なぜならただこれだけがあるのであって、互いに駆け抜け合つて、  
人間になったり、他の種族の動物になったりするのだから。  
ある時には愛によって集まって、ひとつの世界となり、  
ある時には争いの憎しみによってまた再び離ればなれとなる、  
すべてがひとつに合体して、すっかり平伏するその時まで。  
このように多なるものから一なるものが生じるのを習いとし、  
そしてまた逆に一なるものが分かれて、多なるものが出てくる限りでは、  
その限りでは、それらは生成しているのであって、永続する生涯はそれらにはない。  
だがそれらが絶え間なく交替しつづけて決して止むことがない限りでは、  
その限りでは、それらは円環をなして常に不動のものとしてあるのだ。

27

プルタルコス (『月面に見える顔について』 12 p.926 D)

したがって、それぞれのものをその元のあり場所に連れ戻すことによって世界のある種の解体を構想していることになりはしないか、そしてエンペドクレスのいう「争い」を諸物の上に招き寄せ、むしろ自然に対して昔のティタンやギガンテスと呼び覚ますことになってはいないか、そして

そこには太陽の光り輝く姿も見分けられず、

大地の毛深い力も海も見分けられない

とエンペドクレスのいうごとく、重たいものと軽いものを別々に分けることによって、かの神話で語られている恐ろしい無秩序と混乱を見ることを望んでいることになりはしないか、よく見、考えることだ。[そのような場合には] 大地は熱に与らず、水は空気に与らない。上には重いものの何ものもなく、下には軽いものの何ものもない。万有の原理は生のみままであって、愛情がなく、孤独である。…

エンペドクレスやパルメニデスやヘシオドスのいうように、愛やアプロディーテやエロスが神慮によって世界の内に生まれ出て、情愛的なものが自然の上に到来するまでは。

**シンプリキオス** (『アリストテレス「自然学」注解』1183,28)

エウデモスは、運動がないのは愛が支配する球体の時期であると解する。すなわち [その時期には] すべては結合され、

そこには太陽の速き肢体も見分けられない

からであり、また、

そのようにハルモニア [調和] の厚き覆いに庇護されて、

まるきスパイロス [球体] として、周りの孤独を楽しむ

と彼 [エンペドクレス] のいうごとくだからである。

27 a

**プルタルコス** (『哲学者と政治権力者との関係について』2 p.777 C)

なぜなら哲学によって徳にいたった者は常に自分自身と一致し、自らによって咎められるところなく、自分に対する平安と友誼に満ちた人間となるからである。

その肢体の中には争いもなければ、醜い戦いもない。

28

**ストバイオス** (『自然学抜粋集』I 15,2 a b)

それはあらゆる側からして自己自身に等しく、まったく限定されず、

まるきスパイロス [球体] として、周りの孤独を楽しむ。

29

**ヒッポリュトス** (『全異端派論駁』VII 29)

そして世界の姿について、愛によって秩序づけられた場合にそれがどのようなものであるか、彼 [エンペドクレス] はおおよそ次のようなものとして語っている。

背中から二本の小枝が生え出ることもなく、

足もなければ、敏捷な膝もなく、また子供を生むための器官もなく、

むしろそれはスパイロス [球体] をなして、あらゆる側から自分自身に等しかった。

「愛」はこういったもの、世界の最も美しい姿たる一なるものを多なるものから造り出すのである。他方「争い」は、それは個々のものの秩序づけの原因であるが、かの一なるものから引き離して、多なるものを造り出す。

**シンプリキオス** (『アリストテレス「自然学」注解』1124,1)

「愛」は結合によって球体〔スパイロス〕を造るが、そのスパイロス〔球体〕を彼〔エンペドクレス〕は神とも呼んでいる。またある時などは中性の形で「スパイロン〔球〕であった」といった言い方をした。

30

**アリストテレス**（『形而上学』B 4. 1000 b 12）

しかしまた同時に転化そのものの原因も、本性的にそのようになっているのだという以外、彼〔エンペドクレス〕は何も語っていない。すなわち、

しかし争いが肢体の中で大きく育まれて、  
彼らのために広範な誓いによって交互に決められていた  
時が満ちて権勢の座に登位するや …。

**シンプリキオス**（『アリストテレス「自然学」注解』1184,12）

エンペドクレスは「争い」が支配する時期においてもまたそうだという。

しかし争いが肢体の中で大きく育まれて、  
彼らのために広範な誓いによって交互に決められていた  
時が満ちて権勢の座に登位するや …。

31

**シンプリキオス**（『アリストテレス「自然学」注解』1184,2）

再び「争い」が優勢となり始めるや、その時また再びスパイロス〔球体〕の内に運動が生じる。というのも、

神の全肢体が相次いでわなないた  
といわれているからである。

32

**擬アリストテレス**（『不可分の線について』972 b 29）

さらに継ぎ目はある意味で相違である。それでエンペドクレスもまた、

継ぎ目は二つのものを結びつける（？）<sup>1</sup>

としたのである。

- 1) 擬アリストテレスのテキスト中の引用文は「それゆえ正しくあらねばならない」であるが、これではまったく意味が通じない。それゆえディールスは上のようなテキスト校訂を提案したが、一般にこの提案が支持されているようであるので、ここでもディールスの提案を採用して訳出しておく。

33

**プルタルコス**（『多数の友人を持つことについて』5 p.95 A）

というのは、一方〔友情〕は結びつけ、団結させ、交わりや友誼によって親密化することによって一体とするからであって、それはあたかも

無花果の液が白い乳を凝固させて縛るかのように  
とエンペドクレスのいうごとくだからである。(すなわち友情とはかくのごとき一致と団結を作り出すものなのである。) 他方、社交好きは不和を生じ、離間させ、背を向けさせる。というのも、それはある時にはある人を呼び寄せ、別の時には別の人を呼び寄せ、またある時にはある人に関心を向け、別の時には別の人に関心を向けることによって、協調も結びつきも許さないし、群がり集まる交際においても交わりにおいても善意を生じさせることはないからである。

34

アリストテレス (『気象論』Δ 4. 381 b 31)

なぜなら湿は乾に対して固定する原因となり、それぞれをそれぞれに対して膠のようにするからである。エンペドクレスもまた『自然学』において、

ひき割り麦を水で練り固めて  
と詩作しているように。

35

シンプリキオス (『アリストテレス「天体論」注解』528,30)

たとえその〔世界の〕中では「争い」が支配しており、それはちょうど球体の中で「愛」が支配しているごとくであるにしても、それでもけだし、その両者とも〔すなわち世界も球体も〕両者〔「愛」と「争い」〕によって生じるといわれている。エンペドクレスの詩句からこのことを明示している箇所をここに引用しても、恐らく邪魔にはならないであろう。

しかしわたしはここで再び先に語った歌の道に戻ることにしよう、  
かの物語から〔新たな〕物語を流れ出でさせることによって。  
争いが渦巻の底深く落ちて行き、  
渦の真ん中に愛がやってきたとき、  
その中でそれらすべては集まってただひとつのものとなる、  
だが一気にではなく、それぞれ別のところから自ら進んで寄り集ることによって。  
そしてそれらが混じり合うと、死すべきものどもの無数の種族が生まれ出た。  
だが多くのものは混ざり合わぬまま混じり合ったものと交互に立ち止まっていた。  
それらをなお争いは上に引き留めていたのだ。なぜなら争いはそのすべてが  
すっかりそれらから離れて円周の端へと退いてしまったわけではなく、  
肢体の内に留まっているものもあれば、出て行ったものもあるからである。  
だがそれは絶えずかすかに流れ出つづけるが、その分だけ絶えず  
非の打ちどころなき愛のやさしい不死なる奔流が流れ込んでくる。  
するとたちまち前には不死なるを習いとしたものが死すべきものとして生まれ、  
前には混じり合っていなかったものが道を取り替えて混合したものとなる。

シンプリキオス (『アリストテレス「自然学」注解』32,11)

そしてこれらの詩句に先立つ別の詩句の中で彼は次のようにいうことによって、その両者〔「愛」と「争い」〕とも同じものの中で働くものなることを伝えている。曰く、

争いが渦巻の底深く落ちて行き、  
渦の真ん中に愛がやってきたとき、

その中でそれらすべては集まってただひとつのものとなる、  
だが一気にではなく、それぞれ別のところから自ら進んで寄り集まることによって。  
そしてそれらが混じり合うと、死すべきものの無数の種族が生まれ出た。  
だが多くのものは混ざり合わぬまま混じり合ったものと交互に立ち止まっていた。  
それらをなお争いは上に引き留めていたのだ。なぜなら争いはそのすべてが  
すっかりそれらから離れて円周の端へと退いてしまったわけではなく、  
肢体の内に留まっているものもあれば、出て行ったものもあるからである。  
だがそれは絶えずかすかに流れ出つづけるが、その分だけ絶えず  
非の打ちどころなき愛のやさしい不死なる奔流が流れ込んでくる。  
するとたちまち前には不死なるを習いとしたものが死すべきものとして生まれ、  
前には混じり合っていなかったものが道を取り替えて混合したものとなる。  
そしてそれらが混じり合うと、死すべきものの無数の種族が生まれ出た。  
ありとあらゆる姿を具えた、見るも奇怪なものどもが。

#### シンプリキオス (『アリストテレス「天体論」注解』 587,8)

またどうしてこれらのものが「愛」の時期に生じるとアリストテレスはいうことができるのかと人は問いたくもなるであろう。「愛」によってすべてはひとつとなるとエンペドクレスはいうのである。すなわち、

その中でそれらすべては集まって、ただひとつのものとなる。

そこで多分「愛」の支配においてそれらは生じたとエンペドクレスは語っているのではなく (アレクサンドロスもそう見なしているように)、未だ「争い」の

すべてが離れて円周の端へと退いてしまったわけではなく、

肢体の内に留まっているものもあれば、出て行ったものもあるからである。

だがそれは絶えずかすかに流れ出つづけるが、その分だけ絶えず

非の打ちどころなき愛のやさしい不死なる奔流が流れ込んでくる、

そのような時に生じたといっているのである。

#### アリストテレス (『詩学』 25. 1461 a 23)

また詩句の句切りによって読み解かねばならない場合もある。たとえばエンペドクレスの次のような詩句がそれである。

するとたちまち前には不死なるを習いとしたものが死すべきものとして生まれ、

前には混ざり合っていなかったものが混じり合った。

#### アテナイオス (『食卓の賢人たち』 X 423 F)

テオプラストスは『酩酊について』の中で、エンペドクレスの次の詩句を引用して、生の酒は一層混合されていると語っている。

するとたちまち前には不死なるを習いとしたものが死すべきものとして生まれ、

前には混ざり合っていなかったものが道を取り替えて混合したものとなる。

#### プルタルコス (『食卓歓談集』 V 4,1. 677 D)

詩人のソシクレスは、エンペドクレスが普遍的な転化において「前には混ざり合っていなかったも

のが混合したものとなる」といっていたのを思い出して、この人物〔エンペドクレス〕によっては混合されていないことよりは、むしろよく混合されていることが「生」といわれているといっている。

36

ストバイオス（『自然学抜粋集』I 10,11）

それらが相集まるにつれて、争いは一番端に退いて行った。

アリストテレス（『形而上学』B 4. 1000 b 1）

というのは、もし「争い」が事物の内に存在していなかったなら、彼〔エンペドクレス〕のいうごとく、万物はひとつであったろうからである。すなわち、すべてのものが相集まる時、その時「争いは一番端に退いて行く」のである。

37

アリストテレス（『生成消滅論』B 6. 333 a 35）

それのみか、エンペドクレスによれば増大もありえないことになろう。ただし付加によるそれは別である。なぜなら火によって火は増大し、

大地はそれ自らの体を増大させ、アイテールはアイテールを増大させるからである。

38

クレメンス（『雑録集』V 48）

いざ、わたしは汝にまず太陽を語ろう。

そして今われわれが目にするものすべてがそこから現われきた源たる大地と、波立つ大海と、湿気を含んだ空気を。

そして周囲からすべてのものを抱くティタンたるアイテールを。

39

アリストテレス（『天体論』B 13. 294 a 21）

いやしくも大地の深さも広大なるアイテールも限りがないとするならば、それが万有のほんのわずかしか見たことのない多くの者の舌の根にのぼり、その口から流布されることの何と空しいことか。

40

プルタルコス（『月面に見える顔について』2 p.920 C）

エンペドクレスもまたどこかで双方〔太陽と月〕の相違を適切に描写して、日矢鋭き太陽と、優しく光る月といい、月の魅惑と晴朗さと苦悩なき様をこのように呼びかけているように。

41

アポロドロス（『神々について』[マクロビウス『サトゥルナリア』I 17,46 より]）

しかしそれ〔太陽〕は集められてひとつの塊となり、大空を巡り行く  
とエンペドクレスもいうように、それは多くの火を集めて巡回するのである。

42

プルタルコス（『月面に見える顔について』16 p.929 C）

それ〔月〕は発光体〔太陽〕の垂線上に位置することによって太陽〔の光〕を受け取り、取り込む  
とデモクリトスはいふ。そのようにして月は見えるようになるのであり、太陽の光を通過させると考  
えるのが合理的であるというのである。だが月はこういったことをなすことからはほど遠いのであり、  
というのも、そのような場合には月は見えなくなるからである。またしばしば月は太陽を隠し、見え  
なくするのであって、

〔月は〕その〔太陽の〕光を遮って隠す。

太陽がその上を行くあいだ。そして大地を

蒼き月の幅と同じ分だけ暗くする

とエンペドクレスのいうごとくである。それはあたかも夜と闇の中に光が落ち込み、他の天体には達  
せぬかのようなのである。… かくして地上から見える月の輝きは月に向かう太陽〔光線〕の一種の反  
射によるとするエンペドクレスの見解が残ることになる。そしてこれが、〈それらの〉光が燃焼し混  
合するのであれば当然あって然るべきような熱も明るさもわれわれのもとに及ぼさない理由なので  
ある。むしろ、例えば反射した音声は元の声よりかすかなエコーしか生まないように…、

そのように、太陽の光は月のまるい表面にぶつかった後、

屈折によってその力を削がれて、われわれのもとには弱くてかすかな反射光しか送らないのである。

43

ピロン（『神の摂理について』II 70）

また月の光がその輝きを太陽から受け取るのも摂理によると考えるのは愚かではないか。むしろ鏡  
のようにたまたま自分の中に落ち込んできた姿を受け取るだけではないのか。

大きく巨大な月の球面が光を受け取るや、

それはその場で直ちに向きを変えて、天に向かって天駈ける

とエンペドクレスのいうように。

44

プルタルコス（『ピュティアは今日では詩の形で神託を降さないことについて』12 p.400 B）

太陽は大地の周辺で天空の光の照り返しによって生み出されたものであり、またそれは

恐れを知らぬ顔つきでオリュポスに向けて光を照り返す

と主張するエンペドクレスをあなた方〔ストア学徒〕は嘲笑するが…。

45

アキレウス・タティオス（『アラトスの「天象譜（パイノメナ）」入門』16 p.43, 6 M.）

まるい借りものの光が大地の周りを巡り行く。

プルタルコス（『月面に見える顔について』9 p.925 B）

〔月は〕ある意味では大地に触れているのであって、「馬車の轍が折返点をまわって離れて行くように」大地のごく近くをまわるとエンペドクレスはいう。というのも、月はしばしば大地の影を、その影は発光体〔太陽〕が巨大であるためにほんのわずかしか延びないのに、越えないからである。むしろ月は（大地の一領域たる地上の影の夜の場所をそれが脱していない場合には）大地によって太陽を遮られるほどに大地のすぐ傍をまわっており、ほとんど大地の腕の中にあると思われるほどである。それゆえ勇気を出して、月は大地の敷居内にあり、大地の境界石によって立ちはだかられているといふべきであるとわたしは思う。

〔未刊行資料〕（Anecdota Graeca, Bekk.Lex. IV 337,13）

〔『神託表現集』より〕ἀγής（明るい／聖い）：この語は εὐαγής（極めて明るい、聖い、清浄な）や παναγής（こよなく神聖な）といった合成語の元の語であって、エンペドクレスに次のような語例がある。

なぜならそれ〔月〕は主〔なる太陽〕の聖き円と向き合って見つめているから。

プルタルコス（『プラトン哲学の諸問題』3 p.1006 F）

日時計の針は影と共に場所を変えることなく、静止したままで時の道具とか尺度となっているが、それは自分の周りを運行する太陽の前に立ちはだかる大地を模倣しているのであって、それはちょうど、

夜は大地が作り出す。〈太陽の〉光の下に立つことによって  
とエンペドクレスのいうごとくである。

プルタルコス（『食卓歓談集』VIII 3,1 p.720 E）

なぜなら空気は暗い時には、すなわちエンペドクレスの言によれば、  
孤独な暗い夜には、  
前方を知覚することに関して眼から奪うだけのものを、耳を通して返すからである。

ツェツェス（『ホメロスの譬喩』：『イリアス』XV 83 への注解）

エンペドクレスか、あるいは他の誰かがまさにそのようなことをいっている。

イリス〔虹〕は海から風や大雨をもたらす。

ヘロディアノス (『ホメロスの比喩的表現』 [cod. Darmstadini in Sturzii, *Etymologicum Gudianum*. p.745])

「アノパイア」(ἀνόπαια) : ある人たちは「眼に明らかでないさま」を意味するとし、ある人たちは「上方に運ばれる」ことを意味するとする。エンペドクレスは火に適用して、「速やかに上へ向かって(ἀνόπειαν)」といている。このことから ἀνόπαιον が両者〔男性形、女性形〕のいずれにも属さないことは明らかである。

52

プロクロス (『プラトン「ティマイオス」注解』 II 8,26)

なぜなら、エンペドクレスもまたどこかで、

多くの火が地面の下で燃えている

といているように、大地の下には火の流れがあるからである。

53

アリストテレス (『生成消滅論』 B 6. 334 a 1)

というのは、「争い」が分離したのであるが、アイテールが上方へ立ち昇るのは「争い」によってではなく、偶然によるかのように彼〔エンペドクレス〕は時としていうからである。

なぜならその時にはたまたまそのように走っていたが、

またしばしば別のようにも走るから。

また時には火は本性的に上方へ運ばれる性質を持つともいえば、また「アイテールは〈逆に〉その長い根でもって大地の下へ沈み込む」ともいっている。また同時に彼は、「争い」が支配する現在も、「愛」が支配した以前の時も、世界は同じような状態にあるともいう。だとすれば、運動の第一の動者、第一の原因は何なのか。

アリストテレス (『自然学』 B 4. 196 a 19)

そこで彼らは偶然の存することを承認しなかったか、あるいはあるとは思いつつも無視したかであるが、いずれにせよ不条理である。また時にはエンペドクレスのように、それを使う者もいる。空気が最も高いところへ分離されて行くのは常ではなく、偶然によるかのようにエンペドクレスはいているからである。その宇宙創成論において彼は次のように語っている。

なぜならその時にはたまたまそのように走っていたが、

またしばしば別のようにも走るから。

54

アリストテレス (『生成消滅論』 B 6. 334 a 5)

アイテールは〈逆に〉その長い根でもって大地の下へ沈み込む。

55

アリストテレス (『気象論』 B 3. 357 a 25)

海 … 大地の汗

56

ヘパイステイオン (『提要』 1 p.2,13 Consbr.)

そしてエンペドクレスには、

塩は太陽の勢いに押されて固まった

とある。

57

シンプリキオス (『アリストテレス「天体論」注解』 586,29)

だがどうして「首のない頭」とか、その他エンペドクレスによって

肩を奪われた腕どもが裸のままさまよい、

眼は額につかず、ひとり歩き回っていた

といわれているものが混合を意味するものとなりえようか。その他多くのものもそうであって、それらは混合の例とはならない。

アリストテレス (『天体論』 Γ 2. 300 b 25)

さらにまた人は次のようにも問うであろう。すなわち無秩序に運動しながらも、ある一定の割合で混合されると、そこから、自然本性に適った仕方形成された物(例えば骨や肉)と同じような具合に形成されるといったことがありえないかどうかということである。ちょうどエンペドクレスが「愛」の時期にそういった仕方生成がなされるといっているごとくである。彼は次のように語っている。

首のない多くの頭が芽吹いた。

58

シンプリキオス (『アリストテレス「天体論」注解』 587,18)

そこでこの状態においては未だ「争い」による分離のために「手足は〔それぞれ〕単独のまま」であって、互いに結合を求めて「さまよっている」のであった。

59

シンプリキオス (『アリストテレス「天体論」注解』 587,20)

しかし神々が神々と一層広汎に交わり始めたとき、

すなわち遂に「愛」が「争い」に勝るようになったとき、

それらはそれぞれ出遭うがままに一緒になった。

そしてそれらの他にも多くのものが絶え間なく生まれ出てきた

と彼はいう。そこでエンペドクレスがこのようにいうのは「愛」の時期のこととしてであるが、しかし「愛」がすでに支配しているという意味での「愛」の時期ではなく、支配しつつあるという意味での「愛」の時期であって、未だそこでは未混合のものや単独の手足といったものが見られるのである。

**プルタルコス** (『コロテス論駁』 28 p.1123 B)

そういったものや、また「くねり足の数え切れぬ手を持ったもの」とか「人間の顔をした牛の子」といったエンペドクレスの怪物（それらを彼ら〔エピクロスの子〕は笑うが）にも似た一層芝居がかったものもあるが ……。

**アイリアノス** (『動物誌』 XIV 29)

自然学者エンペドクレスもまた恐らく動物の特性について語っており、形態の混合によってさまざまに異なっていて、身体の統一性によって形づくられているのではないある合体した動物が生まれたと知っている。彼のいうところは次のごとくである。

顔を両面に持ったものや胸を両面に持った多くのものが生まれ、  
人間の顔をした牛の子や、また逆に牛の顔をした人間の子が跳び出してきた。  
あるところでは男に由来するものを混じえ、  
あるところでは女の性質を混じえて陰なす部分を具えたものが。

**シンプリキオス** (『アリストテレス「自然学」注解』 371,33)

ちょうどエンペドクレスが、「愛」の支配の時期に頭や手や足といった動物の諸部分がまず最初に偶然的な仕方でも生まれ出てきて、それからそれらが一緒になり、

人間の顔をした牛の子や、またその逆のものが跳び出してきた  
と知っているようにである。「その逆のもの」とは、もちろん「牛の顔をした人間の子」、すなわち牛と人間からなるものである。そしてそれら諸部分が生き延びることができるような仕方でも結合したものは動物となり、互いに必要を満たし合うことによって生き続けることができた。歯が食物を噛み砕き、胃がそれを消化し、肝臓が血液にするといったごとくである。そして一方人間の頭が人間の身体とひとつになったときには、それは完全に生き延びることが可能であったが、牛の身体とはうまく合わず、〔その場合には〕死滅する。すなわちその固有の理〔ロゴス〕にしたがって一緒になったのではないものは死滅したのである。

**アリストテレス** (『自然学』 B 7. 198 b 29)

ところで、そのすべてがたまたまであっても、あたかも何かのために生まれてきたかのように生じた場合には、それらは、偶発からであれ、適合した仕方でも構成されているのであるから、生き延びる。だがそのように生じたのではないものは滅んだし、また現に滅んでいるのである。「人間の顔をした牛の子」とエンペドクレスの知っているのが、そのようなものである。

**シンプリキオス** (『アリストテレス「自然学」注解』 381,29)

その『自然学』の第2巻において、男の体と女の体に分化する以前のこととして、エンペドクレスは次のような詩句を語っている。

さればいざ、どのようにして男と嘆き多き女の  
夜に生まれし若枝を分離して火が導き出したか、  
このことをまず聞くがよい。

この話は外的なもので、無知なものでもないがゆえに。  
まず始めに自然本性の全体を含んだ原型が大地から跳び出してきた、  
水の分け前にも熱の分け前にも共に与りながら。  
これらは火が似たものにいたらせたいと望んで送り出したのだ。  
いまだ四肢の愛らしい形を現してもいなければ、  
声も発せず、男に具わる器官のごときも示していないそれらを。

さてエンペドクレスがこのようにいうところから、アリストテレスは、彼もまたけだし種子の方が動物より先に生じたといっているようであると、反論するのである。そして「始めに自然本性の全体を含んだもの」とか「未だ四肢の愛らしい形を現していないもの」というように彼によって述べられているものは種子だったのだと。…もしそれが種子であるなら、「自然本性の全体を含んだもの」というのは、それにぴったりの素晴らしい呼び方であるようにわたしには思われる。なぜなら種子とはその本来の意味において本性の全体を含んだものだからであり、全体としてそれ自身がまさにそれであるところのものであり、未だその中にいかなる分離も生じていないものだからである。

#### アリストテレス (『自然学』B 8. 199 b 7)

さらにまた種子が最初に生じたのであって、いきなり動物が生じたのでないこと必然である。そして「始めに自然本性の全体を含んだもの」といわれているものは種子だったのである。さらにまた植物の内にも、より低い程度にしか明確でないにせよ、「あることのために」〔合目的性〕ということが含まれている。だとすれば、植物においても「人間の顔をした牛の子」というのと同じように、「オリーブの面をした葡萄の木」といったものが生じたのであるか、否か。もちろん〔そういったものが生じるということは〕不条理である。しかしながら、いやしくも動物においてそういったものがあるのであれば、植物においてもあらねばならない。

63

#### アリストテレス (『動物発生論』A 18. 722 b 10)

なぜなら、雄と雌の内には割符のようなものがあり、全体がそのいずれかから出てくるということはないのであって、「四肢の本性は切り離されて、その一部は男の中に ……」と彼〔エンペドクレス〕はいうからである。

64

#### プルタルコス (『自然学的諸問題』21, 917 C)

あるいは雌を雄と一緒に飼育したり、一緒に群れに入れたりすることが性の記憶を呼び覚まし、欲求を呼び起こすのである。エンペドクレスが人間に関して、

視覚によって呼び覚まされて、憧れの気持ちもまた彼の上にやってくる  
と歌っているように。

65

#### アリストテレス (『動物発生論』A 18. 723 a 23)

清らかなところに注がれて、あるものは冷と出会って  
女となり、〈また逆にあるものは温と出会って男となる〉  
とエンペドクレスの語るごとく、雌と雄の区別が受胎の時に決まるとするなら ……。

逸名著作家の古注（エウリピデス『ポイニッサイ』18 への古注）

「〔子〕種を〔妻の〕畠に播いてはならぬ」という表現について：自然学者エンペドクレスは子供が誕生する場所を比喩的に「アプロディーテの割れ目ある牧場」といつている。エウリピデスも彼と同じいい方をすることによって恥ずかしい思いを避けようとして、然るべき名称と巧みな比喩を使ったのであって、「種蒔き」とか「畠」といったいい方をしたのである。

ガレノス（『ヒポクラテス「流行病」注解』VI 48 [XVII A p.1002 K.]）

しかしながら男は子宮の右側に懐胎されると古の人たちもまたいつているのであって、パルメニデスは

右側には男の子たち、左側には女の子たち  
と語っており、エンペドクレスもまた、  
母胎はそのより温かいところで男を生む。  
このゆえに男は色が黒くて、より遅しく、  
そしてより毛ぶかい  
といつている。

アリストテレス（『動物発生論』Δ 8. 777 a 7）

なぜなら母乳は調理された血であって、腐敗したものではないからである。血は「8ヵ月と10日目に白い腐敗物〔乳〕となる」と歌ったエンペドクレスは正しく理解していなかったか、譬えがうまくできなかったかのいずれかである。

プロクロス（『プラトン「国家」注解』II 34,25 Kroll）

エンペドクレスもまた出産の時期が二通りあることを知っていたということである。それゆえにまた女のことを彼は「二度産みの」と呼ぶのであり、また彼自身〔懐胎の〕日数の超過ということを用いとともに、8ヵ月児は育たないことを語っているが、これはもつともなことである。というのは、7ヵ月を構成する最初の数、すなわち35は6と8と9と12の和であり、その外項〔6と12〕は2倍、すなわちオクターブの比となっており、また9ヵ月を構成する最初の数〔45〕は調和数6と9と12と18の和であり、その外項〔6と18〕は3倍の比となっている。そしてそれらの間にはそれ以外に比は存しておらず、したがって協和ということがありえない以上、8ヵ月児が育たないことは当然なのである。

エペソスのルフス（『人体部位の命名について』229 p.166,11 Daremb.）

胎児は皮膜で包まれている。それは軽くて柔らかいものであって、それをエンペドクレスは「羊膜

〔アムニオン〕と呼んでいる。

71

シンプリキオス (『アリストテレス「天体論」注解』529,28)

もしこれらのことについて汝に確信のわずかなりとも欠けるところあるならば、  
どのようにして水と土とアイテールと太陽が混ぜ合わされて、  
そこから死すべきものどもの形や色が  
アプロディーテにより結び合わされて今生じているだけ、生じたか、  
〈次にそれを聞くがよい …〉

72

アテナイオス (『食卓の賢人たち』VIII 334 B)

また自然学者エンペドクレスによっては、すべての魚が「カマセーネス」というひとつの名称で語  
られていることも、わたしは忘れていない。

またどのようにして高き樹々や海に棲むカマセーネス〔魚〕が〈生じたか …〉

73

シンプリキオス (『アリストテレス「天体論」注解』530,5)

また少しあとで、  
その時キュプリスが大地を雨で濡らした上で、もろもろの形を  
作り出さんと忙しく、それを固めるために速き火に与えたように …

74

プルタルコス (『食卓歓談集』V 10,4 p.685 F)

動物の中でも君は、陸上の動物であれ、空飛ぶ動物であれ、海に棲む動物ほど生命力に富むものを  
挙げることはできないであろう。この点に関してまたエンペドクレスは次のように歌っている。

多量に産卵するカマセーネス〔魚〕の歌うたわぬ種族を導きつつ …。

75

シンプリキオス (『アリストテレス「天体論」注解』530,8)

それらのうち、内は密に、外は疎に固まったものが  
キュプリスの掌の中でこのようなじめじめしたものと出会って …

76

プルタルコス (『食卓歓談集』I 2,5 p.618 B)

そしてわれらがピンダロスが「最高の匠」と呼んだ神は、あらゆる場合に火を上配置し、土を下  
に配置したもうたわけではなく、身体の必要が要求するに応じて配置したもうていることは、君の見

る通りである。エンペドクレスはいつている。

このことは海に棲むものどもの重い背中の殻において、  
とりわけ法螺貝や石のごとき皮膚をした亀どもにおいて見られる。  
汝はそこに土が皮膚の一番上に位置するのを見るであろう。

**プルタルコス**（『月面に見える顔について』14 p.927 F）

また上方の眼の中で輝く火は自然で、腹や心臓の中のそれは自然に反しているともいえないのであって、そのそれぞれが然るべき仕方で、また有用な仕方で配置されているのである。「とりわけ法螺貝や石のような皮膚をした亀」やあらゆる甲殻類の本性を仔細に調べて、「汝はそこに土が皮膚の一番上に位置するのを見るであろう」とエンペドクレスのいうようにである。

77 - 78

**プルタルコス**（『食卓歓談集』III 2,2 p.649 C）

この常緑性、エンペドクレスのいい方によれば「葉の絶えることのない」性質は、温に由来することではないし、また葉を落とすのも冷に由来することではない。…ところで二三の人は葉が落ちないのは混合の均一性によると考えているが、エンペドクレスはそれに加えて、通路のある種の適合性がその原因であって、それがために通路は栄養を規則正しく、また均一的に通過させるのであり、その結果栄養が十分に流れるのだとする。

**テオプラストス**（『植物の諸原理について』I 13,2）

そしてもし〔穏やかな〕空気がそれら〔樹々〕に絶え間なく伴うとするなら、詩人たちによっていわれていることも恐らく不合理ではないし、また

常緑にして実の絶えることなき（樹々）は  
空気のおかげで一年中いつも実がたわわに生い茂る

とエンペドクレスのいうのも、空気の一定の混合が、すなわち春のそれのようなのが通例のことであると仮定するなら、不合理でないと考えられよう。

79

**アリストテレス**（『動物発生論』A 23. 731 a 1）

他方、植物においてはこれらの能力は混在しており、雌と雄は分かれていない。それゆえそれらは自分だけで子を生むのであり、精液を出さず、種子と呼ばれる胚子を出す。このことをエンペドクレスはその詩においてうまく語っている。

このようにオリーブの高き樹は最初に卵を生む。

というのも卵は〔植物における〕胚子であって、その一部分から動物が生じ、残りは栄養となるからであり、また種子の場合も、そのある部分から植物が生じ、残りは若芽や最初の根にとっての栄養となる。

**テオプラストス**（『植物の諸原理について』I 7,1）

あらゆる植物の種子が自分の中に一種の栄養を持っており、その栄養も最初に一緒に生み出される

が、それは卵におけるのと同様である。この意味においてエンペドクレスは「高き樹は卵を生む」と主張しているのであって、悪くない。というのも、種子の本性は卵に似ているからである。

80

プルタルコス (『食卓歓談集』V 8,2-3 p.683 D)

(2)そこでこれらの陳述を正当であるとわれわれはいった。だがエンペドクレスが

このゆえにザクロは晩熟であり、リンゴは水分過多である

というとき、[疑問が生じるのである]。一方のザクロの形容は、秋がすでに終わり、太陽の熱が衰えたとき、それらはその実を熟させることを意味している。すなわち、それらの水分は貧弱で、ねばっこいために、熟成することを太陽がなかなか許さないのである。… だが一体どのような考えで賢者はリンゴを「水分過多」と形容したのか、[この点において] 困惑が生じる。… (3)さてわたしがこれらのことをいい終えると、リンゴが「水分過多」といわれているのは、それらがその最盛期にあるためであると二三の文法家がいった。なぜなら頂点にあること、盛りにあることを φλοίειν [あふれるばかり] と詩人たちは形容するからであると。… したがってリンゴにおいては新鮮さと盛りが果実中最も長くつづくがゆえに、それを哲学者は υπέρφλοιον [水分過多] と呼んだのである。

81

プルタルコス (『自然学的諸問題』2 p.912 C)

雨水が変化しやすいものであることは、腐敗が物語っている。というのは、それは川の水や井戸水より腐敗しやすいからである。ところで発酵が腐敗に似たものであることは、エンペドクレスが次のごとく証言している。

葡萄酒は、木の中で腐敗した [発酵した] 上で、樹皮から出てくる水である。

プルタルコス (『自然学的諸問題』31 p.919 C)

あるいは「葡萄酒は、木の中で腐敗した [発酵した] 上で、樹皮から出てくる水である」とエンペドクレスもいうように、酒の類は〈本性的に腐敗しやすい〉かである。

アリストテレス (『トピカ』Δ 5. 127 a 17)

同様に、「[葡萄酒は] 木の中で腐敗した水である」とエンペドクレスはいつているが、酒は腐敗した水なのではない。なぜならそれは端的な意味では水でないからである。

82

アリストテレス (『気象論』Δ 9. 387 b 4)

髪の毛、木の葉、鳥どもの密生した羽毛、

それに逞しい四肢に生える鱗、これらはみな同じものである。

83

プルタルコス (『偶運について』3 p.98 D)

なぜなら、あるものは角や牙や針で武装しているが、

… しかしハリネズミの背中には

先の鋭く尖った毛が逆立っている  
とエンペドクレスも語っているように …。

84

アリストテレス (『感覚と感覚されるものについて』 2. 437 b 23 )

だがエンペドクレスは、前にも述べたように、光が〔眼から〕出てくることによって人は見ると時には見なしていたように思われる。少なくとも彼は次のように語っている。

人は嵐の夜をおかして出かけようとするとき、  
燈を、すなわち燃える火の光を用意する。  
どのような風も遮る角燈にしっかりとめ込んで。  
それは吹きつける風の息吹は追い払うが、  
光は一層微細であるためにそれを通して外へ突き抜け、  
疲れを知らぬ光線によって敷居を越えて輝く。  
それと同じように、かの時、原初の火は角膜の内に閉じ込められ、  
薄き亜麻布でくるまれ、まるき瞳に隠れひそんだが、  
それらには一面精妙な穴が穿たれてあった。  
それらは周りにたゆとう深い水は遮るが、  
火は一層微細であるだけに、外へと通過することができるのだ。

さて彼はこのようにしてわれわれは見ると時にはいうが、しかしまた時には見られるものから出てくる流出物によって見るとも主張している。

アレクサンドロス (『アリストテレス「感覚と感覚されるものについて」 注解』 23,8)

そしてまず最初に彼の詩句が引用されているが、これらの詩句によれば、彼〔エンペドクレス〕もまた光を火と見なしており、それが眼から流れ出、送り出されてきて、そのことによって視覚は生ずると考えている。というのも、その詩句によれば、視覚から送り出されてくる光を彼はランプ傘を通ってくる光になぞらえているからである。ちょうど夜中出かけようとする人が燈を用意し、それを角燈の中に入れるように (なぜなら角燈は外からの風は防ぎ止めるが、火の最も微細なものは、これが光であるが、外へ通過させるからである)、そのように火はまた角膜の中に閉じ込められて薄い膜によって取り巻かれているのであり、これらの膜は外から当たってきて火を消しかねないものは防ぎ、瞳を煩わすことを許さないが、火の最も微細なものは外へと通過させると彼はいうのである。角燈が「遮る」と彼がいうのは、それが風を防ぎ、それによって取り囲まれた火を保護することからしてであろう。あるいはそれが密なるものであって、その濃密性によって風を防ぐからして「遮る」というのであろう。また火が「微細」といわれるのは、その薄さのゆえに長く延び、密なるものをも通過することができるためであろう。「敷居を越えて」とは空中にということである。ホメロス：「ひっ掴んで敷居から投げ出した。彼が無力となって地上にいたるまで。」〔『イリアス』 XV 23〕 また彼は「薄き膜でまるき瞳を包んだ」というところを「薄き亜麻布でまるき瞳をくるまった」といっているが、詩的表現として「亜麻布」を膜に代えて「瞳」に対して使用したのである。これらの詩句によって以上のことを彼が語ったことを示した後、アリストテレスは「さて彼はこのようにしてわれわれは見ると時にはいうが、しかしまた時には見られるものから出てくる流出物によって見るとも主張している」と付け加えている。ある流出物が〔対象から〕流れ出てきて視覚にぶつかるが、それが視覚の孔

にそれと対応していることによって適合するとき、流出物がその中に入り、このようにして視覚が生じるというわけである。プラトンもまた『メノン』の中でエンペドクレスのものとしてこの説に言及しており、その説に基づいて色を、物体からの流出物が視覚と適合関係にあることによって感知されるものと規定している。

85

シンプリキオス (『アリストテレス「自然学」注解』 331,3)

また動物の諸部分も、その大多数が偶然よって生じたと彼〔エンペドクレス〕はいうのであって、大地〔土〕はそれらのものとほぼ等しい割合で一緒になったという場合などがそうである。そしてまた  
だが穏やかな焔はほんの少し土を得たに過ぎなかった  
とか  
キュプリスの掌の中でこのようなじめじめしたものと出会って  
といったごとく、人はエンペドクレスの『自然学』からこの種の詩句を多数引用することができるのである。

86

シンプリキオス (『アリストテレス「天体論」注解』 529,21)

しかしまたこれら物體的な眼についても彼は語っており、次のように始めている。  
これらのものから女神アプロディーテは疲れを知らぬ眼を形づくった

87

シンプリキオス (『アリストテレス「天体論」注解』 529,24)

また少しあとで、  
アプロディーテは愛の留め具で〔眼を〕巧みに作った。

88

アリストテレス (『詩学』 21. 1458 a 4)

省略語としては、たとえばクリー [=クリーター (大麦)] とか、ドー [=ドーマ (家)] とか、「両方の眼からひとつのオプス (像) ができる」のオプス [=オプシス (像)] といったものがある。

ストラボン (『地理書』 VIII p.364)

またエンペドクレスでは「オプシス (像)」は、「両方の眼からひとつのオプスができる」というようにいわれている。

89

プルタルコス (『自然学的諸問題』 19 p.916 D)

そこで、  
およそ生じた限りのすべてのものから流出物が出ていることを認識した上で

と語っているエンペドクレスにしたがって考えてみたまえ。すなわち動物や植物や大地や海からだけでなく、石や銅や鉄からも多くの流れが恒常的に出ているのであって、というのも、腐ったり減んだりするのはすべて、何かが常に流れ出し、絶えず運び出されることによってだからである。

90

プルタルコス (『食卓歓談集』 IV 1,3 p.663 A)

なぜなら〔身体の〕本性は類似したものの中からふさわしいものを摂取し、そこから多彩な栄養が多くの性質を体の中に送り込むことによって〔身体の〕それぞれの部分に役に立つものをそれ自身の中から供給するか、その結果エンペドクレスのいうようなこと、すなわち

このように甘いものは甘いものを捉え、辛いものは辛いものに向かって進み、  
酸っぱいものは酸っぱいものに赴き、熱いものは熱いものと番う  
というようなことになるのか、あるいは …。

マクロビウス (『サトゥルナリア』 VII 5,17)

しかし同じものは同じものによって養われるということをわれわれは知っている。… 個々のものが自己に似たものを自分の方に引き寄せることは、次のようにいうエンペドクレスが証人となる。

このように甘いものは甘いものを捉え、辛いものは辛いものに向かって進み、  
酸っぱいものは酸っぱいものに赴き、熱いものは熱いものと番う。

91

アレクサンドロス (『問題集』 II 23)

水は

葡萄酒とは … 親しみ合うが、油とは親しみ合おうとしない。

92

アリストテレス (『動物発生論』 B 8. 747 a 34)

〔騾馬の類はなぜ不妊なのかということについて〕エンペドクレスは、〔雌雄〕それぞれの精液は軟らかいが、それらの種子が混じり合うと密になるからであるとする。すなわち一方の空洞の部分と他方の密な部分が嵌まり合うからで、そういったことから軟らかいものが硬いものになるのであり、それはちょうど銅に錫を混ぜた場合と同様であると彼はいうのであるが、銅と錫の場合にはその原因を正しく述べていないし、… また一般に周知の事実から出発してもいない。なぜなら空洞の部分と固形の部分が互いに嵌まり合うとするなら、どうして葡萄酒と水のごとき混合が作り出されるのであろうか。

93

プルタルコス (『なぜピュティアの神託は衰微したか』 41 p.433 B)

なぜなら混ぜ合わされると藍が紫の、ニトロンが深紅の染色を促進すると思われるように、異なるものが互いに結びつき、適合することがあるからであって、

灰色のニワトコの木から採れる深紅は亜麻布とよく混じり合う  
とエンペドクレスもいっているごときだからである。

**プルタルコス** (『自然学的諸問題』 39)

なぜ水は表面部分では白く見え、深いところでは黒く見えるのであろうか。深さが太陽光線をそれが底に達するまでに鈍らせ減ぼすからで、すなわち深さが黒さの母だからであらうか。他方、表面は太陽によって直接働きかけられるから、光の輝きをそのまま受け取るといわねばならない。エンペドクレスもまたこのことを是認している。

そして河の深みの黒き色は影からきている。

同じことはまた空ろな洞窟の中でも見られる。

**シンプリキオス** (『アリストテレス「天体論」 注解』 529,26)

また彼は、あるものは昼間よく見え、他のものは夜中よく見える理由を語って、次のようにいっている。

それら〔眼〕がキュプリスの掌の中で最初に共に生まれたとき …

**シンプリキオス** (『アリストテレス「自然学」 注解』 300,19)

というのは、彼〔エンペドクレス〕は肉や骨や、その他それぞれのものを、一定の比〔ロゴス〕によって生じさせているからである。少なくとも彼は『自然学』の第1巻において次のように語っている。

大地〔土〕は優しくその胸幅広き坩堝の中に  
八つの部分のうち二つを輝くネスティスから受け取り、  
四つをヘーパイストス〔火〕から受け取った。そしてそれらが  
ハルモニアの膠によって絶妙に接合されて、白い骨が出来た。

これはすなわち、神的な原因によって、とりわけ「愛」あるいはハルモニアによってということである。というのも、それ〔骨〕は女神の膠によってつなぎ合わされるのだから。

**アリストテレス** (『デ・アニマ』 A 5. 410 a 1)

なぜならそれらのそれぞれは、元素が勝手な仕方であることによってあるのではなくして、むしろ一定の比〔ロゴス〕と組み合わせによってあるのだからであって、エンペドクレスが骨をそういったものとして語っているごとくだからである。

大地〔土〕は優しくその胸幅広き坩堝の中に  
八つの部分のうち二つを輝くネスティスから受け取り、  
四つをヘーパイストス〔火〕から受け取った。そして白い骨が出来た。

**シンプリキオス** (『アリストテレス「デ・アニマ」 注解』 68,5)

大地が「優しい」、すなわち調和がとれているといわれているのは、ピュタゴラス派の伝統にしたがってそれを立方体と考えているからである。すなわち立方体を彼らは、それが12の辺と8つの角

と6つの面を有するがゆえに、調和比例をなしているというのである。「坩堝」は詩人〔ホメロス〕のもとに見られる表現であって、混合されるものの調合がそこにおいてなされる容器である。「全部で20台の轡が坩堝の中に風を吹き込んだ」〔『イリアス』第18巻、470〕。またそれを彼〔エンペドクレス〕は「胸幅広き」と呼んでいるが、包容力のゆえに広いのである。骨の生成のために彼は火を四つ（恐らく乾いているのと色が白いことのゆえに他のものより多く火を分け持つというのであろう）、土を二つ、そして空気をひとつ、水をひとつ混ぜ合わせる。この空気と水の両方を彼は「輝くネスティス」と呼んでいるが、「ネスティス」というのはそれが流体であるため溢れ、流れるからであり、「輝く」というのはすき通っているからである。

97

アリストテレス（『動物部分論』A 1. 640 a 18）

なぜなら生成が実体のためにあるのであって、実体が生成のためにあるのではないからである。それゆえエンペドクレスは、動物における多くの部分は発生時にたまたま起こったことによってそのようになっているのであって、たとえば〔動物が〕あのような背骨を有するのは、〔発生時に〕身体をくねらせた際にたまたま押さえつけられたためであるといっているが、正しくないのである。

98

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』32,3）

また彼は火を「ヘーパイストス」とか「太陽」とか「焰」と呼び、水を「雨」、空気を「アイテール」と呼んでいる。さて彼は多くのところでそのようないい方をしているが、次の詩句においてもそうである。

大地〔土〕はそれらのものとはほぼ等しい割合で一緒になった、  
すなわちヘーパイストスと雨と明るく輝くアイテールと、  
キュプリスのまったき港に碇泊して。

大地〔土〕の方が少し多いこともあれば、他のものに比べて少ないこともあった。  
それらから血液が生まれ、また他のさまざまなかたちの肉が生じた。

〔参照〕シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』331,3）

また彼は動物の大多数の部分は偶然によって生じたという。

大地はそれらのものとはほぼ等しい割合で一緒になった  
といっている場合などがそうである。

99

テオプラストス（『感覚論』9）

鈴、肉の枝。

100

アリストテレス（『呼吸について』7. 473 a 15ff.）

呼吸についてエンペドクレスもまた語っているが、しかしながらそれが何のためになされるのか、またすべての動物について、彼らは呼吸するのか、あるいはしないのか、これらのことについては彼

は何も明らかにしていない。また彼は鼻孔による呼吸について語れば、呼吸の主要なところは論じたことになると考えている。… 息の吸い込みと吐き出しはある種の血管があることによると彼はいう。すなわち血管の中には血液があるが、しかし血液で一杯であるわけではなく、それらは外の空気に通じる通路を有している。この通路は身体の構成分子よりは細いが、空気のそれよりは太い。それゆえ、血液は本性的に上下〔内外〕に動く性質を有するので、下方〔体内〕へ移動すると空気が流れ込んできて、息の吸い込みが起こり、上方〔体の表面部〕へ上がってくると空気が外に放出されて、息の吐き出しが起こるのである。彼はこの出来事をクレプシュドラ〔水取り器〕になぞらえている。

すべてのものが息を吸ったり吐いたりするのは次のごとし。

すべてのものには血のない肉の管が身体の表面にまで延びている。

そしてその口のところで皮膚の表面が一面

細かい孔で穿かれていて、その結果、血液は押し止めるが、

空気は容易に通り返けられるように通路が拓かれている。

かくしてそこからしなやかな血液が激しく退くときには、

湧き立つ空気が猛り狂った大波をなして進入してき、

それが駆け上ってくると、空気は再び吐き出される。

それはちょうど女の子が輝ける青銅製のクレプシュドラで遊ぶ時のよう。

すなわち少女が管の口をかわいらしい手に押し当てて、

白銀色の水のしなやかな体の中に浸すとき、

水は少しも容器の中に入ってこないで、空気のかたまりが中から、

密な孔の上に身を投げかけて、それを閉め出している。

少女が蓋を取って濃密な〔空気の〕流れを開放するまでは。

その時にはしかし空気が場所を譲って、その分だけ水が入ってくる。

また同じように水が青銅の器の深みいっぱいを占めて、

その口と孔が人間の〔手の〕皮膚で塞がれているときは、

外の空気が中に入ろうとして水を押し止める。

ゴロゴロと音を立てる濾過器の入り口あたりで、その先端を制しつつ、

彼女が手を放すまで。だがその時には再び、前とは逆に

空気が進入してきて、その分だけ水が流れ出る。

ちょうどこれと同じように、肢体くまなく流れるしなやかな血液が

また再び体の奥へと退くときには、

ただちに空気の流れが高波をなして激しく入ってくるが、

駆け上ってくると、再びそれと等しい分だけ外に吐き出される。

#### プルタルコス（『知りたがりについて』11 p.520 E）

ちょうど獵師が犬に、脇にそれたり、どんな臭いでもお構いなしに追うことを許さないで、

獣の四肢の痕跡を鼻で探し求める

際、痕跡をより鋭く捉えるように、彼らの感覚器官を本来の仕事に向けて純粹で混じり気のないものに保とうと、綱で引いたり引き戻したりするように …。

プルタルコス (『自然学的諸問題』 23 p.917 E)

[なぜ春には獣を追うことが難しくなるのか。] 犬どもは、  
獣の四肢の痕跡を鼻で探し求める

とエンペドクレスもいうように、獣が森の中に残す流出物を捉えるのであるが、春には植物や灌木の多くの臭いがそれらを曇らせ、ぼやけさせるからであろうか。

擬アレクサンドロス (『問題集』 III 102)

[なぜ犬は死んだ兎の足跡は嗅ぎ分けられないのか。] 生きているときには獣からの臭いが連続して出ているがゆえに感覚するが、死んでしまうとその流れが止まるのである。なぜなら、エンペドクレスの言によれば、

〈生きている間は〉 やわらかい草地にその足から残すものを

〔死んだ後には〕 残さないからである。すなわち臭いも色も保存されることはできず、死んだ後にはそれらも臭気も消失するのである。

逸名著作家の古注 (ベルリン・パピュロスのプラトン『テアイテトス』 注解 70,48)

しかしエンペドクレスは流出物といったものを残しており、犬は「〈獣の〉四肢の痕跡を」嗅ぎ分けるといっている。〈だが〉このことは〈動物が〉死んだ後では〈不可能となる〉。

102

テオプラストス (『感覚論』 22)

さてこのようにして、すべてのものは息と嗅覚を分け持つこととなった。

103

シンプリキオス (『アリストテレス「自然学」 注解』 331,10)

人はまたエンペドクレスの『自然学』からこれに類いた詩句を多く見つけ出し、引用することができよう。次のもそうである。

このように偶然の意志によって、すべてのものは知力を具えるにいたった。

104

シンプリキオス (『アリストテレス「自然学」 注解』 331,13)

また少し後のところで、

そして最も稀薄なものが落ちてきて、偶然に一緒になった限りにおいて …

105

ポルピュリオス (『ステュクスについて』 [ストバイオス『自然学抜粋集』 I 49,53 より])

またエンペドクレスも、血液が知力の器官であると語っているように思われる。

〔心臓は〕 反対の方向に流れる血液の海に養われ、

そこにこそとりわけ人間どもによって思想と呼ばれるものがある。

なぜなら人間にとって心臓の周りの血液こそ思想に他ならないのだから。

106

アリストテレス (『デ・アニマ』Γ 3. 427 a 21)

少なくとも昔の人々は思惟と感覚を同じものであるとしている。例えばエンペドクレスは、なぜなら人間どもにとって知恵はそこにあるものとの関係において成長するからといっており、また別のところでは、ここからして彼らには常にあれこれ別のことを思惟するということも起こってくる

アリストテレス (『形而上学』Γ 5. 1009 b 17)

エンペドクレスは、性状が変われば思慮も変わると考えて、なぜなら人間どもにとって知恵はそこにあるものとの関係において成長するからといっている。また別のところでも、さまざまに性状を変えるに応じて、それだけまた彼らには常にあれこれ別のことを思惟するということも起こってくる

107

テオプラストス (『感覚論』10)

〈なぜなら〉すべてはこれらのものから繋ぎ合わせて形づくられているのだから。そしてこれらのものによって彼らは思惟し、快や苦を感じるのだ。

108

アリストテレス (『形而上学』Γ 5. 1009 b 17)

また別のところでも、さまざまに性状を変えるに応じて、それだけまた彼らには常にあれこれ別のことを思惟するということも起こってくる

アリストテレス (『デ・アニマ』Γ 3. 427 a 21)

また別のところでは、ここからして彼らには常にあれこれ別のことを思惟するということも起こってくる

ピロポノス (『アリストテレス「デ・アニマ」注解』486,13)

なぜならエンペドクレスは夢の相違を論じて、昼間の活動から夜の想念が生じるというからである。次の詩句において彼はそうした想念を思惟と呼んでいる。

ここからして彼らには常にあれこれ別のことを思惟するということも起こってくる。

シンプリキオス (『アリストテレス「デ・アニマ」注解』202,30)

また夢においても、

あれこれ別のことを思惟するということが起こってくる。

109

アリストテレス (『デ・アニマ』A 2. 404 b 8)

他方〔魂を持つものが〕事物を認識したり感覚したりするという点に注目した人々は、魂を原理であるという。多くの原理を立てる人たちはそれら〔すべて〕を魂であるとし、ひとつしか原理を立てない人たちはそのひとつを魂であるとする。ちょうどエンペドクレスが、魂はすべての元素からなるが、それらの元素のそれぞれもまた魂であるとして、次のように語っているようにである。

なぜなら、われわれは土によって土を見、水によって水を、  
空気によって神的な空気を、また火によって焼き滅ぼす火を、  
愛によって愛を、陰險な憎しみによって憎しみを見るのだから。

アリストテレス (『形而上学』B 4. 1000 b 5)

認識は同じものが同じものによってである。彼は次のようにいっている。

なぜなら、われわれは土によって土を見、水によって水を、  
空気によって神的な空気を、また火によって焼き滅ぼす火を、  
愛によって愛を、陰險な憎しみによって憎しみを見るのだから。

109 a

〔パピュロス〕 (オクシュリンコス・パピュロス 1609 XIII 94)

そのところで見えるようになると考えられよう。なぜならあの鏡の上で見られるのではなく、見る者の上への反射だからである。さてこれらのことについては『ティマイオス』の註の中で述べられている。だがデモクリトスやエピクロスのような、あるいはエンペドクレスであれば鏡の上に姿を見せるものそれぞれのものから流出物が出てきて、それが〈像〉として〈眼に適合する〉のだというであろうが、そのような剥離像と理解すべきでもない。

110

ヒッポリュトス (『全異端派論駁』VII 29)

エンペドクレスの哲学によれば、われわれのもとにおける世界の生成と消滅、それに善と悪から組み立てられた構造は、およそこのようなものである。だがまた彼はある第三の知的な能力が存在し、それはこれらのものからも認知されるという。彼の語るところはほぼ次のごとくである。

もし汝がそれらを節操堅き胸の上にしっかりと据えて、  
清らかな心づかいでもって好意的に見守るならば、  
それらは実にそのすべてが生涯を通じて汝のもとにあり、  
それらから汝はまた他の多くのものを得るであろう。なぜならまさにそれらが各人を、  
それぞれの本性のあるところに応じて、人格へと成長させるのだから。

74

だがもし汝がそれとは別のもの、すなわち人の世にあって想いを鈍らせる  
無数の哀れむべきものを熱望しようものなら、  
たちまちにしてそれらは、時の巡り行くと共に、汝を見捨てよう。  
それら自身の友なる種族のもとに帰り着くことを望んで。  
というのも、知るがよい、あらゆるものが思慮を有し、思惟の一部を分け持っていることを。

#### ヒッポリュトス（『全異端派論駁』VII 30）

〔異教徒のマルキオンに対して〕君は気づかぬ内にエンペドクレスの『カタルモイ』の思想を教えているのだ。… 愛の業が君にとってはひとつの不可分なものとして保全されるようにと神によって目合わされた婚姻を君は、エンペドクレスの教説にしたがうことによって、解体するのだ。なぜなら結婚は、エンペドクレスによれば、先に示したごとく、一なるものを分かち、多を作り出すことだからである。

#### ヒッポリュトス（『全異端派論駁』VI 12）

というのは、火のすべての部分が、〈見える部分も〉見えない部分も、「等しい思慮と認識を有する」とエンペドクレスは見なしていたと彼〔シモン〕はいうからである。

#### セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』VIII 286）

さらに一層逆説的にエンペドクレスは、あらゆるものが、動物のみならず植物も、理性を有すると考えていた。彼ははっきりと「というのも、知るがよい、あらゆるものが思慮を有し、思惟の一部を分け持っていることを」と記している。

#### ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』VIII 59）

彼〔エンペドクレス〕は次のように語っている。

病や老齢を防ぐものとなるすべての薬を汝は聞き知ることになろう。  
まことにわたしはただ汝ひとりのためにこれらのことすべてをなし遂げるのであるから。  
大地の上に押し寄せ、その息吹によって田畑を荒廃させる  
疲れを知らぬ風の力を汝は鎮めるであろう。  
また逆に、もしそれを汝が望むなら、汝はそれに対向する風の息吹をもたらずであろう。  
汝は人間どものために暗い長雨を変じて時期に適った日照りとなし、  
また夏の日照りを変じて天空より流れ出る樹々を育む水の流れとなすであろう。  
また汝はハデスから亡き人の力を連れ戻すであろう。

#### クレメンス（『雑録集』VI 30）

大地の上に押し寄せ、その息吹によって田畑を荒廃させる  
疲れを知らぬ風の力を汝は鎮めるであろう。  
また逆に、もしそれを汝が望むなら、汝はそれに対向する風の息吹をもたらずであろう。

## ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』VIII 62）

おお、友よ、褐色のアクラガス河畔の大なる町に、  
 都の高みに住む人々よ。善き業に心がける人々よ。  
 幸いあれ、わたしは御身らにもはや死すべき者としてではなく、不死なる神として、  
 ふさわしい尊敬を身に受けながら、すべての者の間を歩み行く。  
 リボンと華やかな冠を頭に戴いて。  
 華やかに咲き誇る町にわたしがいたり着く時はいつも、これらの人々に、  
 男にも女にも、わたしは崇め奉られる。これらの者たちは万をなして付きしたが、  
 そのある者は利得にいたる道はどこにあるかと尋ね、  
 またある者は予言を求め、またある者はあらゆる種類の病について、  
 その治療の託宣を聞こうと問い求める。

## ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』VIII 54）

シケリアのアクラガスの市民であったことは、彼自身が『カタルモイ』の冒頭で語っている。  
 おお、友よ、褐色のアクラガス河畔の大なる町に、  
 都の高みに住む人々よ。

## クレメンス（『雑録集』VI 30）

ある者は予言を求め、またある者は鉄のごとき病について  
 [その治療の託宣を聞こうと] 付きしたがってくる。  
 実際ひどい〈苦しみに〉苛まれてきたものだから、  
 と語っている。

## セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』I 302）

しかし滅び多き死すべき人間どもにわたしが優るからとて、  
 なぜわたしはそれを何か重大事でもあるかのようにことさらに述べ立てるのか。

## クレメンス（『雑録集』V 9）

おお、友よ、わたしは知っている、わたしが告げようとする  
 物語には真理のあることを。だがそれは人間どもにとっては  
 まことに厄介なものとなる。信じようとする衝動は心には厭わしいのだ。

## ヒッポリュトス（『全異端派論駁』VII 29）

そしてエンペドクレスが自分の出生について語るところはこうである。  
 われもまた今はかかる者らのひとり、神のもとより追われたる者にして放浪の身。

すなわち彼は、「争い」によって引き離される前に、そして「争い」の秩序づけによるこの多なる世界に誕生する以前に彼がそれであった一なるものとその統一性を「神」と呼ぶのである。というのは、彼は

狂える争いを信じたばかりに  
といい、この世界のデミウルゴス〔造り手〕を狂気で混乱した不安定なものと呼ぶからである。すなわちこれが魂の判決であり必然の定めであって、「争い」が魂を一なるものから引き離し、細工し、造り出したのである。彼はほぼ次のように語っている。

過ちを犯して偽りの誓いを立てる者あれば、  
永生の命を得ているダイモーンといえども、  
「永生のダイモーン」と彼が語っているのは魂のことであるが、それは、それらが不死であり、永い境涯を生きるからである。

至福の者から離れて、一万周期の三倍さまよわねばならぬ。

ここで「至福の者」と呼ばれているのは多なるものから英知界の統一へと「愛」によって糾合された者たちである。さて、それら〔魂〕は〔至福の者から離れて〕

その期間のあいだ死すべきものどものあらゆる姿に生まれ変わり、  
生の苦難の道を次々と取り替えながら  
さまよわねばならないと彼はいうのである。

「苦難の道」というのは、魂のさまざまな身体への転生と変転であり、これが「生の苦難の道を次々と取り替えながら」と彼が語る場所のものである。すなわち魂は身体から身体へと「次々と取り替えながら」、「争い」によって転生させられ懲らしめられるのであって、一なるものの内にとどまることを許されないのである。しかも身体から身体へと転生する過程で魂は「争い」によってありとあらゆる罰で懲らしめられる。彼は次のようにいう。

すなわちアイテールの力は彼らを大海へと追いやり、  
大海は大地の面へと吐き出し、大地は輝く太陽の  
光の中へ投げ捨て、そして太陽はアイテールの渦の中に投げ捨てる。  
それぞれが他から彼らを受け取るが、すべてが彼らを忌み嫌う。

これがデミウルゴスの加える罰であって、それはちょうど鍛冶屋が鉄を鍛えるとき、火から水の中に浸けるようなものである。なぜならアイテールとは火であって、そこからデミウルゴスは魂を海中に転ずるのだからである。また「大地」は土である。それゆえ彼は「水から土へ、土から空気へ」といっているのである。これが「大地は輝く太陽の光の中へ投げ捨て、そして太陽はアイテールの渦の中に投げ捨てる。それぞれが他から彼らを受け取るが、すべてが彼らを忌み嫌う」と彼が語る場所のことである。

ところで魂は〔この世界においては〕忌み嫌われるのであるが、…「愛」はそれらを〔再び〕結びつける。なぜなら「愛」は善なるものであり、それらの悲嘆と「狂える争い」による無秩序で苛酷なあり様を憐れむからである。…さて、このばらばらになった世界のこのような破壊的な「争い」による宇宙秩序のゆえに、エンペドクレスは彼の弟子たちにあらゆる生き物を控えるよう呼びかけている。というのも、食される動物の身体は罰せられた魂の住み家だからと、彼はいうのである。そして彼は、この論を聴く者は「争い」（それは「愛」の業を解体し、ばらばらにする）の行なう業に協力したり加勢したりしないためにも、女性との交わりを自制すべきであると諭している。これが万有を統率する最大の法であるとして、エンペドクレスは次のように語っている。

ここにアナンケー〔必然の女神〕の託宣がある。それは神々の太古の定め、

とこしえなるもの、広汎な誓いによって封印されたもの。

「争い」による一なるものから多なるものへの転化、また「愛」による多なるものから一なるものへの転化を彼は「アナンケー〔必然〕」と呼ぶのである。そして、先にもいったように、一方には四つの可死的な神々、すなわち火、水、土、空気があり、他方には二つの不死にして不生、互いに対して常に敵対的な神々、すなわち「争い」と「愛」がある。

#### プルタルコス（『亡命について』17 p.607 C）

だがエンペドクレスはその哲学の冒頭において、

ここにアナンケー〔必然の女神〕の託宣がある。それは神々の太古の定め、  
過ちによって自らの手足を殺生の血で穢した者あれば、  
永生の命を得ているダイモーンといえども、  
至福の者から離れて、一万周期の三倍さまよわねばならぬ。

われもまた今はかかる者らのひとり、神のもとより追われたる者にして放浪の身  
と宣いし、彼だけでなく、彼を始めとして、われわれのすべてが、この世においてはさすらい人であり、異邦人であり、亡命者であることを教えているのである。… 魂は神の布告と法によって追放された亡命者であり、〔この世を〕さまよっているのである。

#### プルタルコス（『イシスとオシリスについて』28 p.361 C）

ダイモーンもまた罪を犯し、間違いを犯せば、償わねばならないとエンペドクレスはいう。

すなわち、アイテールの力は彼らを大海へと追いやり、  
大海は大地の面へと吐き出し、大地は輝く太陽の  
光の中へ投げ捨て、そして太陽はアイテールの渦の中に投げ捨てる。  
それぞれが他から彼らを受け取るが、すべてが彼らを忌み嫌う。

そしてこのことは、このようにして罰せられ浄められて、再びその本来のあり場所と地位を取り戻すまで、つづくのである。

#### プロティノス（『エンネアデス』IV 8,1）

またエンペドクレスは、世に落ちるのは過ちを犯した魂にとって定めであるとし、彼自身も「狂える争いを信じたばかりに」「神のもとより追われたる者」となり、〔この世に〕やってきたと語っているが、彼はただ、ピュタゴラスやその後継者たちが、この問題や、あるいは他の多くの問題について、謎めいた仕方で語ったことを、あからさまに語ったに過ぎないのである。

#### プルタルコス（『食卓歓談集』IX 5 p.745 C）

プラトンは、神々の永遠の蒼穹にムーサ〔ミューズ〕ではなく、さほど優しくも情け深くもないダイモーンたるセイレーンを置いているという点で不条理を犯している。またムーサ〔ミューズ〕をまったく無視し去るか、あるいはそれをモイラ〔運命の女神〕という名で呼んだり、アナンケー〔必然の女神〕の娘と呼んだりしている点でもそうである。なぜならアナンケー〔必然〕はムーサ〔ミューズ〕的でないからであり、他方ペイトー〔説得の女神〕はムーサ〔ミューズ〕に関係があり、エンペドクレスのいうカリス〔優美の女神〕以上にムーサ〔ミューズ〕に親愛的であるとわたしは思う。

〔カリスは〕苛酷なアナンケーを嫌う。

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』VIII 77）

なぜなら、わたしはすでに一度は少年であり、少女であり、  
藪であり、鳥であり、海に浮かび出る燔祭の魚であったがゆえに。

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』I 3）

なぜなら、わたしはすでに一度は少年であり、少女であり、  
藪であり、鳥であり、海に浮かび出る物いわぬ魚であったがゆえに。

クレメンス（『雑録集』III 14）

エンペドクレスもまた次のように語っており、彼〔ヘラクレイトス〕と同意見であることは明らかである。

わたしは泣き叫んだ、見も知らぬ土地を見て。

〔参照〕セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』XI 96）

しかしエピクロス派のある人たちは・・・動物は教えられるまでもなく、本性的に苦を避け、快を求めると語るのを常としていた。いずれにせよ動物は誕生の瞬間、いまだドクサの奴隷となる前であるが、空気の慣れぬ冷気に打たれると同時に「泣き叫ぶ」のである。

クレメンス（『雑録集』IV 12）

思うに彼は、

何という栄誉から、何と大きな祝福から〔追放されて〕

とエンペドクレスのいうごとく、この世にやってきて、死すべきものどもに立ち混じって時を過ごしていることを教え諭しているのである。

プルタルコス（『亡命について』17 p.607 D）

そこでちょうど逆巻く高波に囲まれた島の中に閉じ込められたかのごとく、プラトンの言を借りれば「蝸牛ように」身体の中に閉じ込められて、・・・天界や月を大地と地上の生活に取り替えることによって「何という栄誉から、何と大きな祝福から」追放されたか呼び起こすことも、思い出すこともできぬがゆえに、この地上でほんの少し場所を変えただけでも、それ〔魂〕は耐えがたく思うのであり、またよそ者のような気持ちになるのである。

ポルピュリオス（『ニンフの洞窟』8 p.61,19 Nauck）

というのは、エンペドクレスにおいても、魂の導き手は次のようにいうからである。

われわれはこの蔽われた洞窟の中にやってきた・・・。

ヒエロクレス (『黄金詩編』24 [ストバイオス『自然学抜粋集』II 143,1] への注解)

そしてもし地上にまつわるもの事と、

そこにはポノス〔殺戮〕とコトス〔怒り〕と、その他さまざまな死の女神の族どもが〔さまよい歩く〕とその同じ人〔エンペドクレス〕が語っているような「喜びなき大地」を逃れるならば、彼は幸福の国へと登り、かつての性状を取り戻すであろう。しかしこの「喜びなき大地」に落ちる者は

アテ〔禍い〕の野の闇の中をさまよい歩く。

他方「アテ〔禍い〕の野」を逃れたいと思う者の意欲は「真理の野」へと向かわせる。しかし羽根をもぎ取る衝動によって「真理の野」を去る者は、祝福の生涯を奪われて地上の身体の中に入って行く。

プロクロス (『プラトン「国家」注解』II 157,24)

ここではポノス〔殺戮〕とコトス〔怒り〕と、その他さまざまな死の女神の族どもがアテ〔禍い〕の野の闇の中をさまよい歩く。

プロクロス (『プラトン「クラテュロス」注解』103)

ここではポノス〔殺戮〕とコトス〔怒り〕と、その他さまざまな死の女神の族どもが、また乾いたノソス〔病気〕と、物みな溶かす働きたるセプシス〔腐敗〕が。

シュネシオス (『摂理について』1)

魂に対して申し渡されたテミスの掟があるのであって、それはすなわち、存在する緒物の端々と交わりながらもその本性を守り通し、汚れぬままに過ごした魂は、いずれも再び同じ道を遡ってそれ本来の源へと立ち戻るが、それはちょうど自然の必然がある意味でそれとは異なる部分から送り出した魂を、それと同類の

ポノス〔殺戮〕とコトス〔怒り〕と、その他さまざまな死の女神の族どもがアテ〔禍い〕の野の闇の中をさまよい歩く

山峡に野営させるのと同様であるというものである。

プルタルコス (『爽快な気分について』15 p.474 B)

むしろ

そこにいませしはクトニエー〔大地〕と遠く見はるかすヘリオペー〔日輪〕、  
血なまぐさいデーリス〔争い〕と顔立ち穏やかなハルモニエー〔調和〕、  
カリストー〔美〕とアイスクレー〔醜〕、トオーサ〔速さ〕とデナイエー〔遅さ〕  
愛らしきネメルテース〔確実〕と黒髪のアサペイア〔不確実〕

とエンペドクレスのいうように、二様の運命なりダイモーンが生まれると同時にわれわれのそれぞれを引き受けて導くのであって、したがってわれわれの誕生はこれらのパトス〔情念〕のそれぞれを混じた種を受け取っており、このゆえに多大の矛盾を含むがゆえに、思慮ある者はよりよき運命を祈る

が、また別のことも予想するのであって、過度を避けつつその両者に対処するのである。

123

コルヌトゥス (『神学摘要』 17)

これら〔巨人族〕は存在する諸物の差別相ということができよう。なぜならエンペドクレスは自然科学的な仕方で、

ピュソー〔成長〕とプティメネー〔衰退〕、エウナイエー〔眠り〕とエゲルシス〔目覚め〕、  
キーノー〔運動〕とアステンペース〔休止〕、あまたの冠戴くメギストー〔偉大〕と  
ポリュエー〔汚辱〕、ソーペー〔沈黙〕とオンパイエー〔弁舌〕 …

などと列挙し、存在する諸物の多彩性を寓意的に語っているが、それと同じように、それによって動物が言葉を話すようになったところの、また発語全体がそれに基づいて遂行されるところの「ロゴス」が、一種のイアペトス〔射手、発する者〕であるとのことで、古人によって「イアペトス」と名づけられたり、「コイオス」と呼ばれたりしているからである …。

124

クレメンス (『雑録集』 III 14)

そしてもう一度、

おお、哀れ、死すべき者どもの惨めな族よ、祝福なき者よ、  
このような争い、このような嘆きの中から生まれてきたとは。

ティモン (断片 10 Diels)

このような争い、このような嘆きから造られたとは、  
というような惨めな人間ども、恥ずべき悪、下腹部 …。

125

クレメンス (『雑録集』 III 14)

なぜなら生けるものからその姿を取り換えて死者を作り、  
〈死せるものから生者を作ったがゆえに。〉

126

プルタルコス (『肉食について』 2. 3 p.998 C)

自然は「肉という見知らぬ衣を着せて」すべてを交換し、転居〔転生〕させる …。

ポルピュリオス (ストバイオス『自然学抜粋集』 I 49,60 より)

なぜなら、その転生の運命と自然本性は、エンペドクレスによってダイモンと呼ばれているが、それが

肉という見知らぬ衣を着せて  
魂を衣替えさせるのだからである。

127

アイリアノス (『動物誌』 XII 7)

エンペドクレスもまた、人間にとり最上の移住は、籤が彼を動物に生まれ変わらせるときには獅子になることであり、植物に生まれ変わらせるときには月桂樹になることであると語っている。彼の語る場所はこうである。

獣にあつては山に伏し地に眠る獅子となり、  
枝葉美しき樹々にあつては月桂樹となる。

128

ポルピュリオス（『禁忌について』II 20ff.）

昔の供犠は多くの場合酒を混じえぬものであった。水の灌奠は酒を混じえない。その後蜂蜜の灌奠となった。というのは、われわれはこの液体の果実を蜜蜂によって用意されて初めて得たのだからである。その次に油の灌奠となり、そして最後に、これらすべての後に、酒の灌奠となったのである。…

(21) このことは真理の写しともいべきクレタのコリュバンテス僧の供犠に関する石板によって証明されるのみならず、神々の系譜について述べる際に供物についてそれとなく語っているエンペドクレスによっても証言されている。彼は次のように語っている。

かの者たちにとってはアレスもキュドイモスも、  
王者ゼウスもクロノスもポセイドンも神ではなかった。  
ただ女王キュプリスのみが神であった。

キュプリスとは「愛」のことであって、

この女神を彼らは聖なる像でもって、  
あるいは動物の絵や巧みな芳香を有する香油でもって、  
あるいはまた混じり気のない香料とふくいくたる乳香の供物でもって、  
そしてまた黄金色の蜂蜜の灌奠を地面に注いで、祀っていた。

このしきたり〔蜂蜜の灌奠を地面に注ぐこと〕は今日でもある人たちのもとではなお真理の跡をとどめるものとして存続しており、「祭壇が牡牛の血で濡らされる」ことはないのである。というのは、思うに、愛や同類の感覚が〔なお〕すべてを占有していたときには、その他の動物も同族であると考えて、何人も動物を殺すことはなかったからである。アレスやキュドイモス、それにありとあらゆる種類の戦いや戦争の原理が覇権を握るにいたったとき、その時初めて人々は同族のものも何ら容赦しなくなったのである。(27)

だが祭壇が牡牛の血で濡らされることはなかった。  
むしろそれは人々においては最大の穢れであった。  
生命を奪ってそのみごとな四肢を食らうということは。

129

ポルピュリオス（『ピュタゴラス伝』30）

彼〔ピュタゴラス〕自身は天球とそれに基づいて運動する諸星のあまねきハルモニアー〔音階〕を捉え、本性の貧弱さのゆえにわれわれは聴くことのできない万有のハルモニアー〔音階〕を聴くことができた。エンペドクレスもまた彼について次のように語って、このことを証言している。

かの者たちの中に並はずれた知識を有するひとりの男がいた。  
まことにその者は心の最も豊かな富をわがものとし、  
ありとあらゆる知恵の業に比類なく通じていた。  
なぜなら、ひとたびその全精神をもって求めたならば、

彼は存在するものすべてのそれぞれをやすやすと見て取ったから。

十度も二十度も繰り返された人間の生涯によって。

すなわち「並はずれた」とか「存在するもの〔すべて〕のそれぞれを見て取る」とか「精神の最も豊かな富」とか、またこれに類する表現は、見たり聴いたり思惟したりすることにおけるピュタゴラスの他の者とは異なる並はずれて精確な特別の天稟を何よりも物語るものだからである。

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者伝』VIII 54）

かの者たちの中に並はずれた知識を有するひとりの男がいた。

まことにその者は心の最も豊かな富をわがものとしていた。

130

逸名著作家の古注（ニカンドロス『動物詩集』452 p.36, 22 への古注）

すべてのものが人間に馴れ、穏やかであった。

獣らも鳥どもも。友愛の火がともっていたのだ。

131

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』VII 31）

というのは、エンペドクレスは悪しき「争い」によって支配された宇宙と、もうひとつ別の「愛」によって支配された英知的な宇宙があるというからである。…そしてそれら異なる原理の真ん中に正しきロゴスがあるのであって、それにしたがって「争い」によって分離されたものが結合され、「愛」によってひとつにくっつけられるのである。まさにこの「愛」に加勢する正しきロゴスをエンペドクレスはムーサとも呼び、彼女に自分を助けてくれるよう呼び掛けて、ほぼ次のように語っている。

もし束の間の生命の者どものための、不死なるムーサよ、  
われらが心遣いが汝の心に入るを嘉としたまうならば、  
今再び祈願する者の傍らに立って、カリオペイアよ、  
至福なる神々についてよき物語を語り示すを助けたまえ。

132

クレメンス（『雑録集』V 140）

幸いなるかな、神のごとき分別の富を得し者。

わざわいなるかな、その心に神々についての暗きドクサがかかる者。

133

クレメンス（『雑録集』V 81）

すなわち神的なものは、アクラガスの詩人もいうように、  
われらが眼の届くところまで近づけることもできねば、  
手で捉えることもできない。こういったやり方が  
人間どもにとってはその心に落ち込む説得の最大の道ではあるが。

134

**アンモニオス**（『アリストテレス「命題論」注解』249,1）

それゆえにアクラガスの知者もまた神々について、彼らは人間の姿をしているとする詩人たちによって語られている神話を批判して、次のように語ったのである。これは直接にはアポロンについて語られたものであるが（というのは、アポロンについて論じることが当面の問題であったから）、しかし一般に神的存在全体について同じように妥当するものである。彼は次のように主張する。

なぜなら〔神は〕その肢体に人間の頭を具えることなく、  
背中から二本の小枝〔腕〕が生え出ることもなく、  
足もなければ、速き膝もなく、毛深い陰部もない。  
むしろ彼は神聖にして名状し難い心のみであって、  
速やかなる想いでもって全宇宙を駆け抜ける。

「神聖な」ということによって、彼は知性をも越えた原因を示唆しているのである。

135

**アリストテレス**（『弁論術』A 13. 1373 b 6）

なぜなら、すべての人が、たとえ互いに対して何らの共同関係も契約もなくとも、直観的に知っているある自然本性的に共通する「正しさ」や「不正」があるからである。… エンペドクレスが生命あるものを殺してはならないということについて語っていることもそれであって、それはある人には正しく、ある人には正しくないといったものではなく、

万物の法は広大無辺なアイテールを貫き、  
無限の光を貫いて、どこまでも及んでいる

のである。

**キケロ**（『国家について』11,19）

ピュタゴラスとエンペドクレスは、すべての動物に係わる法的一条項といったものがあると宣言し、動物を虐待する者の上には償いようのない罰が下るであろうと叫んでいる。

**セクストス・エンペイリコス**（『諸学者論駁』IX 126）

いやしくも正義もまた人間相互に対する関係や神々に対する関係に基づいて導入されているのだとするなら、もし神々が存しないなら、正義はなり立たないことになるだろう。

〔参照〕 **イアンブリコス**（『ピュタゴラス伝』108）

彼〔ピュタゴラス〕は生きものを控えるように命じた。というのは、彼は行為において完璧に正しくありたいと思っていたので、同族たる動物のどのようなものも傷つけないことが恐らく必要だったのである。なぜなら動物との同族的な関与を主張しながら、もし自身が貪欲に捉われるなら、どうして他の人に正しく振る舞うよう説得することができたであろうか。まさにそれら動物は生命を共有すると共に同一の元素を共にし、そしてまたそれらのものから構成される混合を共にすることによって、いわば兄弟の縁でわれらと結ばれているのである。

136

セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』IX 127）

そこでピュタゴラスとエンペドクレスの信奉者たちや、またイタリアのその他のグループの人々は、われわれはわれわれ相互の間や神々との間だけでなく、非理性的な動物ともある種の交流関係を有しているというのである。すなわち、宇宙の全体を魂のように貫くひとつの霊が存在し、それがわれわれをそれらのものとひとつに結びつけているという。それゆえそれらのものを殺し、その肉を食物とするなら、われわれは同族のものを滅ぼすのであるからして、不正をなし、神に背くことになるろうと。そこからまたあれらの哲学者たちは生きものを控えるよう勧めたのであり、「浄福者の祭壇を温かい血で染める」者どもは神に背いているのだと主張しているのであり、エンペドクレスもまたどこかで次のようにいっている。

汝らは音もおぞましき殺戮を止めようとしぬのか。

心愚かにも互いに貪り食らい合っているのを見ぬのか。

137

セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』IX 129）

父は姿を変えた愛しい息子を差し上げて、  
げに愚かにも祈りを捧げながらその喉を切り裂く。人々は  
哀願するものを犠牲とすることに心を乱すが、父はその叫び声に耳をかさず、  
屠って、館の中で悪しき食事を整える。  
同じようにまた息子は父を、子供らは母を捕らえては、  
その生命を奪って、愛しき者たちの肉を食らっている。

オリゲネス（『ケルソス論駁』V 49）

なぜなら彼の者たち〔ピュタゴラス学徒たち〕は、魂は他の身体に転生するという神話ゆえに生き物を控えているし、またある人は「愛しい息子を差し上げて、げに愚かにも祈りを捧げながらその喉を切り裂く」といっているからである。

138

アリストテレス（『詩学』21. 1457 b 13）

種から種への転喩というのは、例えば「青銅で魂（生命）を汲みとって」と「堅固な青銅で切りとって」がそれである。というのは、これらの詩句において、一方「汲みとる」は切りとることを意味しており、他方「切りとる」は汲みとることを意味しているからである。

139

ポルピュリオス（『禁忌について』II 31）

何人も罪なき者はないからして、われわれにとって残るところは、食物について犯した過ちをあとで浄めによって癒してもらうことだけである。もしわれわれが恐るべきことを眼の前でなし、エンペドクレスのように次のようにいって叫ぶなら、それと同じことがなされているのである。

ああ、仮借なき死の日がなぜわたしをその前に滅ぼしてくれなかったのか、

肉を唇にするというむごい所業を企むその前に。

プルタルコス (『食卓歓談集』 III 1,2 p.646 D)

けだしエンペドクレスによれば、

月桂樹の葉から完全に遠ざからねばならぬ

とのことであるが、のみならず他のあらゆる種類の樹木も大切にしなければならない。

ゲリウス (『アッティカの夜』 IV 11,9ff.)

(9)しかし豆が忌避されたというこの誤りの原因は、エンペドクレス (彼はピュタゴラスの教えにしたがった人であった) の詩の中に次のような詩句が見出されたためであったと思われる。

惨めな者たちよ、余りにも惨めな者たちよ、キュアモス〔豆〕から手を遠ざけよ。

(10)すなわち大多数の人が「キュアモス」でもって豆が意味されており、それが通常のいい方であると考えたのである。しかしエンペドクレスの詩を一層細心に、かつ一層の学識をもって判定した人は、ここでの「キュアモス」は鞞丸を意味しており、鞞丸がピュタゴラス派のいい方で暗に、そして象徴的に「キュアモス」と呼ばれたのだといっている。というのも、それは αἴτιοι τοῦ κρεῖν [妊娠の原因] であり、人間を生み出す力を付与するものだからである。したがってエンペドクレスがこの詩句でいわんとしたことは、豆を食べることからではなく、色欲の氾濫から人を遠ざけることだったのである。

ディオデュモス (『農事記集成』 II 35,8)

最初にアンピアラオスが夢のお告げによってキュアモス〔豆〕を控えた。またオルペウスの次のような詩句が流布している。

惨めな者たちよ、余りにも惨めな者たちよ、キュアモス〔豆〕から手を遠ざけよ。

カリマコス (断片 128 [ゲリウス『アッティカの夜』 IV 11,1 より])

豆から手を遠ざけよ、この有害な食物から。

われもまたピュタゴラスが命じたごとく、かく語る。

クラテス (『獣たち』断片 17 [I 135 K.])

われらから手を遠ざけよ。

[パピュロス] (ヘルクラネウム・パピュロス n.1012, col1.8, *coll.alt.* VII 15)

「知」(σοφίην) [カリマコス『碑銘詩』 7,3 - 4 (共通の語形についての議論の用例として)] : なぜなら「伝令たちは叫ぶであろう (φθένξονται)」に対して「ヘラス [ギリシア] は叫ぶであろう (φθένξεται)」となることは明らかであるが、その意味しているところはひとつである。エンペドクレスのもとでも、彼が次のようにいうとき、同じことが起きている。

アイギス [山羊皮盾] 持てるゼウスの屋根葺かれし館も、

ハデスの痛ましい叫びに満ちた館の屋根も、その者を決して受け入れぬ。

スミュルナのテオン (『プラトンを読むための数学的事項に関する解説』 15,7)

〔プラトンの〕政治論の伝承もまた同じようにある種の浄め〔カタルモイ〕を第一義としている。例えば然るべき学問における子供時代からの鍛練である。エンペドクレスは

五つの泉から堅固な青銅で〔水を〕切り分けて  
浄めねばならないと語っている。

144

プルタルコス (『怒らないことについて』 16 p.464 B)

悪業から遠ざかるべし  
とするエンペドクレスの言を、偉大かつ神的であるとわたしは考えた。

145

クレメンス (『プロトレプティコス』 2,27)

実にこのようにしてかつて無法の子であったわれわれは・・・今や神の子となった。だがあなた方の詩人であるアクラガスのエンペドクレスでさえ〔次のようにいって〕あなた方のもとを逃げ出しているのだ。

このゆえに汝らは恐ろしい悪業で心を乱しつづけ、  
惨めな苦しみから心を救い出すことは決してなかりう。

146

クレメンス (『雑録集』 IV 150)

エンペドクレスもまた、知者の魂は神々となると主張し、およそ次のように書いている。

そして最後に彼らは地上の人間どもの間に立ち現われ、  
預言者となり、頌歌の詩人となり、医者となり、君主となり、  
そしてそこから高まって、誉れいやまされる神々となる。

147

クレメンス (『雑録集』 V 122)

だがもしわれわれが敬虔に、そして正しくこの世の生を送るなら、この世においては幸福に、この世から退去した後にはなお一層幸福に生きることになる。すなわち、われわれはある時間内で幸福を手にするばかりでなく、永遠の内に休らうことができるのであって、

他の不死なる神々と竈をひとつにし、食卓を共にし、  
人間どもの苦しみに与ることなく、破滅の憂き目を見ることもなし  
とエンペドクレスの哲学詩が語るごとくになるであろう。

148・149・150

プルタルコス (『食卓歓談集』 V 8,2 p.683 E)

それというのも、とりわけその人〔エンペドクレス〕には、文体を美しくするために、形容詞の中でも最も見栄えのするもので事柄を華やかに着色するかのよう、輝かすという習慣がなく、それぞ

れの形容詞を何らかの実体や能力を表示するためにのみ用いるからであって、例えば魂を取り巻く身体を

死すべきものを覆う大地

とか、空気を

雲を集めるもの

とか、肝臓を

血に富んだもの

といているがごときだからである。

151

プルタルコス (『愛をめぐる対話』13 p.756 E)

なぜなら、エンペドクレスはアプロディーテを「生命を授ける女神」と呼び、ソポクレスは「実り豊かな女神」と呼んでいるが、いずれもまったく適切でふさわしい呼び方だからである。

152

アリストテレス (『詩学』21. 1457 b 22)

人の一生における老年と一日における夕方は同じ関係にあるからである。そこで人は夕方を一日の老年といたり、あるいはまたエンペドクレスのように、老年を「人生の夕方」ないしは「人生の落日」といたりするのである。

153

ヘシュキオス (『辞典』)

「バウポー」(βαυβώ) : デメテルの乳母 [の名]。それはまたエンペドクレスにおいては「お腹」を意味する。

153 a

スミュルナのテオン (『プラトンを読むための数学的事項に関する解説』104,1)

ところで胎児は、エンペドクレスが『カタルモイ』の中で謎めいた仕方で語っているところによれば、7つの7日〔7週間〕で完成する〔体が整う〕ように思われる。

## 疑問断片

154

プルタルコス (『肉食について』I 2 p.993 C)

あるいは最初に肉食に手を染めたかの人々にとっては、その原因は窮乏であったとすべての人がいうのではなかろうか。すなわち不法な欲望に時を過ごす者たちや、必要物があり余るほどあって慢心し、自然に反したアブノーマルな快樂に耽ける者たちがそういった行為に及んだということではないのであって、もし彼らがこの場で感覚を取り戻し、声を得たなら、次のように語ることであろう。「おお、至福にして神に愛されし現在に生きる君たちよ、君たちは何という人生を引き当てて生涯を享受していることか、またよきもので満ちあふれた土地を割り当てられていることか。どれほど多くのものが君たちのために生え出で、どれほどのものが収穫されることか。畑からどれほどの富を得ることができ、果樹からはどれほどの悦びを摘み取ることができることか。君たちにとっては血で汚れるま

でもなく贅沢に暮らすことは可能なのだ。だがわれわれはどうかといえば、われわれに示された人生と時代は極めて陰鬱で恐ろしいものであった。われわれはその最初の出生からしてどうしようもなくひどい窮乏の内に投げ出されていたのだ。さらに空気が濁った定めがたい水分や火や風の嵐と混ざり合って、天と星を覆い隠していた。未だ太陽はふらふらとさまよって定まるところなく、確固たる走路も有さず、

曙と日没を分けることもなければ、また一巡して元に戻すこともなく、

実り豊かな蕾の花冠を冠した季節で縁どることもなかった。

また大地も河川の無秩序な流れによって辱められ、

その多くの部分は沼によって形を損なわれ、深い泥と不毛な茂みや森林によって荒廃していた。また農産物を生産する道具も工芸のための道具もなければ、知恵の仕組みといったものもなかった。飢えはいかなる猶予も与えず、また当時は小麦の種が年毎の季節を待つこともなかった。泥さえ食らい、木の皮を貪り食い、芽の萌え出た草とか葦の根のごときものが見つかればそれが幸運であった時に、自然に反して動物の肉を食用に供したとしても、そこに何の不思議があろうか。団栗を試し、食したときには、悦びのあまり樗やぶなの樹の周りで輪舞し、それを命を授けるものとか母とか乳母と人々と呼んだものであった。さてこれがその当時の生活が知った〔唯一の〕祭りであって、その他のすべては苦悶と陰鬱とのごった混ぜでしかなかった。だが現在に生きる君たちを〔一体〕どのような狂気と狂乱が手を血で穢すことへと導いたのであるか。必要なものをあり余るほど有する君たちを……。」

154 a

プルタルコス（『肉食について』 II 1 p.996 E）

そして交わりの酒が飲み干されたのであった。

産みの苦しみと苦痛、欺瞞と悲嘆を混ぜ合わせた  
キルケの混酒のごとき酒が。

154 b

[アラトス『天象譜（パイノメナ）』 131f.に同文の引用文]

154 c

『スーダ』（「ただちに」の項）

「ただちに」（αὐτίκα）：諺に、

植物でも、実り豊かとなるうものはただちに明らかになり  
とあるように、その最初の出發からしてただちによき結果が見て取れる場合にいわれる。

偽作断片

155

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』 VIII 43）

また彼ら〔ピュタゴラスとその妻テアノ〕の間にはテラウゲスという名の息子があつた。そしてこの人は父の跡を継ぎ、ある人たちによれば、エンペドクレスを指導したとのことである。事実ヒッポ

ボトスはエンペドクレスが次のように語ったと述べている。

テラウゲスよ、テアノとピュタゴラスの名高き息子よ。

156

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』 VIII 61）

さらにまたエンペドクレスは彼〔パウサニ阿斯〕に寄せて次のようなエピグラム〔碑銘詩〕を作った。

アンキトスの息子、アスクレピオスの子孫たる男子、医術者と  
〔正当に〕呼ばれし医者パウサニ阿斯を、祖国ゲラは育てり。  
彼はひどい苦しみにて衰弱せし多くの人々を  
ペルセポネの奥宮より連れ戻せり。

157

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』 VIII 65）

アクロンの息子、アクラガスの最高〔アクロン〕の医者アクロン、  
その墓所はいと高名〔アクロタテー〕なる祖国の高き〔アクロス〕岩山なり。  
だがある人たちは二行目は次のようであったとしている。

その名高き〔アクロス〕墳墓はいと高き〔アクロタテー〕山頂を占めり。  
若干の人はこれをシモデモスのものとしている。

158

ヒエロクレス（『黄金詩篇』 24〔ストバイオス『倫理学抜粋集』 II 143,8〕への注解）

そしてアテ〔禍い〕の女神の牧場を逃れんとする者の欲求はアレテイア〔真理〕の女神の牧場へと急ぐ。かつて彼は衝動によって翼をもぎ取られてそこを去り、「至福の生を失って」この土から出来た身体の内に入ってきたのであった。

159

アリストテレス（『生成消滅論』 A 8. 325 b 19）

他方エンペドクレスの場合には、元素以外のものが元素にいたるまで生成し消滅するという事は明らかであるが、それら元素そのものの「集積せる大きさ」がどのようにして生成し消滅するのか明らかでない …。

### C エンペドクレスを思わせる表現

1

プラトン（『パイドロス』 248 B ff.）

だが何のために真理の野を見ようとしてかくも多くの努力が傾注されるのであろうか。それは外でもない、その牧場から魂の最も優れた部分にふさわしい牧草が得られるからであり、そして魂を軽や

かに飛翔させる翼の本性がそれによって養われるからである。アドラスティアの掟は次のごとくである。神にしたがい、真なる存在の一部でも見て取った魂は、いずれも次の巡りまで禍を受けることはない。そして〔一巡する度に〕常にそうすることができるのなら、永遠に損なわれることはないであろう。しかし〔もはや〕したがうことができなくなって真実を見なくなったとき、あるいはまた何らかの不幸に襲われ、忘却と悪徳に充たされて重荷を背負うことになり、重くなったことで翼をもぎ取られて地上に落下したときには、法は次のように定める。すなわち最初の出生においてはいかなる動物の中にも植えつけられないが、しかし〔この世に生まれてから〕最も〔真理を〕見た魂は知を愛する者とか美を愛する者、あるいは樂を好む者とか恋を愛する者となるべき人間の種族に植えつけられ、二番目の魂は遵法に篤く、あるいは軍事や統治に優れた王となるべき人間の種族に、三番目の魂はあるいは政治に、あるいは家政に、あるいは金儲けに秀でた人の種族に、四番目の魂は労を厭わぬ体育家とかあるいは身体の治療に携わる人の種族に、五番目の魂は占いとか秘儀に係わる生活を送る人の種族に植えつけられるべきであると。六番目の魂には詩人とかあるいは何か他の模倣に係わる人の生が適合し、七番目の魂には職人とか農夫の生が、八番目の魂にはソピストとか民衆扇動家の生が、九番目の魂には僭主の生が適合するであろう。さてこれらすべてにおいて正しい生を送った者はよりよい運命に与り、不正な生を送った者はより悪しき運命に与る。なぜならそれぞれの魂はそれがそこからやってきたものと同じところへ一万年は帰り着かないからである（それだけの時がたたないと翼が生えないのである）。ただし正真正銘知を愛求した者や愛知と共に美しい少年に思慕した者の魂は別であって、それらは一千年の周期が三度巡りきたとき、もし三度ともつづけてそのような生を選び取ったなら、そのようにして翼が生じて、三千年目に飛び去って行く。その他の魂は最初の生を終えると裁きにかけて裁かれ、そのあるものは地の下の仕置場に赴いて罰を受ける。またあるものは女神ディケーによって天上のある場所に引き上げられ、そこで人間の姿において送った人生に値した生を送る。そしてその両者とも千年目に第二の生を籤で選ぶためにやってきて、それぞれが欲するような生を選び取ろうとする。人間の魂が動物の生の中に入るのも、かつて人間だったものが動物から再び人間に帰るのも、ここで起こるのである。